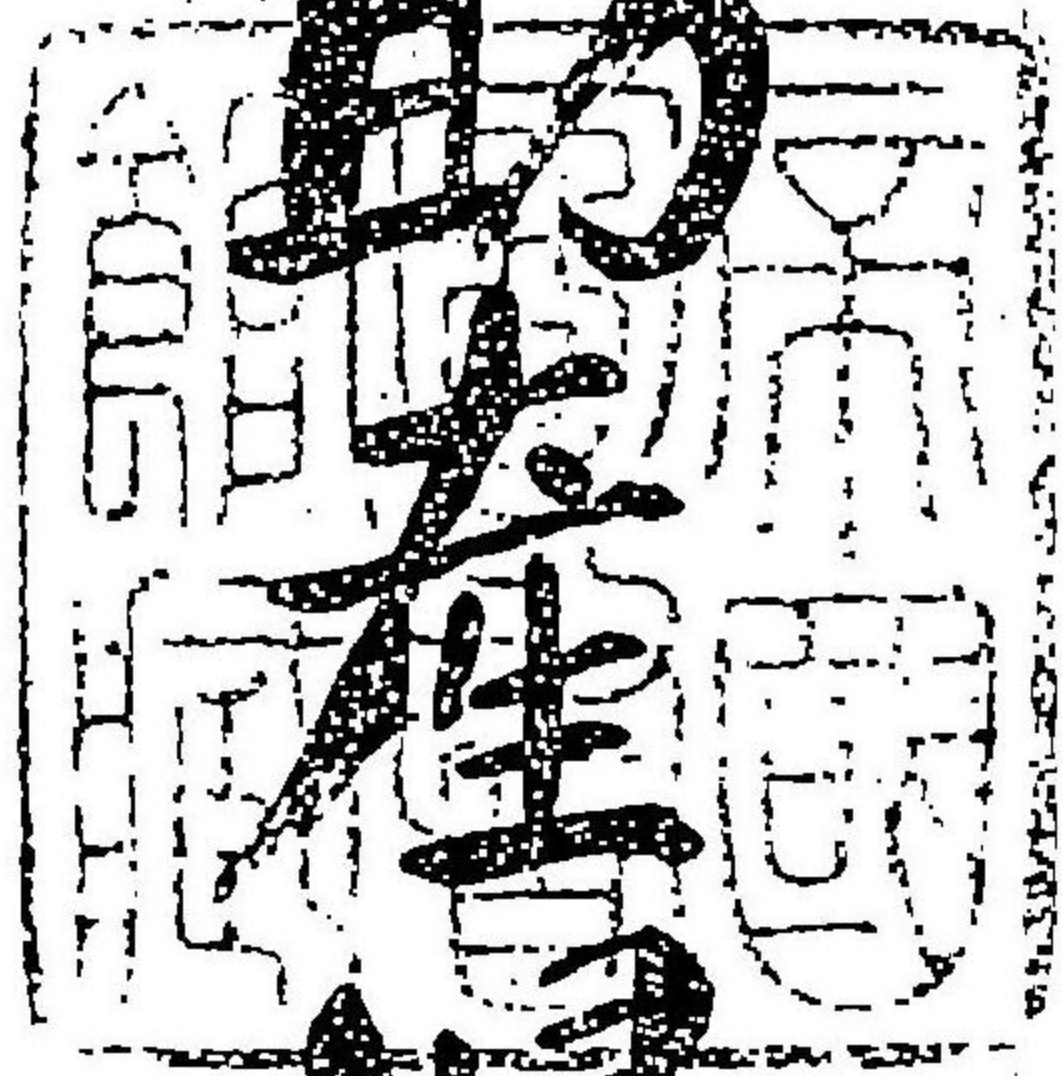


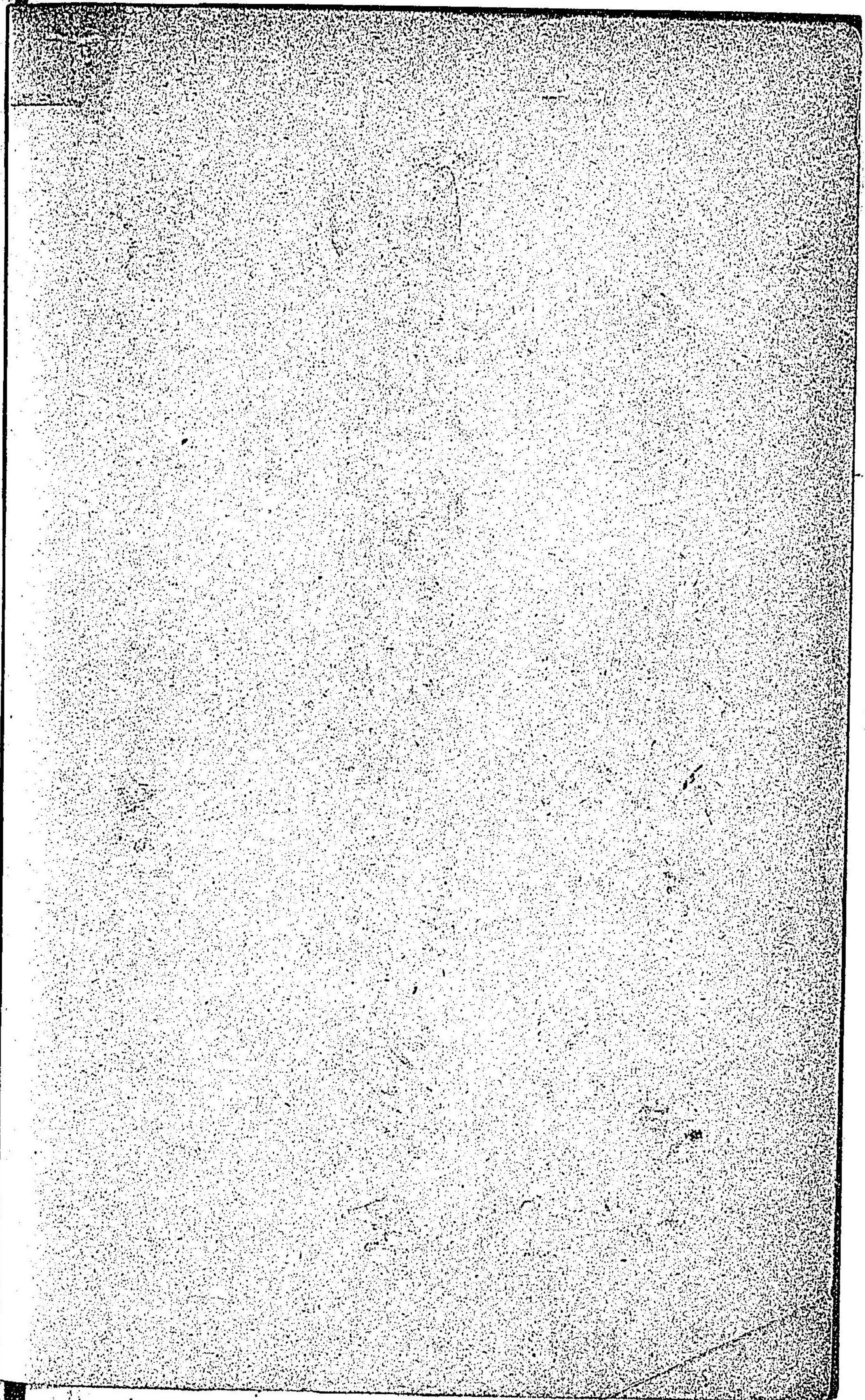
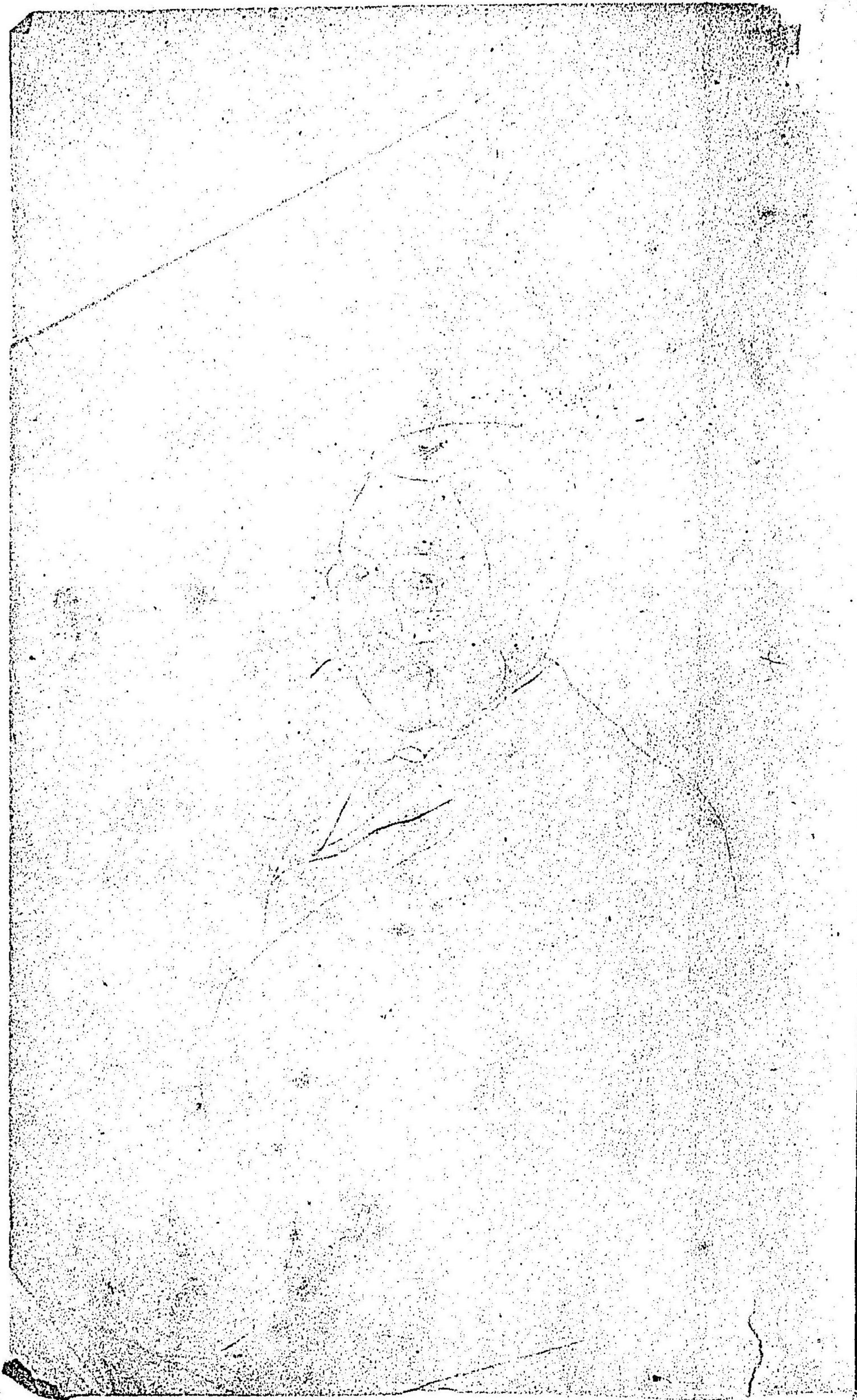
醫學博士緒方正清著

助產婦學講義全



東京 丸善株式會社

明治
39 4 5
内交





清 正 方 緒 士 博 學 醫

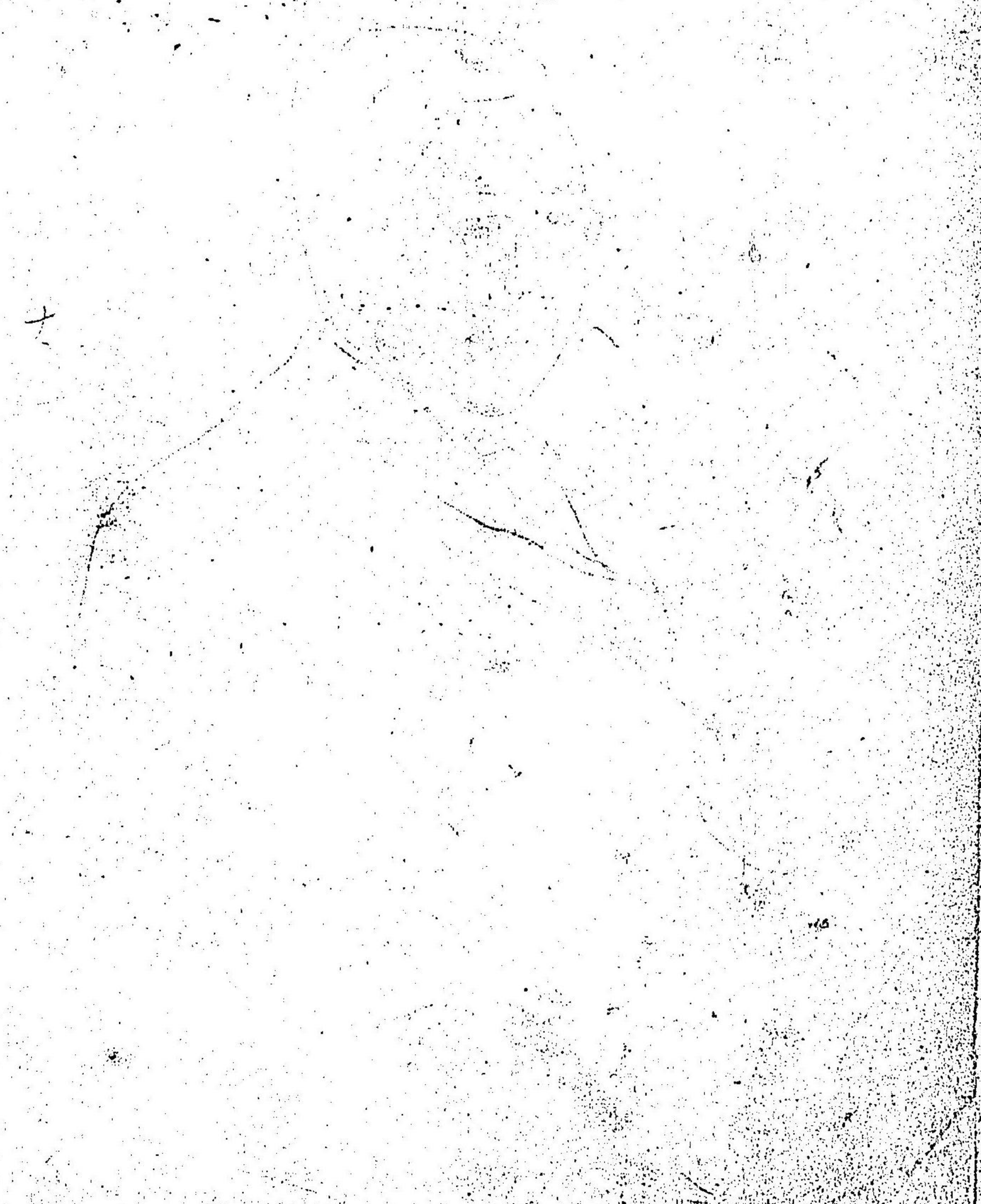
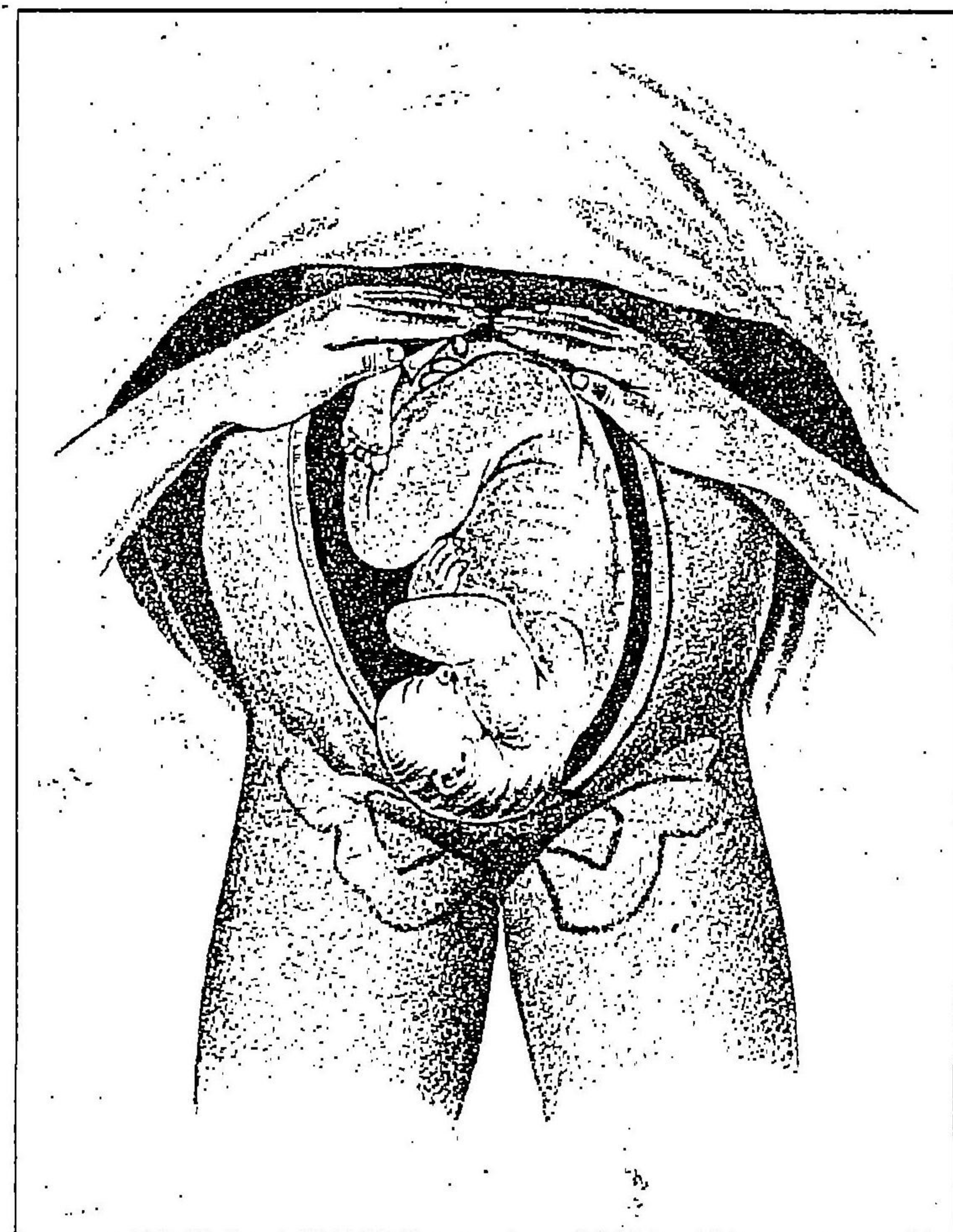
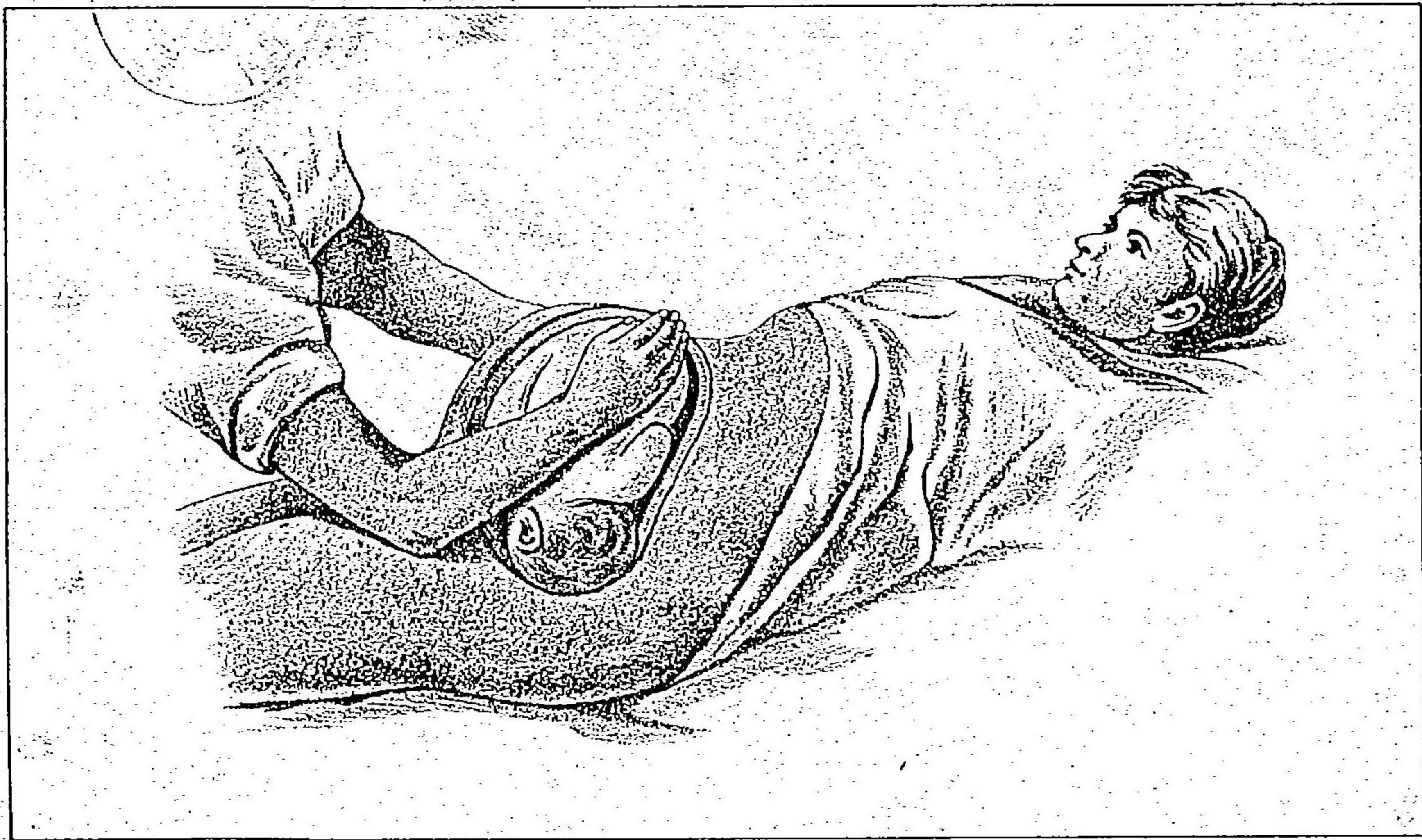


表 一 第



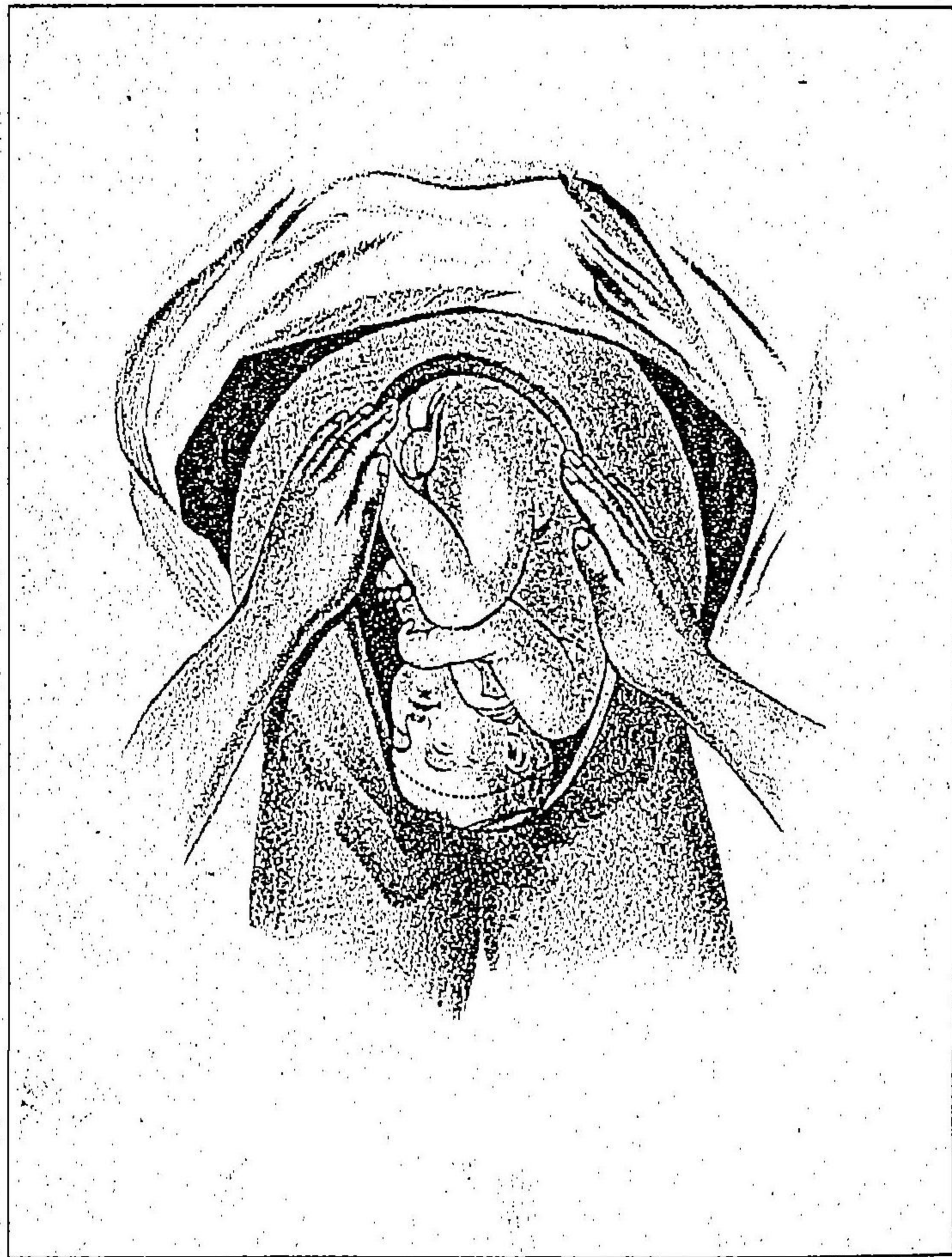
法 查 檢 外
式 一 第

表 二 第



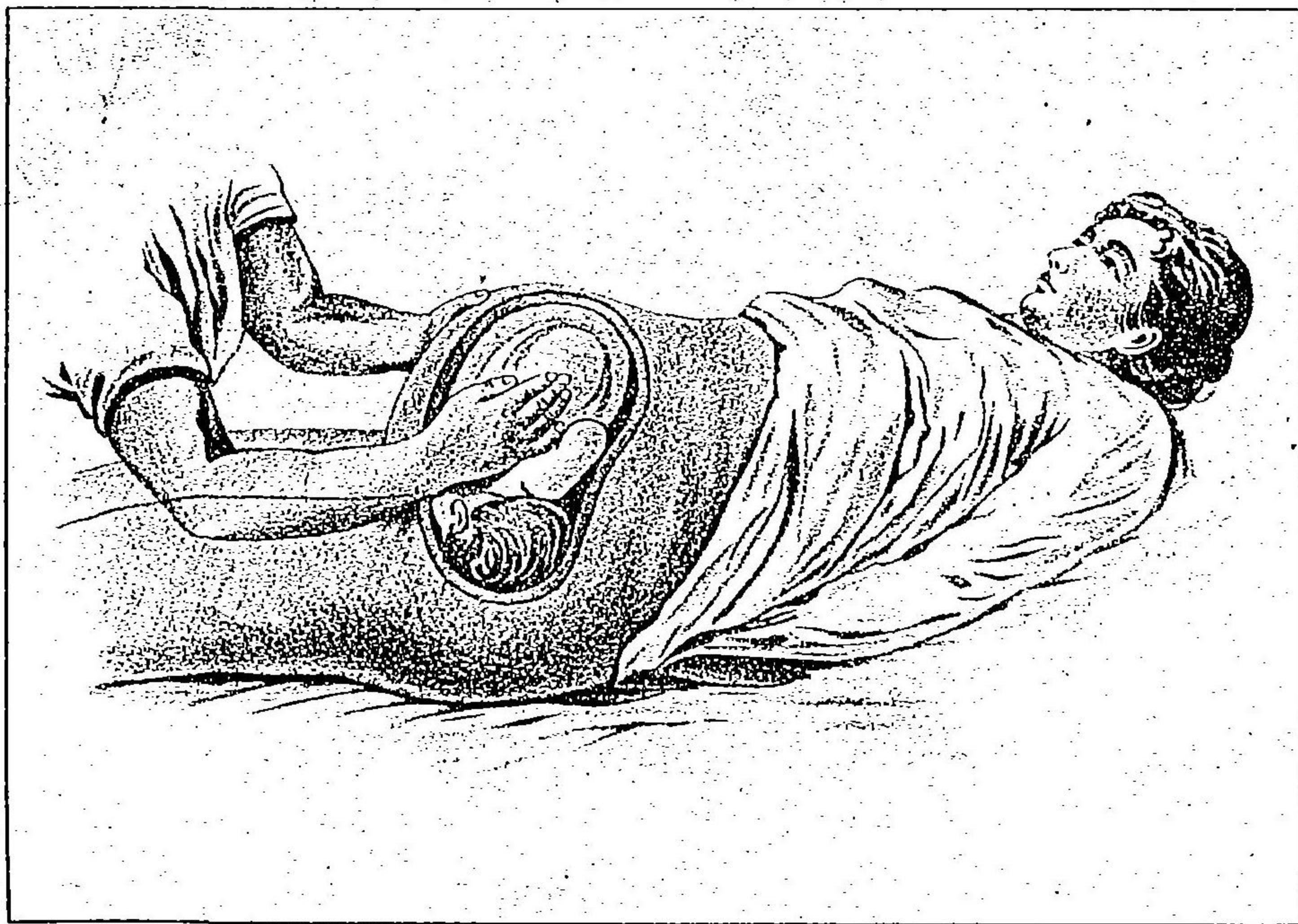
法 查 檢 外
式 一 第

表 三 第



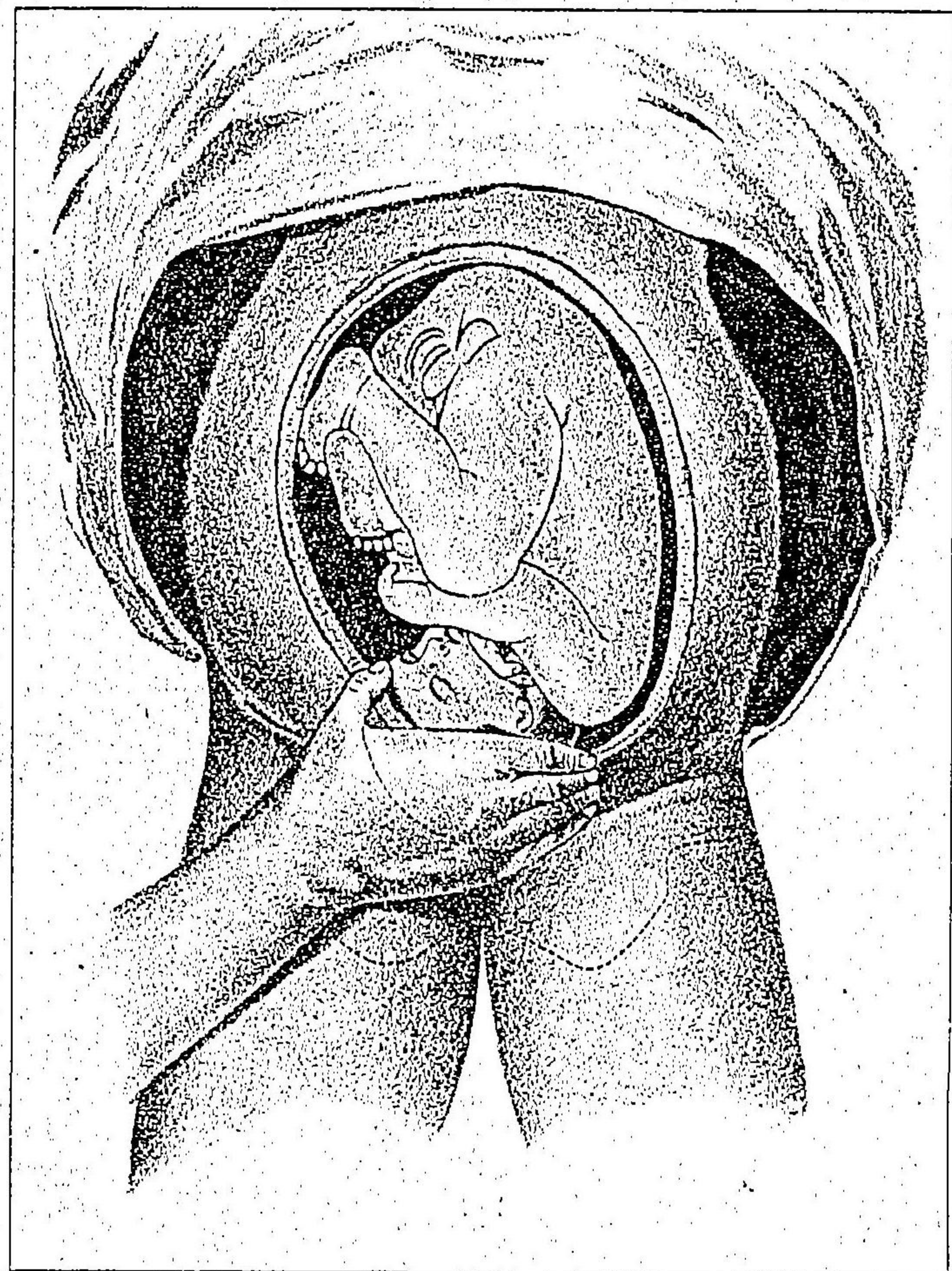
法 查 檢 外
式 二 第

表 四 第



法 查 檢 外
式 二 第

表 五 第



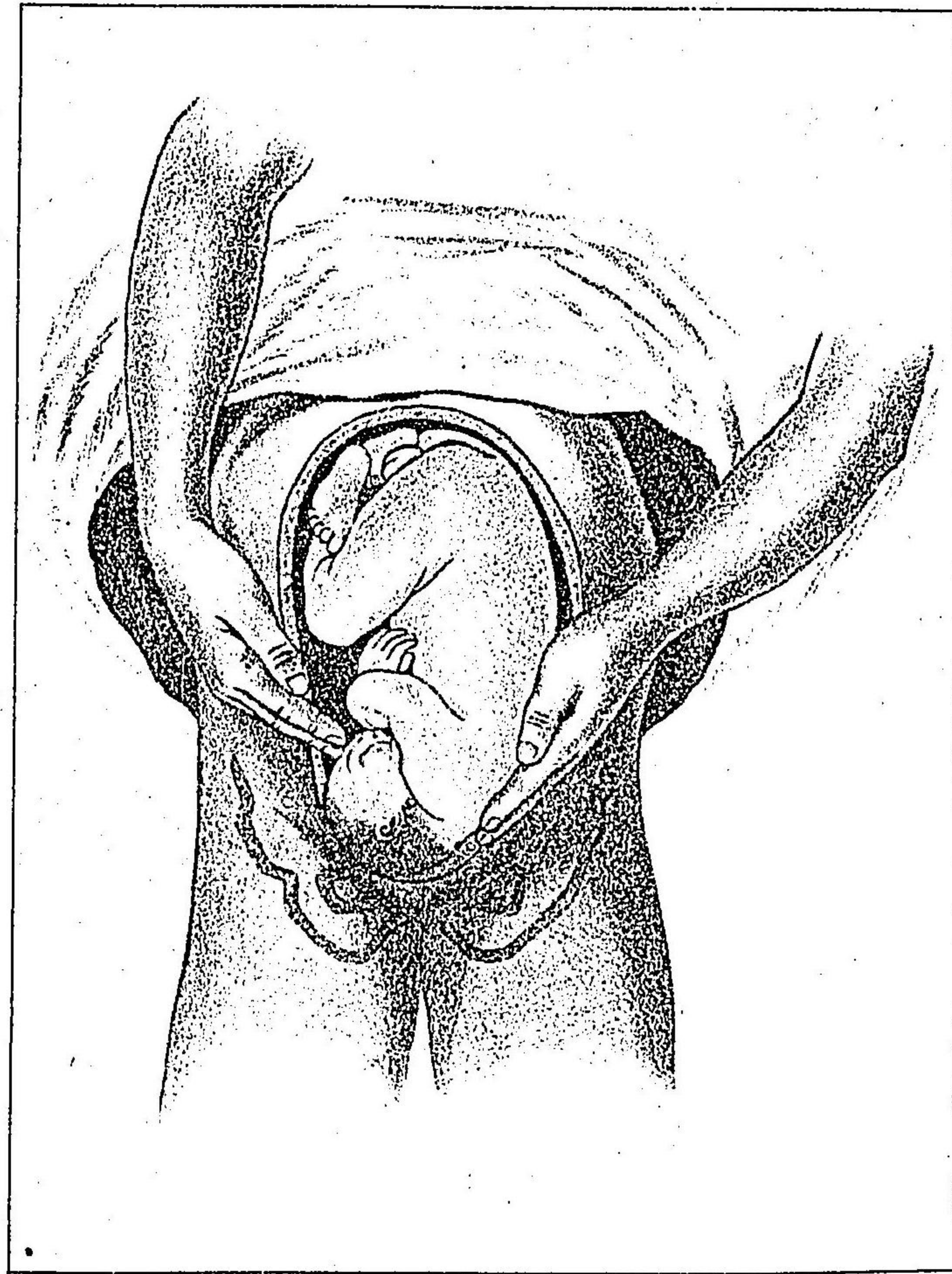
法 查 檢 外
式 三 第



外檢三式

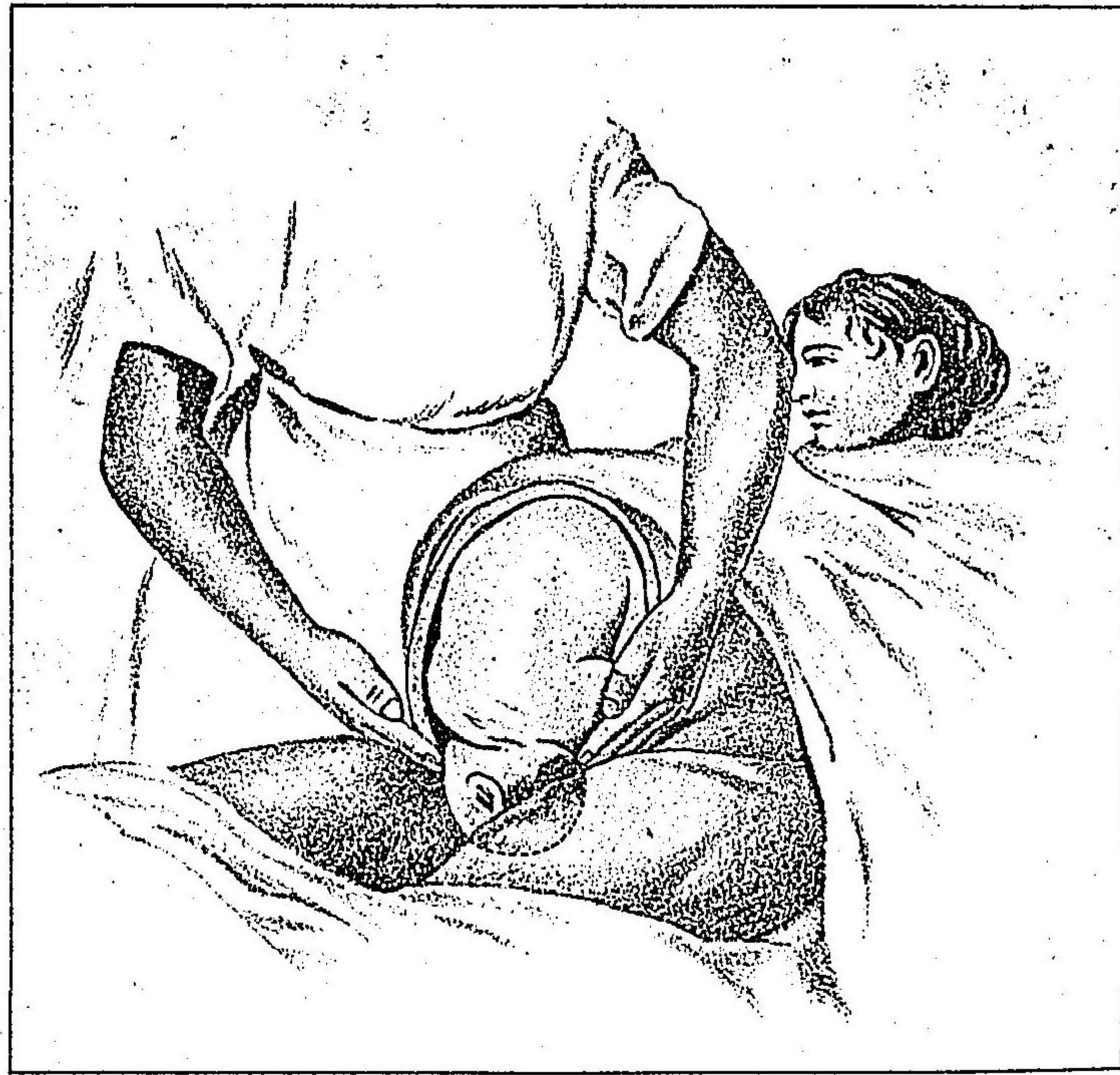
第六表

表 七 第



法 查 檢 外
式 四 第

表 八 第



法 查 檢 外
式 四 第



助産婦學講義

緒言

我國の外邦と親交を訂結せし以來烏兔匆々星移り物質換りて茲に三十有餘年此間我國運騷々として進み今や外邦と相對して毫も譲るところなきに到りぬ殊にこたび日露戦争起るや海陸俱に連戦連捷し威風堂々として其勢ひ宛も飛龍雲に舞ひ猛虎風に嘯くの慨ありて列國をして後に膛若たらしめたりき

然りと雖も戦争は實に世界に於ける最大なる悲惨事にし
て財政に人命に夥しき損礙を蒙ることを免れず其財政の
損害は經國の劃策によりて之を補填するの途なきに非ず

と雖も人命の損害に至りては之を如何ともする能はず唯
向後衛生の進歩を謀り國民の體格を強健ならしめて之を
回復すべきのみ
是に於て乎益々醫師及助産婦の必要を感ず我國助産婦の
状態を見よ一方に於ては依然として文盲の老婆の屈腰倚
杖の身を以て尙この重大なる任を弄し徒らに舊習に拘泥
して進取の志氣なきものあり他方に於ては之に反して日
進の學術に基きたる殺菌的方法は勿論技術に至る迄間然
するところなきものあり何ぞ醜陋相離るゝの甚しき
助産婦にして普通學の素養あり進歩したる科學の大要に
通じ高尚なる助産婦學に習熟し熱心に其職責に従事すれ
ば娩産に臨み起死回生の妙術を施すことを得れども若

し舊習を固守し人身の造構及其生理的機能は勿論助産婦
學を審にせざるが如きことあれば其結果は母兒兩體の生
死に關する危険を將來するに至る助産婦の技術の影響す
る所實に重大なりと言ふ可し
國を富まし兵を強うするの基礎は民生を重ずるにあり民
生の強弱は嬰兒の健否如何に原き嬰兒の健否は夙に母の
胎内に於ける状態に胚胎す
斯の如く母兒の健否は一家の興廢より延ひて國の盛衰に
關するものなるを以て見れば助産婦の責任や實に碩なり
と云ふべし
現時學業の發展と共に適當の科學的智識を有し産婦をし
て安全に分娩を遂げしむ可き公職を有する婦人に對して

在來の産婆なる名稱を襲用するの當を得ざることには既に世人の認むる所なり従て進新の試験に合格し素養ある産婆に對しては宜しく助産婦なる名稱を與ふ可しは予が年來の持論にしてこれを天下の同志に放言せしは實に今を去る十有餘年の以前なりしが世人は漸く其改名の必要を解し近年大に之を注意するの士多く爲に産婆と助産婦との名稱の差に依りて其新舊の地位を鑑別し得るに至れり

予は在歐中よりして夙に此改稱を企圖し次で歸朝以來是れが鼓吹に努めたりしが其後中外醫事新報の如きも予の感を俱にし産科學を幾んど助産學と改むるに至れるのみならず關西地方は勿論他府縣に於ても亦助産婦の名稱を

用ふる者多きを觀るに至れり

獨り本邦に於けるのみならず獨逸國マクデブルク洲の醫務顧問兼助産婦教育所長ダールマン氏の如きも今回制定せらる可き改正産婆規則に對して予が企圖と其揆を一にする希望を現はせり輒ち産婆の業務は産褥熱の原因の知悉せられし以來其權利義務を規定するの必要を生ぜしを説き而して産婆術は益々其地位を向上し教育ある令夫人及び令嬢等の之に従事する者多數なるに至る可きを豫期しへーばんめん Hebammen なる語は畢竟千二百年時代より來りし者にして最も卑賤の意味を含蓄せるを以て現今の如き開明の時代に之を襲用するは斯學の發展を阻礙すること多く到底忍びて之を用ふる能はずと絶叫せられたり

其他助産婦に必要な教科書の如き獨逸國にありては助産婦教育は専門の大家に命じて教科書を編じ一定の軌道に従ひて之を行ふと雖も我國に於ては未だこの企なく爲に後進の修業者をして助産婦學海に迷はしむるに至る是に於て予輩は助産婦教科書の必要を感じ著述に従事せんを企圖したれども院務繁多の爲めに荏苒其意を果たすことを得ず教々たる慷慨漏すに由なく朝夕憂慮して措く能はざりしが丸善書店の頻繁なる請求に依り漸く之れが著述に着手せり

予が助産婦教科書に就て始めて其必要を感じたるは十有餘年以前なりき而して予は往年獨逸國留學中エナ大學にシユルチエ氏の門を叩きしことあり

氏は産科婦人科の大家にして其業績の燦爛たるは何人も已に知悉する所にて氏が著述の助産婦學は遠く業に明治十年丸善書店に於て邦語に譯し汎く我國に用ひられ至大の効績を斯學の進歩に貢獻したり予は此時其恩惠に浴したる師に譯書を示せしに師問ふて曰く貴邦の醫學は駿々として進歩すと聞く助産婦の教育状態も亦斯の如き歟如何と予應へて曰く東洋に於ては助産婦學は尙未だ幼稚にして固有の良書に乏しく其参考書の如きも只に師の第三版の譯書あるのみと氏更に曰く眞に然る乎果して然らば予の幸ひ是に過るなしされど予が舊著の助産婦學は應に今日の進歩に適當せざる所あり故に其改版毎に嶄新の學說を加へ圖畫を改訂し字句を校正し遂に數版を重ねるに

到れり矣若し此新書を以て貴邦に譯述刊行するを得ば予の最も満足する所なり希くは足下之を貴邦に紹介せよ」予は歸朝以來院務の爲に此恩師の意志を達すること能はざりき然るに明治三十年ライプツヒ大學教授レフポルド及びツアイフェル兩氏著述の助産婦學は學術に忠實なるレオポルト氏の好意に依り波濤萬里の異域なる予が机上に惠贈せらるゝを得たり其際之と相前後して恩師よりして新版の著書と精巧なる銅版數百個を惠送し來るの報道に接す依て予はレオポルド及ツアイフェル兩氏の著を邦語に譯し出版せしめしが之と前後して丸善書店も亦シユルチエの新著を再版したり而して此兩書は共に世人の歡迎する所と成り纔かに二箇年にして殘本なきに至れり爾

來數年の間に木下博士の産婆學講義高橋辰五郎氏の産婆學講本及び濱田佐伯兩氏の産婆學並に榊博士の著書等世に出でゝ盛んに行はれ助産婦學の進歩に貢獻するところ甚だ多かりき

今や予は以上の所信に依りて此新書を公にし題して助産婦學講義と云ふ抑も本書は人身解剖編に於ては生理學の大要を記述せりこれ蓋し我邦助産婦の普通教育を觀察するに其大半は幼稚にして複雑なる解剖を理解するも生理的作用を審にする者なく從て實地に臨みて困難を感じるここ少なからず故に他の教科書に於ては未だ見ざる所なれども予輩は之を必要として特に記載したり

助産婦學に於て助産婦に必要な妊娠分娩及び産褥の學

説の如きは其説明少しく高尚に過ぐるの嫌ひ無き能はず
と雖もこは助産婦の技術を應用するに必ず知らざるべか
らざるこなるを以て是を詳述せり然れども其技術に到
りては産科醫と助産婦との領域を明かならしめん爲助産
婦に許可し得可き範圍内に於ては可及的詳細に記載し其
他に至りては是を省略せり之を認めて繁簡其當を得ずこ
なすこごなかれ

歐洲に於ける助産婦界は一般に其學生の普通教育發達し
各大學に産科院を設置し助産婦をして其學を教習せしむ
るの便利ある而已ならず或は複習科を設けて實地演習を
遺憾なく習熟し得るの便あるも我國に於て未だ斯の如き
設備なきは實に遺憾と云ふの外なし

子宮内に於ける胎兒の挽出術回轉術及び胎盤剝離法の如
きある場合に限りて助産婦に手術を認許す可きや否やの
問題は歐洲に於ては既に一定の規則を設けたれども我國
の如き助産婦學の幼稚なる國に於ては斯の如き手術法を
助産婦に許可するは其當を得ざるこにて助産婦學教科
書に記載するの必要なき乃已ならず是等の手術は濫用の
虞あるを以て許可すべからざるものと認む然れども或る
危険ならざる場合に限り助産婦をして手術を行ふこを
許すの止を得ざるは日常に屢々遭遇する所にして我邦諸
氏の教科書にも之れを説明せしものあれば予も暫らく茲
に記述せるこごなしぬ

歐洲に於ける最近の産婆教科書に關する布令は能く上述

の理由を明かにせり乃ち獨逸帝國普魯西王國が千九百四年に發行せし教科書の序文は以上の可否を論じ吾人をして遺憾なからしむる者あり左に之れを抄録すべし

千九百二年十二月教育醫務大臣が議長として開催せられたる醫事制度の學術議員會に於ては全員一致を以て普魯西國助産婦制度を改正するの必要なることを承認せり而して他に重要な決議をなせるの外議員會は普國助産婦教科書を全然改定するを以て最も緊要なることを覺知せり

大臣は翌年四月醫務局員大學婦人科長及び州立助産婦教育所長より成れる委員會を招集し助産婦教科書編纂に對する綱領を協議し且つ決定を経たる後ち大臣はゲッテンゲン大學婦人科長樞密醫官教授ドクトルルンゲンに原案の起草を託せり而して其起草せられたる案文は更に狭き委員會の討議に附し字句の修正は教育醫務大臣の醫務局に於て決定せられたり教科書を記述するに當り其職權を擴張することなくして漸次に教育ある

人物を助産婦社會に採用す可しと云ふ王國政府の意見に留意し且つ産褥熱の豫防及び撲滅に就き制定せられたる規則は特に十分なる説明を務めたり

隨て本書は解剖及び生理の説明に於て深きを加え一般病理の一章を増加し創傷疾患の發生創傷の保護法及び熱性産褥疾患の記載を見るに至る而して昇秉は手の消毒に對し義務的に應用す可きこととなれり

之れに反し助産婦施術上の職權は着しく制限せらる即ち骨盤端位の挽出法は抹殺せられ回轉術の記載は附録中に貶せらる而して回轉術は自今以後大臣より指定せられたる一定の縣に限り十分定まれる條件の下に於てのみ助産婦は之れを行ふことを得可し而して回轉術は此等の縣に於て教示せらるゝ雖も其餘一般の助産婦教育には今後除外せらるゝものごす醫師の在らざる際に於て助産婦は手の解除及び兒頭の挽出をなし得可きことを規定せらる産婦の危急に際し胎盤剝離法を施すの任務は未だ不

用なりとなすこと能はず然りと雖も此場合に於て助産婦は胎盤剝離法を行ひるの後直ちに郡區醫に報告するの義務あり郡區醫は各個の場合に就き施術の實際に必要なりしかを検するものとす

本書説く所は予が十有餘年間助産婦教育所に於て講義し且演習したるところのものを幣原節氏が日常其講筵に陪して記録しそを更に予が全部精密なる注意を加へて校正せし者なり
斯の如く本書の著述に當りて幣原助手を勞したること頗る大なるを以て茲に一言して其の厚意を鳴謝す

明治三十九年三月

浪華眞田山寓居に於て

緒 方 正 清 誌

助産婦學講義目次

第一編 總論

第一章 助産婦の職務……………

一頁

第二章 助産婦の職務上に於ける要件……………

第三章 助産婦たるべき資格……………

第二編 人體の解剖及生理の概要……………

第一章 人體の構造……………

甲 身體の硬部……………

第一項 骨……………

第二項 軟骨……………

乙 身體の軟部……………

第一項 靱帶……………

第二項	筋肉	一五
第三項	脈管	一六
第四項	神經	一九
第五項	内臓	二三
第六項	皮膚	三五
第七項	粘膜	三六
丙 身體の流動體		
第一項	血液	三六
第二項	淋巴液	三七
第二章 人體の區別		
第一項	頭部	三八
第一節	頭蓋	三八
第二節	顔面	四〇
第二項	軀幹	四一

第一節	頸部	四一
第二節	胸部	四二
第三節	腹部	四二
第三項	四肢	四四
第一節	上肢	四四
第二節	下肢	四六
第三章 女子の骨盤		
第一項	薦骨	四七
第二項	尾骶骨(一名尾闋骨)	四九
第三項	骶骨(一名無名骨)	四九
第四項	骨盤の區別	五四
第一節	大骨盤	五四
第二節	小骨盤	五六
第三節	骨盤其他の要件	六一

第四章 男女體格の差異

六三

第五章 女子生殖器

六五

第一項 外生殖器

六五

第一節 乳房

六六

第二節 外陰部

六七

第二項 内生殖器

七〇

第一節 膾

七〇

第二節 子宮

七一

第三節 輸卵管

七四

第四節 卵巢

七五

第五節 附屬諸靱帶

八〇

第六章 腹膜

八一

第七章 子宮と膀胱及び直腸との關係

八三

附屬 日本婦人に於ける生體骨盤外検査の成績……八七

第三編 正規妊娠及其取扱法

一一五

第八章 正規妊娠

一一五

第九章 月經

一一五

第十章 人卵

一一七

第十一章 精蟲

一一七

第十二章 受胎

一一八

第十三章 妊孕卵の變化

一一九

第十四章 成熟卵

一二〇

第一項 卵膜

一二〇

第二項 胎盤

一二三

第三項 臍帶

一二四

第四項 羊水

一二五

第五項 胎兒……………一三六

第十五章 各月に於ける胎兒の身長
并に體重概算法……………一三一

第十六章 成熟胎兒……………一三三

第十七章 成熟胎兒の頭蓋……………一三七

第十八章 胎兒の子宮内に於ける状態……………一四〇

第十九章 胎兒の生理……………一四三

第一項 胎兒の榮養……………一四三

第二項 胎兒の血液循環……………一四四

第三項 胎兒の無呼吸及早時呼吸……………一四六

第二十章 妊婦の全身に現はるゝ變化……………一四七

第一項 生殖器の變化……………一四七

第一節 子宮……………一四七

第二節 膈及び外陰部……………一四九

第三節 月經……………一四九

第四節 乳房……………一四九

第二項 生殖器以外の變化……………一五〇

第二十一章 妊娠の徴候……………一五二

第二十二章 妊娠各月の徴候……………一五三

第二十三章 分娩期日算定法……………一六一

第二十四章 妊婦の検査法……………一六四

第一項 外検査法……………一六五

第一節 視診……………一六五

第二節 觸診……………一六六

第三節 聽診……………一七〇

第二項 内検査法……………一七三

第三項 雙合検査法 一八二

第二十五章 検査法に於ける一般の注意 一八三

第二十六章 初妊婦及び經妊婦の診断 一八五

第二十七章 胎兒死亡の徴候 一八八

第二十八章 數胎 一八八

第二十九章 妊娠の攝生法 一九二

第四編 正規分娩及其取扱法 一九九

第三十章 正規分 一九九

第三十一章 産道 二〇一

第三十二章 産出力 二〇三

第三十三章 正規分娩の経過 二〇七

第三十四章 分娩の持續時間 二二二

第三十五章 陣痛の種類及其作用 二二六

第三十六章 胎兒の位置并に其分娩との關係 二二九

第三十七章 正規分娩の器械的作用 二三五

第三十八章 分娩時に於ける胎兒の變化 二四三

第三十九章 後頭位に於ける内外検査并に分娩の器械的作用 二四四

第四十章 正規分娩の取扱法 二四七

第四十一章 雙胎分娩の経過及其取扱法 二九五

第五編 正規産褥の経過及其取扱法

二九八

第四十二章 正規産褥

二九八

第四十三章 生殖器の復故作用

二九八

第四十四章 乳汁の分泌

三〇四

第四十五章 褥婦全身の變化

三〇八

第四十六章 褥婦の取扱法

三一〇

第六編 異常妊娠及び其取扱法

三三二

第四十七章 異常妊娠

三三二

第四十八章 子宮増大に因する障害

三三九

第四十九章 腔内分泌物の異常

三四五

第五十章 子宮の位置變状

三四六

第五十一章 卵の異常

三五五

第五十二章 臍帶の異常

三六三

第五十三章 妊娠中胎兒の死亡

三六五

第五十四章 妊娠早期の中絶(乃ち流産)

三六七

第五十五章 流産の症狀及處置

三七〇

第五十六章 早産の経過及處置

三七六

第五十七章 子宮外妊娠

三七九

第五十八章 妊娠に合併する疾病

三八三

第七編 異常分娩及其取扱法

三九一

第五十九章 産出力の異常

三九一

第六十章 産道の異常

四〇四

(第一) 軟部産道の異常

四〇四

(第二) 産道附近に於ける臓器の異常…………… 四二二

(第三) 骨部産道の異常…………… 四一四

第六十一章 胎兒の異常…………… 四三二

(第一) 胎兒發育の異常…………… 四三二

(第二) 胎位の異常…………… 四三八

(第三) 胎勢の異常…………… 四九一

第六十二章 胎兒附屬物の異常…………… 四九六

(第一) 卵膜の強硬…………… 四九七

(第二) 臍帶の断裂…………… 四九七

(第三) 前置胎盤…………… 四九八

(第四) 胎盤の早期剝離…………… 五〇八

(第五) 胎盤の癒着…………… 五一一

第六十三章 産道の損傷…………… 五一二

(第一) 子宮内翻症…………… 五一二

(第二) 子宮破裂…………… 五一五

(第三) 子宮頸部の裂傷…………… 五一七

(第四) 膈及び外陰部の破裂…………… 五一九

(第五) 會陰破裂…………… 五二一

(第六) 骨盤關節の損傷…………… 五二四

第六十四章 無力性出血…………… 五二四

(第一) 胎盤産出前の無力性出血…………… 五二五

(第二) 胎盤産出後の無力性出血…………… 五二九

第六十五章 胎盤の遺殘…………… 五三二

第六十六章 妊娠時及び分娩時に於ける
生殖器の出血…………… 五三三

第六十七章 急性貧血…………… 五三六

第六十八章 産婦の疾病…………… 五三八

(第一) 子癩 五三九

(第二) 分娩中諸種の合併症 五四三

第六十九章 産婦の死亡 五四七

第八編 異常産褥及び其取扱法 五四八

第七十章 疼痛性後陣痛 五四八

第七十一章 子宮の復故不全 五四九

第七十二章 子宮位置の異常 五五一

第七十三章 不正なる悪露 五五二

第七十四章 膈及び外陰部の異常 五五四

第七十五章 便通の異常 五五六

第七十六章 排尿の障害 五五七

第七十七章 下肢の異常 五六〇

第七十八章 産褥熱 五六二

第七十九章 産褥に於ける淋毒 五六九

第八十章 産褥に於ける丹毒 五七一

第八十一章 産褥に於ける破傷風 五七一

第八十二章 産褥中の偶發病 五七二

(第一) 肺動脈の栓塞 五七二

(第二) 産婦の精神病 五七三

第八十三章 乳汁分泌の異常 五七四

第八十四章 乳頭の損傷 五七五

第八十五章 乳腺炎 五七六

第九編 初生兒の發育及其取扱法 五七九

第八十六章 初生兒發育の状態 五七九

第八十七章 初生兒の取扱法

五八二

(第一) 沐浴

五八二

(第二) 臍帶斷端の處置

五八五

(第三) 大小便の排泄

五八六

(第四) 全身の清潔法

五八七

(第五) 吐乳

五八八

(第六) 被服物

五八八

(第七) 臥床

五八九

(第八) 睡眠及び起臥

五九〇

(第九) 外出

五九一

(第十) 食物

五九二

(第十一) 齒牙發生時の變狀

五九四

第八十八章 人工營養法

五九五

(第一) 牛乳の撰擇

五九六

(第二) 牛乳の用法

五九六

第八十九章 乳母

六〇四

第十編 初生兒の異常及其取扱法

六〇九

第九十章 初生兒の假死

六〇九

第九十一章 初生兒の畸形

三

第九十二章 分娩時に生ぜる兒頭の變狀

六三五

第九十三章 骨傷脱臼及る顔面神經麻痺

六三六

第九十四章 初生兒眼炎

六三八

第九十五章 乳房の炎症

六四一

第九十六章 臍の疾患

六四一

第九十七章 鼠蹊脱腸及び陰囊水腫

六四四

附録

第九十八章 驚口瘡 六四五

第九十九章 口蓋の環狀潰瘍 六四六

第一百章 消化の障害 六四七

第十一章 乳兒脚氣 六四九

第十二章 初生兒黃疸 六五〇

第十三章 初生兒メレナ 六五一

第十四章 初生兒鞏硬病 六五二

第十五章 痙攣性疾患及び破傷風 六五三

第十六章 丹毒 六五五

第十七章 皮膚の疾患 六五五

第十八章 遺傳梅毒 六五八

助産婦學講義目次終

第一項 消毒薬 六六一

第二項 メートル及びグラムの改算 六六一

第三項 體温の検査 六六二

第四項 脈膊の検査 六六六

第五項 呼吸の検査 六六八

分娩記録一覽表 六六九

助産婦の義務及び責任 六七三

日本に於ける助産婦の規則 六七九

助産婦學講義

醫學博士 緒方正清 講義

第一章 助産婦の職務

國の盛衰は國民の強弱に關し國民の強弱は瓜々たる嬰
 兒の保育如何に關す而して嬰兒の健否は夙に母の胎内に
 胚胎する者なれば母兒を保護し産育の責に任ずる助産婦
 の技術たるその影響する所また重大ならずやされば助産
 婦たらんと欲する者は常に己れが職務の貴重なるを忘る
 ることなく學術にも充分熱達せんことを要す
 凡そ助産婦の任務は左の四個條より成るものとす
 第一項 妊婦、産婦、褥婦及び初生兒を看護しその攝生法

を教示すべし殊に分娩に際しては補助を與へ
痛苦を軽減し自然的娩出を容易ならしむるも
のなり

第二項

妊娠分娩又は産褥の異常を速に看破し時を過
たずして醫師に託せざる可からず

第三項

妊娠分娩又は産褥中急變ありて醫師の來診を
待つ能はざるに於て助産婦は危急の場合に限
り許されたる一二の産科手術を施し之を救助
せざる可からず

第四項

醫師の施術するに當り之が助手たるべきのみ
ならず悉く醫師の命令に従ひ適當の處置をな
すべし

第三章

助産婦の職務上に於ける要件

一 助産婦は最も善く實地に熟練せざる可からず

助産婦技術の良否は實に一人のみならず母兒兩體の
生死健康に關する處にして甚だ重要なる者なれば假令
學識卓絶なりと雖も機に臨む時は漫りに狼狽し若くは
必要の處置を等閑にして救ふ可からざる失策を醸すこ
とありさればとて徒らに實地をのみ練習し學問を放棄
せよとには非らず學理に通達せざれば尙ほ航海者にし
て恰も羅針盤を有せざるが如く之を處置すべき道を知
るに由なし故に助産婦たらん者は先づ充分に其學を習
得し後ち熟練なる師に就きて技術を磨き其事業に熟達
せんことを要す

二 助産婦は猥りに産科手術を行ふ可からず

素と産科手術なる者は助産婦の施すべき範圍内に非
ず若し猥りに之を行ふ時は却て甚だしき異常に陥らし
め大害を來すことあり然れども母兒兩體に危険なる徴
候を顯はし醫師の來診遅き時は止むを得ず一二の手術
即ち人工胎盤剝離法或は内回轉術を施さざる可からず
此場合に於ては果して手術に適するや否や或は該手術
に依て來るべき危険等を察知し嚴密なる防腐法を行ひ
學習せし方法の下に之を施すを要す

三 助産婦は自ら疾病を處置す可からず

凡そ助産婦の主旨は自然分娩を補助するに止まる者
なれば若し妊婦産婦褥婦等に疾病の發顯するを認むる
時は直ちに醫治を受けその命令に由り適當の處置をな
すべし然らざれば切要の時期を過ぎ去らしめ母兒兩體

の生命を損するに至るべし

四 助産婦は其業務を自重せざる可からず

都て妊婦産婦及び褥婦並に産兒の健否或は生死は一
に助産婦の處置適當なるや否やに關する者なれば學術
は勿論實地に熟達し眞實なる處置を施すに於ては人種
を強健にするの媒介にして必竟富國強兵の基をなす者
なれば助産婦たるものは自らその職務を尊び重んじ決
して己れの業務を賤む可からず

五 助産婦は徳行を嚴守せざる可からず

助産婦はその職務上より知り得たる總ての秘事を猥
りに他人に語るべからず殊に不具畸形疾病等の如きは
堅く秘密を守るを要するは勿論産家の經濟及び内情等

に關しても之を漏すが如きことあるべからずその他人
道の大義に遵ひ至善の徳行を守るべし之に由りてその
職務を完全に委すことを得べく産家よりも厚き信用と
尊敬とを受く可し然りと雖も若し墮胎及び小兒を殺傷
せしが如き法律上の罪惡を犯せることを知らばその趣
を届出づべし

六 助産婦は勇氣を蓄へ沈着を主とし慈愛心に富

まざる可からず

分娩は女子一世の難關なれば如何なる婦人と雖も之
を顧慮せざるはなく殊にその困難なる者に在りては只
助産婦のみ依頼するが故に慈愛心を以て懇ろに之を
訓慰し若し生命危急に際し一家悲しみ沈むの場合に立
ち至ると雖も決して狼狽することなく萬事前後の状況

に鑑み技術を斷行するの勇氣と其順序を誤らざるの沈
着とを要す

七 助産婦は寡欲にして且つ其職務を完全に盡さ
ざる可からず

助産の術たるその貧富によりて毫も差異ある者に非
らずされば一を賤み之を疎んじ他に媚び諂ふが如きこ
とあらば決してその職務を盡すこと能はざる者なり即
ち助産婦現に一の貧窮なる者の分娩に臨みて之を處置
せるに際し更に他の産婦より招かれたる時は殊更に其
速なる分娩を促し或は後産未だ娩出せずして後出血の
危険あるに係らずその儘に放置して他に去らんとする
が如きは實に其罪の最も大なる者なり助産婦は此の如
き場合に遭遇せば第二に招かれたる産家には他の助産

婦を指示して之に當らしむべし而してその指示に依り
依頼せられたる助産婦は一時以前の助産婦に代り或は
産家の希望に依りその全部の處置を擔當すべし決して
一助産婦にして同時に兩者の分娩を引き受くる可らず
若し急要の場合に際し他の助産婦を得る能はざるべき
は其應急救助の最も切要なりと認めたる一方に急ぎ赴
くべし

また助産婦は常に廉潔なる精心を養ひ假令分娩困難
なりし者と雖も決して無用の金錢を貪ること勿れ

八 助産婦は醫師の命令に違背すべからず

助産婦たる者は尊敬を以て醫師に接し萬事其指揮に
従ふ可し然れども己れより技術不熟練にして不良の處
置を施す時は秘かに注意せざる可からず其危険の招來

すべきことを知りつゝ之を看過すること勿れ

九 助産婦は産家より招需を受けたるときは決して之を謝絶すべからず

助産婦は假令貧者或は甚だしき不潔の者若くは傳染
病者と雖もその依頼を拒むこと勿れ然れども確然たる
理由ある時は己れ自ら他の熟練なる助産婦に依託すべ
し

十 助産婦は修學に熱心ならざる可からず

助産婦の業務たるや正規の妊娠分娩及び其他の取扱
法をなす者なりと雖も此等は皆高尚なる學理に徴し行
ふべきが故に日常熟達せる醫師の談話を聴き助産學を
讀みその他産科に關する雜誌等を読み以て智識の發達

を計らざる可からず

十一 助産婦は常に清潔を重ぜざる可からず

助産婦は清潔を嚴守すべき必要は後章消毒法の條下に詳説するが如く産褥熱等の危険を防禦するのみならず又た産家の信用を得るの基にして不潔なる人を助産婦として迎へんよりは清潔に其身を保てる人を迎へんことを望むべきは自然の理なり

十二 助産婦は謙遜の心を保たざる可からず

己れ如何に熟練するに雖も決して喋々しく自慢話を爲し或は他の助産婦に向つて矯慢の行ひある可からざるは勿論學術の進歩に従ひ取扱法等にも種々變更を來す者なれば己れが法を固守することなく其利あるを認むる時は宜敷之に従ふ可し

第三章 助産婦たるべき資格

凡そ助産婦たらんと欲する者は左の諸件を具備するを要す

第一 體質 強壯にして能く勞力に堪ゆべく殊に徹夜に耐え得べき者

第二 五官器 殊に聴力並に視力等は鋭敏なるを要す

第三 手及び指 は軟かにして皮膚は緻密なるべく殊に指尖の感覺は鋭敏にして其各關節は自在に動かざる可からざるのみならず其他畸形及び皮膚等に都て一の故障なきを要す

第四 精神 遲鈍ならずして意志明らかに且つ判断力に富むを要す

第五 年齢

満貳拾年より五拾年までの者を要す但し助産婦學校に入り助産學を修めんとする者の年齢は貳拾年乃至參拾年なるを要す

第六 品行

方正にして行爲温順なるは勿論萬事柔和なるを要す

第七 忍耐力

の極めて強きは自然分娩に堪へ得るは勿論助産婦の業務に堪へ暴力に之を處置するの憂少なきものとす

第二編

人體の解剖及生理概要

第一章

人體の構造

人體は硬部、軟部及び流動體より構成せられ是等の諸部互に連合して種々の機能を營み以て生活するものなり硬部とは骨及び軟骨を云ひ軟部とは靭帶、筋肉、脈管、神経、内臓、毛髮及び爪を備へたる皮膚并に粘膜等にして流動體とは血液及び淋巴液を云ふ

甲 身體の硬部

第一項 骨

骨は其質甚だ硬固にして扁平なるもの長きもの短きもの等あり互に集合して骨格を形成し身體の基礎を爲す又多くの空洞を造り其中に貴要の臓器を收容し之を保護す

するものなり而して其骨と骨との接合部を關節と稱し動くもの動かざるものあり其他頭部の如き扁平なる諸骨の連合部は縫合と云ひ不動性のものなり骨は又關節端を除くの外其全面を骨膜と稱する白色強靱の組織より被はれ以て之より營養を受るのみならず亦是によりて骨と他の組織との接合を媒介せらるる者なり

第二項 軟骨

軟骨は骨より軟にして眼、耳、鼻、尖、氣管、關節の間等にあり而して其關節間に於ける軟骨は兩骨端の甚だしき摩擦を減じ其運動を容易ならしむるの作用あり又胎兒の骨は初め軟骨なれども成育するに従ひ變じて堅き骨となるものなり

乙 身體の軟部

第一項 靱帶

靱帶は白色の光澤を有する柔軟強靱の組織にして常に骨の關節を包み之を連合せしむる者なり

第二項 筋肉

筋肉は赤色の纖維相集まりて成り能く伸縮するの性を有す之に二種あり隨意筋及不随意筋と云ふ隨意筋とは隨意運動を營む者にして骨より骨に又は骨より皮下に連り其收縮に由りて身體の運動を起さしむ而して筋の附着する端には腱と稱する白色強靱の質と成り以て其附着部を強固ならしむるものなり不随意筋とは即ち精神の支配を受けず緩慢の運動

を營むものにして心臓、胃、腸、膀胱、子宮、血管等の壁質をなす
 即ち是等臓器の官能は隨意に制止せんとするも或は其運
 動を活潑ならしめんとするも決して能はざるなり然れど
 も此運動たる吾人の生活上一日も缺く可からざる者にし
 て心臓の如き一朝其機を失せんか忽ち生命は水泡よりも
 脆く消え果つるに至るべし
 而して筋は其構造極めて簡單なりと雖も其作用たるや
 甚だ複雑にして身體に於ける至微至妙の動作より聲音及
 び言語の調整に至るまで一として此補けを要せざること
 なし

第三項 脈管

脈管とは一系の膜狀管にして動脈、靜脈、毛細血管及び
 淋巴管の總稱なり又動脈、靜脈、毛細血管の三者を一般に血

管と云ふ

動脈は管壁強厚にして一種の搏動を有す之を脈搏と
 云ふ蓋し此脈搏は心臓の收縮する毎に動脈内に血液を射
 出するによりて生ずる者に於ては一分間凡そ
 七十二至を算すべし而して動脈は始め心臓より起り漸次
 分岐して行く全身に廣がり遂に細分して肉眼を以て見得
 べからざる血管即ち毛細管となり靜脈に移行す
 毛細血管は動脈と靜脈との中間にあり其壁頗る菲薄
 にして能く此中に存する血液の營養分を滲透すること
 を得べし之れ身體の最も必要なる現象なり
 靜脈は毛細血管によりて動脈に連続し多數相連合し
 て大管となり心臓に至る其管壁は動脈より非薄にして
 此内に血液は徐々に流通するが故に動脈の如く搏動を生
 ずることなし而して小靜脈は通常身體の淺表に位するが

故に皮膚上より青色の線條として透見し得可し
 以上述べたる血管は其壁に分布する神経の作用により
 て能く縮張するを得可く例之ば身體の一部寒冷に逢ふ時
 は管壁に存する神経之に感じて血管を收縮せしめ其部の
 血液を減じて蒼白色となるも灼熱に逢へば之に反して血
 管擴張し血液此部に注流して赤色を呈す此の如き狀況は
 助産婦が分娩時或は其他の取扱法に就て關係する所頗る
 大なるものなり

淋巴管(一名水脈管)

相集まりて大管となり頸部の下際に於て靜脈中に開口す
 其經過中に於て屢く淋巴腺を通過するものなり
 淋巴腺とは身體各部殊に關節の内面に多く其著しきも
 のは頸部、腋下、鼠蹊部等に存し皆柔軟にして細少なり此の
 如く淋巴腺は淋巴管の經過中に存在するを以て管内を流

通する病毒は必らず此部に移行するが故に甚だ病變に感
 じ易く若し之に犯さるる時は直ちに増大して硬固となり
 始めて外部より觸知せらるるに至る梅毒の患者は多く之
 を有するを以て此淋巴腺の腫脹は助産學上決して輕視す
 べきものに非ざるなり
 其他腸より起れる淋巴管は食物の消化により造られた
 る白色の粥汁様物即ち乳糜を吸取し之を血液中に輸送す
 るものなり故に乳糜管と云ふ

第四項 神經

神經は腦及び脊髓より出で全身の諸部に分布する白
 色の纖維にして恰も絹絲の如き光澤を有す而して感覺を
 司するものと運動を支配する者とあり前者を知覺神經と
 云ひ後者を運動神經と云ふ

腦髓とは頭蓋腔中に在り柔軟にして稍く卵圓形を呈し
 精神の舍る所なり
 脊髄も亦柔軟なる組織にして脊椎骨管中に存し長き
 索條を成し其上端は腦髓に接續す其機能は主に傳達作用
 を營み身體各部に起る知覺を腦に傳へ腦に發したる運動
 の命令を筋肉に傳ふるの徑路なり
 交感神経は脊椎の兩側に存在し之より數多の神経纖維
 維を發して主に内臓及び血管に分布し各固有の官能を營
 ましむ者なり
 五官とは視感、聽感、嗅感、味感、觸感を云ひ是等を感ぜ
 しむべき装置を五官器と云ふ皆腦髓より來れる特異の神
 經を受容し之によりて固有の官能を營む者なり而して五
 官器に分布する神経は其作用によりて各々稱を異にすと
 雖も皆知覺神経に屬するものなり

視官とは即ち眼目を稱するものにして視感を司る主
 要の部分を眼球と云ふ眼球の上方には涙腺なる者ありて
 涙液を分泌するの作用を有す
 眼球は眼瞼を以て被はれ其前方は透明にして硝子の
 如く其中央に圓形黒褐色の部あり俗に之をくろめと云ふ
 西洋人は綠色を呈せり其最も中心に存する黒色の一小孔
 を瞳孔と云ひ光りに逢へば收縮し暗き所に至れば擴張す
 るものなり而して吾人の見んとする凡ての物體は皆此瞳
 孔より進入し眼球後方の内面に影を生ず此部には視神經
 分布せるを以て眼中に入りたる物體は皆此神經に感せざ
 るべからず茲に於て視覺を起すものなり
 聽官とは耳を稱し其構造甚だ複雑なる者にして頭部
 の兩側に存在するを耳翼と云ひ音響を集合するの作用あ
 るに過ぎず而して此部に一孔あり之を耳孔と云ひ内方に

通じ耳翼により集められたる音響を傳ふ者にして此内方に達するの道路を外聽道と云ふ

聽感 聴感を發起せしむる装置は頭蓋の内部に位し頗る巧妙なる作用を營み聽神經亦此中に分布す鼓膜は外聽道の内端に緊張する薄き膜様物にして恰も太鼓の皮に於けるが如く音響を受けて顫動し其感覺を内部に傳ふるの作用をなすものなり

聽官 聴官とは即ち鼻にして嗅神經は鼻腔粘膜の上部に分布す故に嗅覺は主に鼻腔の上方に於て司ごられ其下部は呼吸を營むものとす而して此部の粘膜は數多の血管を有するを以て甚だ出血し易し其出血を衄血と云ふ故に若し婦人月經不調にして停滯する時は屢く其代償として衄血を起すことあり

味官 味官とは舌を云ひ其表面には多數の小突出物あり之

を乳頭と稱す味神經は此中に分布し以て味覺を司るものとす

觸官 觸官とは皮膚にして諸種の知覺神經は各々一定の裝置により其全般に分布し觸覺を司ごる者なり今吾人が假令眼を閉づと雖も能く皮膚に觸るる物質の粗滑形狀大小、硬軟、寒暖等を感じし或は又疼痛、瘙癢の感覺あるは即ち此機能の存在するに由る者なり

第五項 内臓

内臓 内臓とは胸腔及び腹腔内に存する機關の總稱にして即ち呼吸を司ごる肺臟、血液分布の中心たる心臟以上を胸腔内臓器と云ふ食物の消化に與かる胃、腸、肝臟、脾臟及び尿管を分泌する腎臟并に膀胱、子孫を蕃殖せしむべき生殖器以上を腹腔内臓器と云ふ及び血管腺等之に屬す

肺臟は胸腔内に存し左右二個あり氣管と連なり呼吸の作用を營む者なり氣管の上部は喉頭に連れ下りて胸腔内に入り二枝に分れ氣管となりて左の肺中に進入し漸次細分して遂に肉眼を以て見ざるを得ざる細き管となり其末端は膨大して肺胞を形成す故に肺の實質は氣管及び肺胞より成立するものに於て恰も海綿狀を呈せり

肺胞の壁は頗る菲薄に織成せられ其周圍に數多の毛細管あり以て之を包圍するものにして肺胞中へ吸氣の際鼻を透して毛細管中に存する血中に酸素を與へ同時に炭酸を透して毛細管中に取り去り血中に酸素を與へ同時に炭酸を排出せり

肺胞の壁は頗る菲薄に織成せられ其周圍に數多の毛細管あり以て之を包圍するものにして肺胞中へ吸氣の際鼻を透して毛細管中に存する血中に酸素を與へ同時に炭酸を透して毛細管中に取り去り血中に酸素を與へ同時に炭酸を排出せり

肺胞の壁は頗る菲薄に織成せられ其周圍に數多の毛細管あり以て之を包圍するものにして肺胞中へ吸氣の際鼻を透して毛細管中に存する血中に酸素を與へ同時に炭酸を透して毛細管中に取り去り血中に酸素を與へ同時に炭酸を排出せり

諸姉は瓦斯なるものを知れるや瓦斯とは如何に強き力を以てするも見ることも能はざる者にして吾人の一分時も缺くべからざる空氣は即ち瓦斯體なり而して又空氣は決して一種の瓦斯より生じたるにあらざる素、炭酸素、稱する三種の瓦斯混合して成立す其中素は最も多き酸素之れに次ぎ炭酸最も少なし而して人體の生活上必要なるものは酸素にして炭酸は身體中に於て生ずる不必要のものなり故に吾人は呼吸作用に依りて空氣中の酸素を血中に取り血中に存する不要の炭酸を排出す之を瓦斯交換と云ふ此の如き瓦斯交換は管に肺臟のみならず皮膚に於ても亦僅かに其機能を營む者なり即ち皮膚には氣孔と稱し肉眼を以て目視し能はざる無数の細孔ありて之れより血中の炭酸瓦斯は外氣中に呼出せられ空氣中の酸素は血中に吸入せらるること尙ほ肺臟に於けるが如し之を皮膚呼吸

呼吸云ふ
呼吸には又外呼吸及び内呼吸の二種あり外呼吸とは肺及び皮膚に於ける瓦斯交換を云ひ内呼吸とは身體組織と血液間に於ける瓦斯交換を稱するものなり

呼吸の運動
呼吸の運動は胸廓及び横隔膜の縮張により營まるる者にして横隔膜は胸廓と腹腔との間に位し以て之が境界を成す其質筋肉より構成せられ上方に穹窿し食道大動脈及び大静脈之を穿通せり今此膜收縮して平坦となれば其穹窿部は腹腔に向て低下し同時に起る胸廓の擴張と共に胸腔を増大せしめ從て亦肺臓を擴がらしむ故に體外の空氣は恰も吸引せらるるが如く鼻腔、喉頭、氣管を通じて擴張せる肺中に流入す吸氣即ち之なり而して元來肺臓は大に彈力に富むものなれば吸氣時に於て一旦擴張牽引せられるも次回には自ら收縮して原形に復さんとするが

故に横隔膜も從て上昇し同時に胸廓收縮して胸腔を狹隘ならしめ肺内の空氣を驅出す之を呼氣となす此呼氣と吸氣とを名けて呼吸と稱し大人一分間の數は凡そ十八回なりとす

呼吸に胸式及び腹式の二種あり
胸式呼吸とは主に胸廓を運動せしめて呼吸するを云ひ多く女子に於て行はる腹式呼吸とは主に横隔膜の働きによりて呼吸するを云ひ男子は多く之を營む

心臟は兩肺の中間に位し稍左側に偏す而して間斷なく運動し全身の血液循環を支配するものなり諸姉が試みに手を左乳房の下方に貼する時は整調にして脈搏と一致する一種の搏動を觸るべし之を心悸動と云ひ即ち心臟の絶えず運動せるを示すものとす

心臟の大きさは手拳大にして其内腔は一の中隔により

て左心及び右心に分る此二者は又共に横徑の隔壁あり上部を房と云ひ下部を室と稱す但し此隔壁は瓣狀をなし上方より壓する時は容易に開くと雖も下方より壓すれば却て閉鎖するの作用あり其左方にあるを二尖瓣或は僧帽瓣と稱し右方にあるを三尖瓣と云ふ心臟には又大なる動脈と交通する孔あり即ち右房に於ては上下二條の大動脈來りて茲に開口し左室には肺動脈と交通する一孔あり左房は四條の肺靜脈孔を有し左室は大孔に由て大動脈に通ず而して此等脈管の心臟開口部には各々半月形の瓣ありて血液の逆流を防ぐものなり

心臟の動作は一の縮張運動にして恰も唧筒の如く其室を縮すれば室内の血液は動脈内に射出せられ房は此際擴張して靜脈内の血液を吸取す而して室中に存する血液を悉く動脈内に入る時は室は擴張し房は收縮して疊きに吸

攝せる血液を室内に流入せしむ房中の血液全く室内に射入すれば茲に於て室の收縮及び房の擴張は反覆せらるる者なり此の如くにして右心は全身より還り來れる陳舊暗紅色の血液を受け之を肺に送り左心は肺を流通して炭酸を放ち酸素を取り新鮮紅色となれる所の血液を受け之を全身に送り出すものなり

血液の循環は之を大別して大及び小循環の二種となす

大循環一名全身循環とは心臟の左室より一條の大動脈を以て起り浴く全身に循環後上下の二大靜脈となりて心の右房に歸るを云ひ

小循環一名肺循環とは心臟の右室より一條の肺動脈を以て起り肺に至りて毛細血管となり遂に四條の肺靜脈となりて左房に歸る

胃は囊状をなし腹腔の上部所謂心窩に位し左方に偏し著るしく彎曲す其上端は食道に連り下端は腸に結合するものにして食物此中に入る時は其内壁より鹽酸を含める胃液を分泌し且つ一種の運動を起して盛んに其消化を營み以て之を吸収す而して胃中に於て消化し能はざる食物は其運動により腹内に驅逐せらる通常食物の胃中に滞在する時間は五時間内外なれども消化の難易によりて一定し難し

腸は迂回轉し腹腔の大部を占有する長管にして上端は胃に連り下端は肛門に終る其長さ凡そ八迷突(即ち凡そ二丈八尺餘ありて大腸及小腸の二部より成り更に小腸を分ちて十二指腸空腸回腸の三部となし大腸も亦盲腸結腸直腸に區別す而して小腸の大腸に移行する部に於て蟲の如き突起あり之を蟲様垂と云ふ

腸は常に上より下に進行する蠕動運動を營み且つ腸液を分泌して胃より輸送せられたる食物の消化及び吸収を司るものにして殊に小腸に於て其作用著るしきものなり

肝臓は横隔膜の下にして胃の右方にあり膽汁を分泌するの機能を有す肝臓の下面には膽嚢なるものありて其末端は一管となり十二指腸に開口す而して肝臓より製せられたる膽汁を先づ膽嚢中に蓄積し若し食物十二指腸内に入る時は始めて之を腸中に出し以て消化を營むものなり

脾臓は胃の後下方に在り脾液を分泌し膽汁を合して十二指腸に注ぐ

食物の消化 唾液は食物消化に缺くべからざるものにして舌下顎下耳下等に存する一種の腺より分泌す之を唾液腺と云ひ絶えず少量の唾液を分泌して口内を粘滑ならしむと雖も食事の際には著るしく増大して之を消化し

胃は囊状をなし腹腔の上部所謂心窩に位し左方に偏し著るしく彎曲す其上端は食道に連り下端は腸に結合するものにして食物此中に入る時は其内壁より鹽酸を含める胃液を分泌し且つ一種の運動を起して盛んに其消化を營み以て之を吸収す而して胃中に於て消化し能はざる食物は其運動により腹内に驅逐せらる通常食物の胃中に滞在する時間は五時間内外なれども消化の難易によりて一定し難し

腸は迂回轉し腹腔の大部を占有する長管にして上端は胃に連り下端は肛門に終る其長さ凡そ八迷突(即ち凡そ二丈八尺餘ありて大腸及小腸の二部より成り更に小腸を分ちて十二指腸、空腸、回腸の三部となし大腸も亦盲腸、結腸、直腸に區別す而して小腸の大腸に移行する部に於て蟲の如き突起あり之を蟲様垂と云ふ

腸は常に上より下に進行する蠕動運動を營み且つ腸液を分泌して胃より輸送せられたる食物の消化及び吸収を司るものにして殊に小腸に於て其作用著るしきものなり

肝臓は横隔膜の下にして胃の右方にあり膽汁を分泌するの機能を有す肝臓の下面には膽嚢なるものありて其末端は一管となり十二指腸に開口す而して肝臓より製せられたる膽汁を先づ膽嚢中に蓄積し若し食物十二指腸内に入る時は始めて之を腸中に出し以て消化を營むものなり

脾臓は胃の後下方に在り脾液を分泌し膽汁を合して十二指腸に注ぐ

食物の消化 唾液は食物消化に缺くべからざるものにして舌下、顎下、耳下等に存する一種の腺より分泌す之を唾液腺と云ひ絶えず少量の唾液を分泌して口内を粘滑ならしむと雖も食事の際には著るしく増大して之を消化し

且つ食物を嚥下し易からしめんが爲めに塊となすの作用ありて而して食物は始め口腔内に入れれば先づ唾液と混じり上下の齒列間に粉碎せられて既に其一部分は消化し嚥下作用によりて食道を通じ胃中に達す然る時は其運動により能く胃液と混じり漸く消化せられて粥状となる茲に於て始めて吸収機能起り胃壁より其消化せられたる食物を吸収す然れども胃中に於て消化し能はざる食物は悉く腸内に輸送せらるべし食物腸中に入れば胆汁腺液及び腸液等之れに混和して更に消化せられ腸の内面殊に十二指腸及び空腸等の壁より吸収せらるるなり而して其吸収されたる養分の一部分は腸の血管中に入り共に血液の必要分を補ふものとす

此の如く食物は漸次溶解吸収せられ大腸に至るの際には殆んど滋養分を失ふが故に大腸中に於ては消化せらるることなく只水分のみを吸収して漸く固形の塊に變せしめ遂に直腸内に至る然る時は便意を催し糞として肛門より排泄するものなり

腎臓は左右二個あり脊椎の兩側に位し蠶豆状を爲し尿は此中に於て絶へす分泌せらるる者なり而して尿なるものは消化器より體中に吸収せられ一旦組織を營養して不純となりたる成分が腎臓に來り排泄せられたるものなり

輸尿管は腎臓と膀胱の間において腎臓より製せられたる尿を膀胱に送るの作用をなす者なり

膀胱は筋質の囊にして大に縮張性に富み男子に於ては直ちに直腸の前方に位すれども女子にありては子宮の前方にあり尿は輸尿管を経て絶えず此中に輸入せらるる

と雖も一定量に達せざれば尿意を催すものにあらず

且つ食物を嚥下し易からしめんが爲めに塊となすの作用ありて而して食物は始め口腔内に入れれば先づ唾液と混じり上下の齒列間に粉碎せられて既に其一部分は消化し嚥下作用によりて食道を通じ胃中に達す然る時は其運動により能く胃液と混じり漸く消化せられて粥状となる茲に於て始めて吸収機能起り胃壁より其消化せられたる食物を吸収す然れども胃中に於て消化し能はざる食物は悉く腸内に輸送せらるべし食物腸中に入れば胆汁腺液及び腸液等之れに混和して更に消化せられ腸の内面殊に十二指腸及び空腸等の壁より吸収せらるるなり而して其吸収されたる養分の一部分は腸の血管中に入り共に血液の必要分を補ふものとす

此の如く食物は漸次溶解吸収せられ大腸に至るの際には殆んど滋養分を失ふが故に大腸中に於ては消化せらるることなく只水分のみを吸収して漸く固形の塊に變せしめ遂に直腸内に至る然る時は便意を催し糞として肛門より排泄するものなり

腎臓は左右二個あり脊椎の兩側に位し蠶豆状を爲し尿は此中に於て絶へす分泌せらるる者なり而して尿なるものは消化器より體中に吸収せられ一旦組織を營養して不純となりたる成分が腎臓に來り排泄せられたるものなり

輸尿管は腎臓と膀胱の間において腎臓より製せられたる尿を膀胱に送るの作用をなす者なり

膀胱は筋質の囊にして大に縮張性に富み男子に於ては直ちに直腸の前方に位すれども女子にありては子宮の前方にあり尿は輸尿管を経て絶えず此中に輸入せらるる

と雖も一定量に達せざれば尿意を催すものにあらず

尿道は膀胱より起り女子に於ては前庭の中央に開口

し其長さ凡そ三四仙迷(即ち九分若くは一吋餘に過ぎざる

も男子は殆んど二十仙迷(即ち六寸)の長さを有す而して其

開口部は常に閉鎖して三角形を呈せり

生殖器とは子孫を蕃殖せしむるの器にして男女に

より其造構を異にするものなり

血管腺とは多量の血液を含有する獨立の臓器にし

て左の種類を有す

一脾臓 左季助部(胃の左方)に在り柔軟にして甚だ血

管に富み血液の製造を司るものなり

二副腎 又は腎臓の上方に附着する小臓器にして其

作用は未だ明らかならず或は身體の色素に關係を有する

ものなりと云ふ

三甲狀腺 は喉頭の下方面にある小腺にして其機能は

今に不明なれども身體中に産生する粘液を溶解するの作

用あるが如し

今に不明なれども身體中に産生する粘液を溶解するの作
用あるが如し

第六項 皮膚

皮膚は毛及び爪を備へ以て身體の表面を悉く被包す

る者にして之を三層に區別す即ち最も外層を表皮と云ひ

次を真皮と云ひ第三層を皮下脂肪織と云ふ皮脂腺汗腺毛

根神經血管等は真皮中に存す而して此中には觸管を備へ

全身表面より來る種々な知覺を腦に奏するの任を有す

るものなり又皮膚は體温を調節するの作用を有するもの

にして例之運動後或は發熱に際し皮膚の血管擴張して紅

色となるは體内の血液を外部に導き盛に汗を分泌せしめ

て以て體温を減降するものにして殊に發汗は血中の不純

成分を共に排除し得るを以て生活上緊要なるものとす

第七項 粘膜炎

粘膜炎 は眼、口、鼻、胃、腸、氣管、膈、子宮、尿道、膀胱等の内面を被ひ皮膚の一系列を成し諸種の分泌液を出し其面滑澤にして常に濕潤するものなり

丙 身體の流動體

第一項 血液

血液 に二種あり動脈血及び靜脈血と云ふ前者は及び其他の營養を多量に含みて鮮紅色を呈し後者は炭酸素其他の不純成分を有し暗紅色を現はす而して血液は赤血球、白血球及び血漿より成る者なり
赤血球 は血中の主成分にして扁平圓形の小球なり
血液の赤色を呈するは之あるに由る

白血球

白血球 は白色にして其數甚だ少なく赤血球四百五十乃至五百個に對し一個ありと云ふ且つ時々自ら變形し得るの性あり而して此の如き赤及び白血球は其形甚だ小さく檢微鏡の力に凭らざれば認め難し
血漿 は帶黄色にして赤及び白血球を其中に浮遊せしむまた血液は生活の原動力にして凡ての營養物は必らず先づ此中に混じりて後ち組織を營養する者にして組織中に於て生じたる不要物は又血中に混じり各臓器に至り或は尿となり或は汗となり或は肺に於て呼吸氣中に混じりて排泄せらるるものなり

第二項 淋巴液

淋巴液 は無色透明にして身體組織より湧き出て淋巴管に集まり遂に血中に混すべきものなり消化器に於て

製せらるゝ乳糜も亦之に屬す

第二章 人體の區別

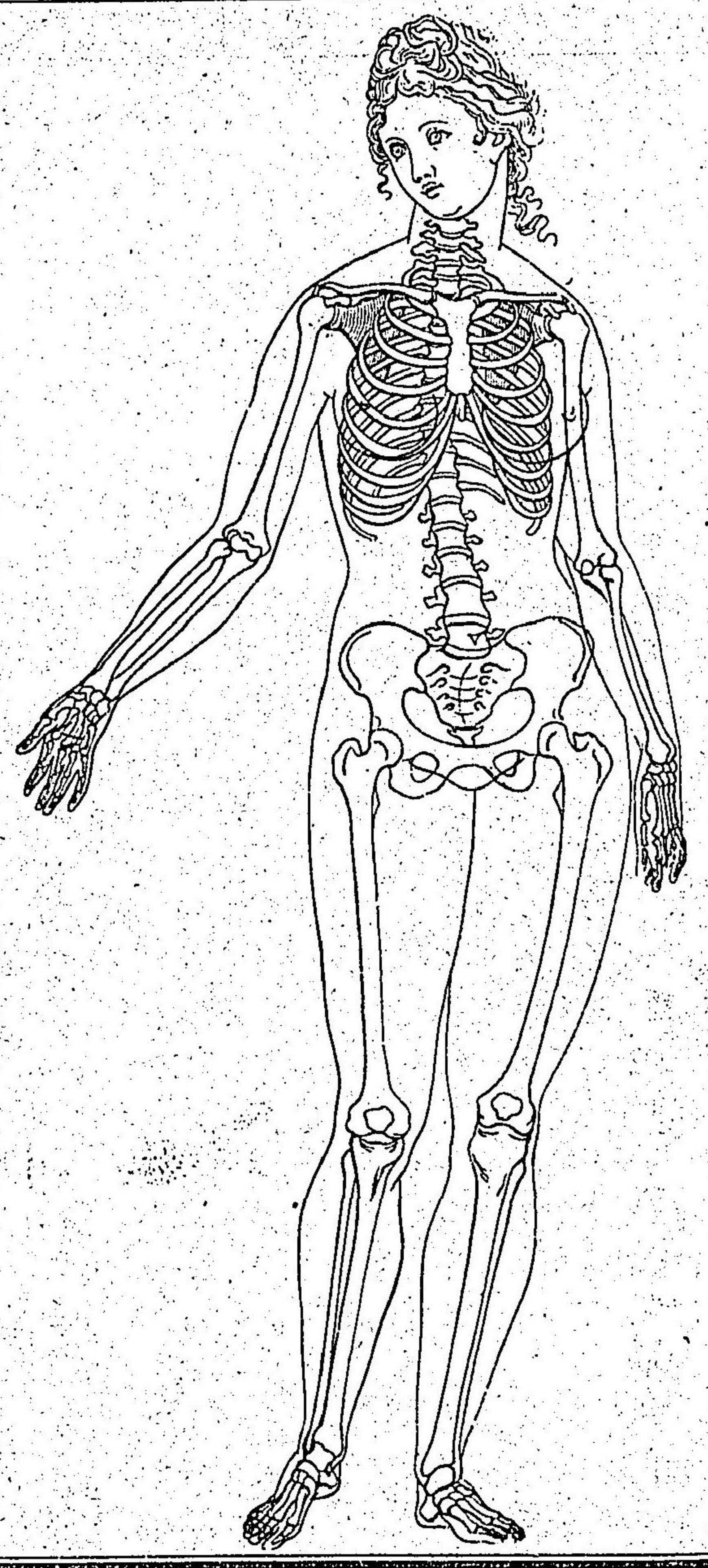
人體を外觀上より區別すれば頭部、軀幹、四肢の三部となる。

第一項 頭部

頭部は身體の最も上部にありて更に之を頭蓋及び顔面の二部分に分つ

第一節 頭蓋

頭蓋は八個の扁平骨互に連合して一の頭蓋腔を造り内に脳髓を容るゝものにして即ち一個の前後頭骨一個の後頭骨二個の顛頂骨二個の顛顛骨一個の蝴蝶骨一個の篩骨



第一圖 婦人の骨格及び外圍自然大の十分二

是なり此等諸骨の接合する所は鋸齒状をなし互に嵌合す
 之を縫合と云ひ三個あり一は兩顛頂骨間に存し矢状縫合
 と云ひ一は顛頂骨と前頭骨間にして冠處縫合と稱し一は
 顛頂骨と後頭骨間にあり三角縫合と云ふ
 頭部を外部より名稱すれば其最上方を顛頂部前方を前
 頭部後方を後頭部耳の後上方を顛顛部と云ふ

第二節 顔面

顔面は多くの骨より構成せらるゝと雖も主なるもの
 は鼻骨(二個)額骨(二個)上顎骨(二個)下顎骨(一個)なりとす此等
 の各骨は下顎骨を除くの外皆不動性に接合す
 顔面を外觀上より區別すれば前額部、眉間、鼻部、口部、頤
 部、頬部等となし上唇の中央に存する淺溝を人中と云ふ

第二項 軀幹

軀幹は頸部、胸部、腹部に區別し脊柱及骨盤によりて支
 へられ上方は頭部に連接す脊柱とは二十四個の短骨相重
 積して成り其中に一の長管を構成し脊椎を藏す其上方七
 個を頸椎と稱し次に位せる十二個を脊椎又は胸椎と云
 ひ下方の五個を腰椎と云ふ

第一節 頸部

頸部は頭部と胸部との間に位する圓柱状の部分にし
 て前方の皮下には喉頭、氣管、甲狀腺等存在し其左右に大血
 管、神経を通ず頸部の側方は筋肉より構成せられ後方は又
 項部とも云ふ頸椎と氣管との間には食道あり

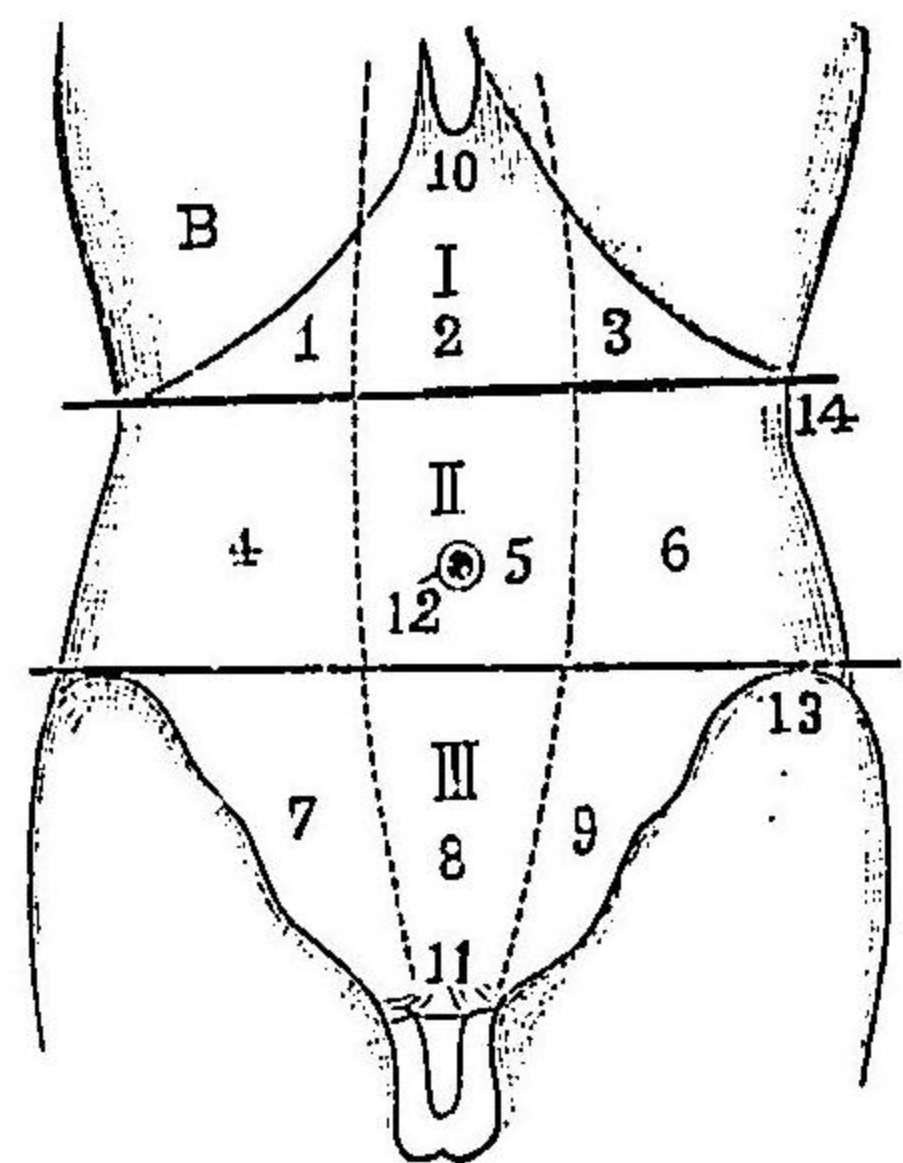
第二節 胸部

胸部は諸骨連合して胸廓を形成するものにして其前部には胸骨及肋骨あり側部に於ては左右各十二個の肋骨は肋軟骨により胸骨に附着し後方は直ちに脊椎に接合するものなり又胸廓前面の上部に於て横に胸骨の上端より肩胛骨に聯なる長骨あり之を鎖骨と云ふ肩胛骨とは胸廓後面の上部に位置し左右二個ありて三角形を呈せり其他胸廓の前面には左右各一個の乳房を備へ内面は滑澤の薄膜を以て被覆せらる之を肋膜と名く又胸廓に於て大血管を容るられたる内腔を胸腔と稱し肺臓、心臓及び大血管を容る

第三節 腹部

腹部の基礎は骨盤にして上は横膈膜により胸腔と界せられ後は腰椎にして前及び左右は腹壁を以て被はる其内腔は腹腔と云ひ消化器、泌尿器を容れ女子に在りては生殖器官を藏す

第二圖 腹部前面各部ノ圖



I	II	III
上腹部	中腹部	下腹部
3 2 1	6 5 4	9 8 7
右季肋部 左季肋部 右上腹部 左上腹部	右臍部 左臍部 右腰背部 左腰背部	心窩部 臍部 左下腹部 右下腹部 最下肋骨

腹部を明白ならしめんが爲に、腹部を假設し其上部を上腹部、中部を中腹部、下部を下腹部と云ひ更に此の横線と交又したる二條の縦線を設くべし然る時は各部分に區別せらるるなり而して上腹部の中央は

同じく之を上腹部と稱し其兩側を左及右季肋部と云ひ胸骨尖端即ち劍狀突起の直下に於て稍々陷凹せる部を心窩と云ふ中腹部の中央は之を臍部と云ひ竝に臍窩を有し其兩側を側腹部と稱す下腹部の中央は恥部と云ひ其下方に於て稍々隆起せる部を陰阜と名く而して腸骨部とは下腹部の兩側に在り稍々三角形を成し其下界は鼠蹊部と云ふ右腸骨部の内には盲腸を藏す

第三項 四肢

四肢を分ちて上肢、下肢の二となす

第一節 上肢

上肢は亦更に上膊、前膊及手の三部を區別す上膊の中軸たるものは即ち上膊骨にしてその軀幹に連接する部を

肩胛關節と云ひ上面には凸隆せる肩頭を成し下面には陷凹せる腋窩を成形す前膊の中軸は二個の長骨にして内方を尺骨と云ひ外方を橈骨と稱す而して此二骨が上膊骨と連接せる部を肘關節と云ひ其前面は一の淺窩を形成す之を肘窩と云ふ橈骨の前面に手指を軽く貼すれば著明なる搏動を觸知す是即ち脈搏なり

手は八個の腕骨互に聯接して其基礎を成し前膊骨と接續す此部を腕關節と云ふ腕骨の下端には五個の掌骨ありて之と聯接し其前面を手掌と云ひ後面を手背と稱す掌骨の下端には又手骨ありて手指を形成せり其第一を拇指と云ひ最大にして二節より成る第二を示指と稱し第三を中指第四を環指第五を小指と云ひ皆三節あり而して各指端には爪を具ふ

第二節 下肢

下肢は大別して大腿、下腿及び足の三部となす。大腿の中軸は大腿骨にして全身中最も強大なる骨なり。其上端は骨盤の側面と連続す。此部を股関節と云ふ。其下腿は脛骨及腓骨の二個より成り。上端は大腿骨に接す。下腿を膝関節と云ひ其前方に於て小なる膝蓋骨あり以て此部を膝関節と云ふ。其後面は淺窩を形成せり之を膝窩と云ふ。膝関節の運動を補く此関節の後面は淺窩を形成せり之を膝窩と云ふ。足は跗骨、跖骨及趾骨互に聯接して恰も手に於けるが如き状態をなし足関節によりて下腿に連る。此部を足根と稱し其後方突出せる部を踵部と云ふ。足の下面は之を足蹠と稱す。其殊に陥凹せる部を脚心と云ふ。上面は即ち足背なり。趾は五對ありて跖距即ち第一趾より第二、第三、第四、第五趾

と數ふべく趾は手指に於ける如く運動自由ならずと雖も尙母趾は二節を備へ他の四指は三節を有すること之と異ならず

第三章 女子の骨盤

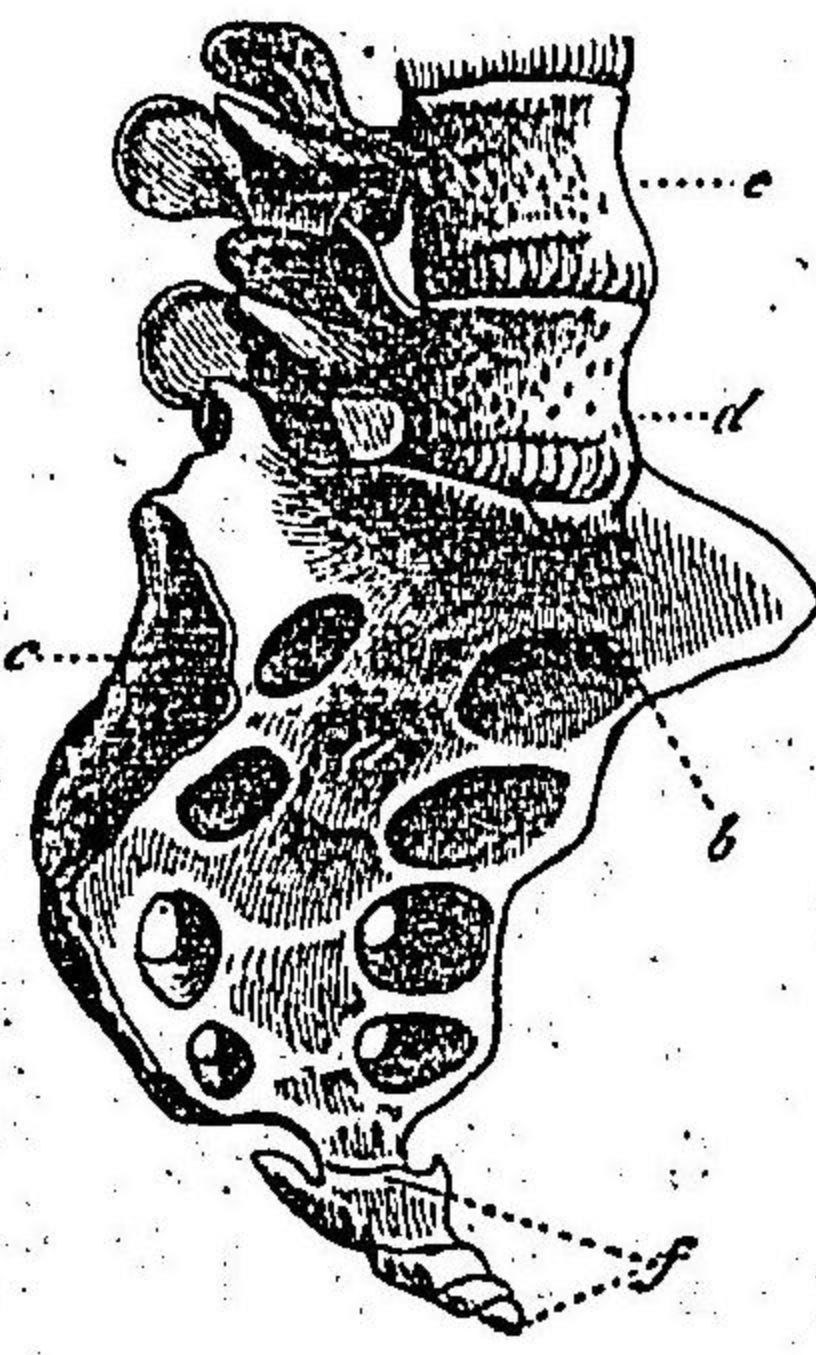
骨盤は軀幹の最下部に有て形狀稍漏斗狀なり。第五腰椎、薦骨、尾骶骨及び兩側の髌骨より構成せられ大小骨盤の二分に區別せらる。女子の骨盤は婦人生殖器の要部を保護し之を保護するのみならず胎兒は此内を通りて産出するを以て分娩に就き大なる關係を有するものなり而して骨盤内臓器は生殖器即ち卵巢、輸卵管、子宮、膺及び膀胱、直腸等なり

第一項 薦骨

薦骨は稍扁平三角形にして骨盤の後壁を成し其前

面は内面に向て陥凹し四對の孔を有し後面は凸隆に同く四對の孔を有す上端は廣くして第五腰椎に聯接し直下に於て著るしく前方に突出せる部ありこれを薦骨の下端は狭く

第三圖 薦骨及び尾骶骨に第四五腰椎を附着せる者(天然大の三分一)



第五個の椎骨に分れたるも後に癒着して一個の骨となりたるものなり故に其前面に存する所の四條の低き横線と其兩面にある四對の孔とは骨で五個の骨より成りたる印痕なり

a 薦骨
b 薦骨岬
c 第四腰椎
d 第五腰椎
e 薦骨耳狀面
f 尾骨

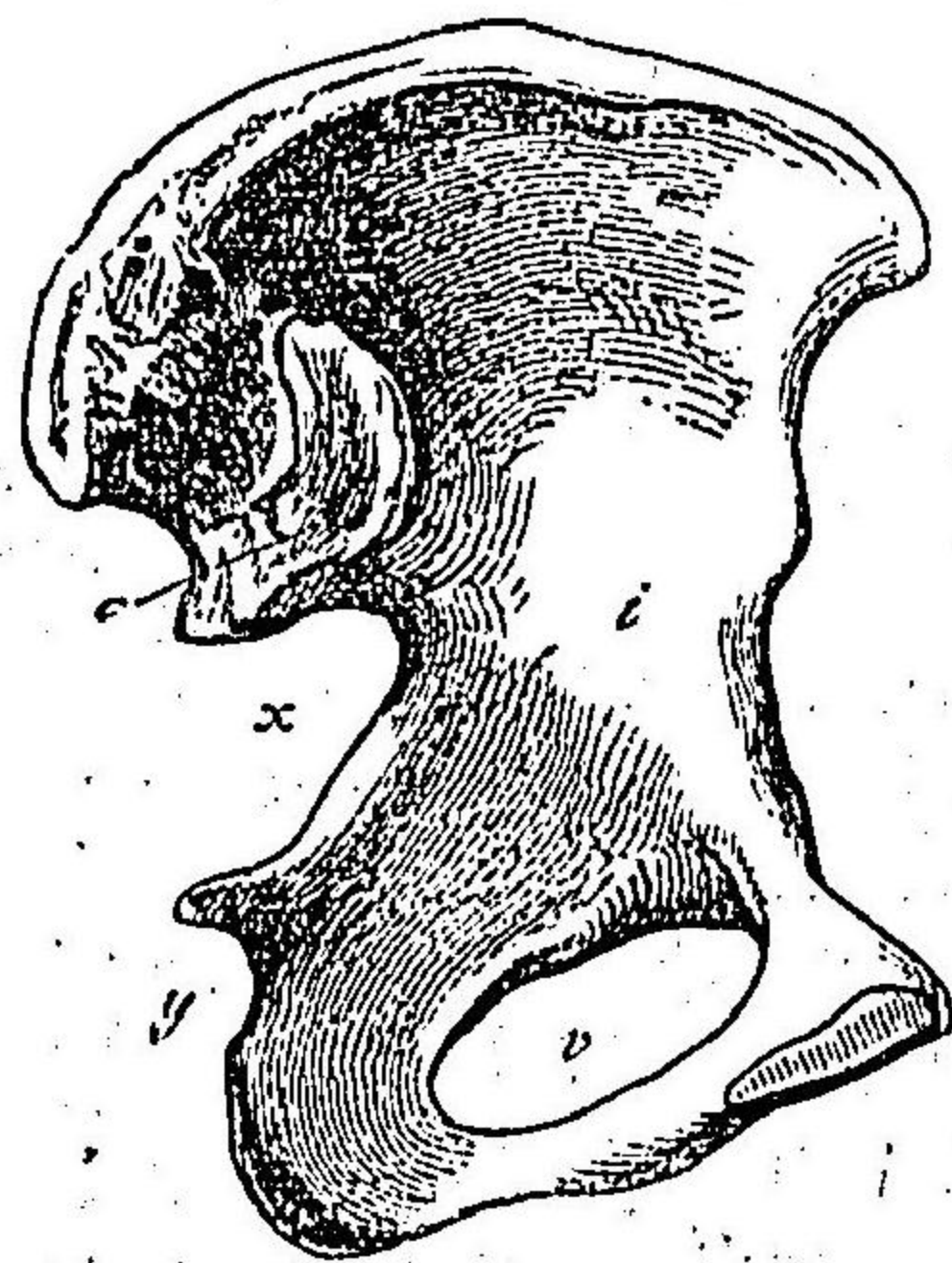
第二項 尾骶骨(一名尾閭骨)

尾骶骨は三個若くは四個の小骨相癒合して成り上端は薦骨に連なる之を薦尾關節と云ひ骨盤骨相互の關節中獨り運動性を有するものにして分娩の際尾骨は此關節に由て後方に向て移動し骨盤の下口をして前後に廣からしむるの用をなすものなり

第三項 髌骨(一名無名骨)

髌骨は骨盤の左右に存する二個の不齊扁平なる大骨にして其前壁と側壁とを構成し後方は薦骨と連り前方は左右互に接合して耻骨縫隙を造る而して髌骨は小兒の時に軟骨を以て連接せる三個の骨より成ると雖も十四五歳に至り其間に存する軟骨は化骨し堅く癒着したるものにして

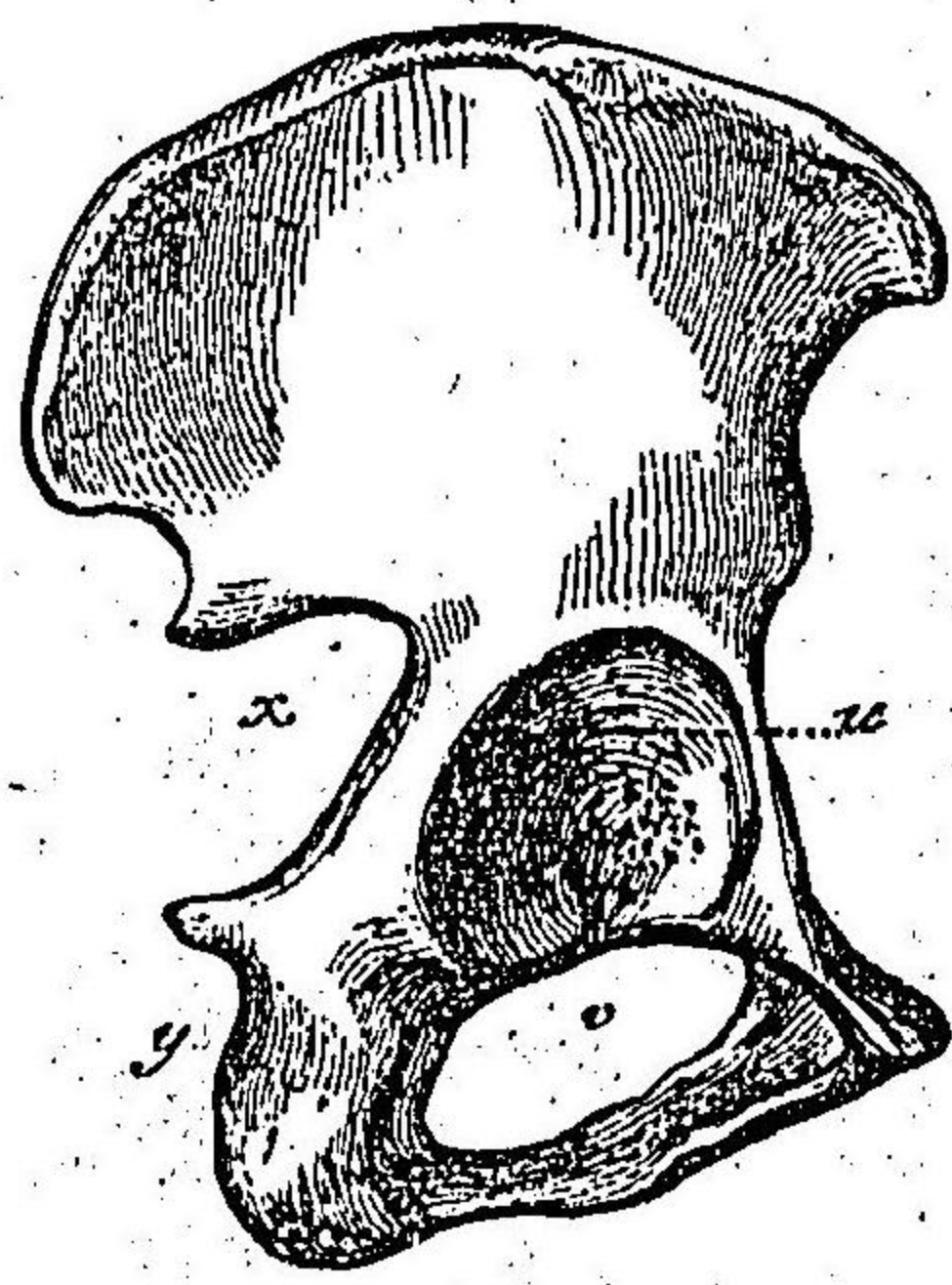
圖四第 右側より見たる (天然の大分一) 骨盤



耳状面
孤形線
卵圓孔
腸骨大截痕
腸骨小截痕

て即ち腸骨、坐骨、耻骨
之なり
腸骨は髌骨の上
部を成し體及翼の二
部に分たる
體は下方の強厚
なる部に於て其下端
は坐骨及び耻骨と接
し外面に於て此等
の骨と共に髌骨を形
成す髌骨とは即ち此
等の三骨と連合部に
して骨盤の兩側にあ
り著るしく四角形に

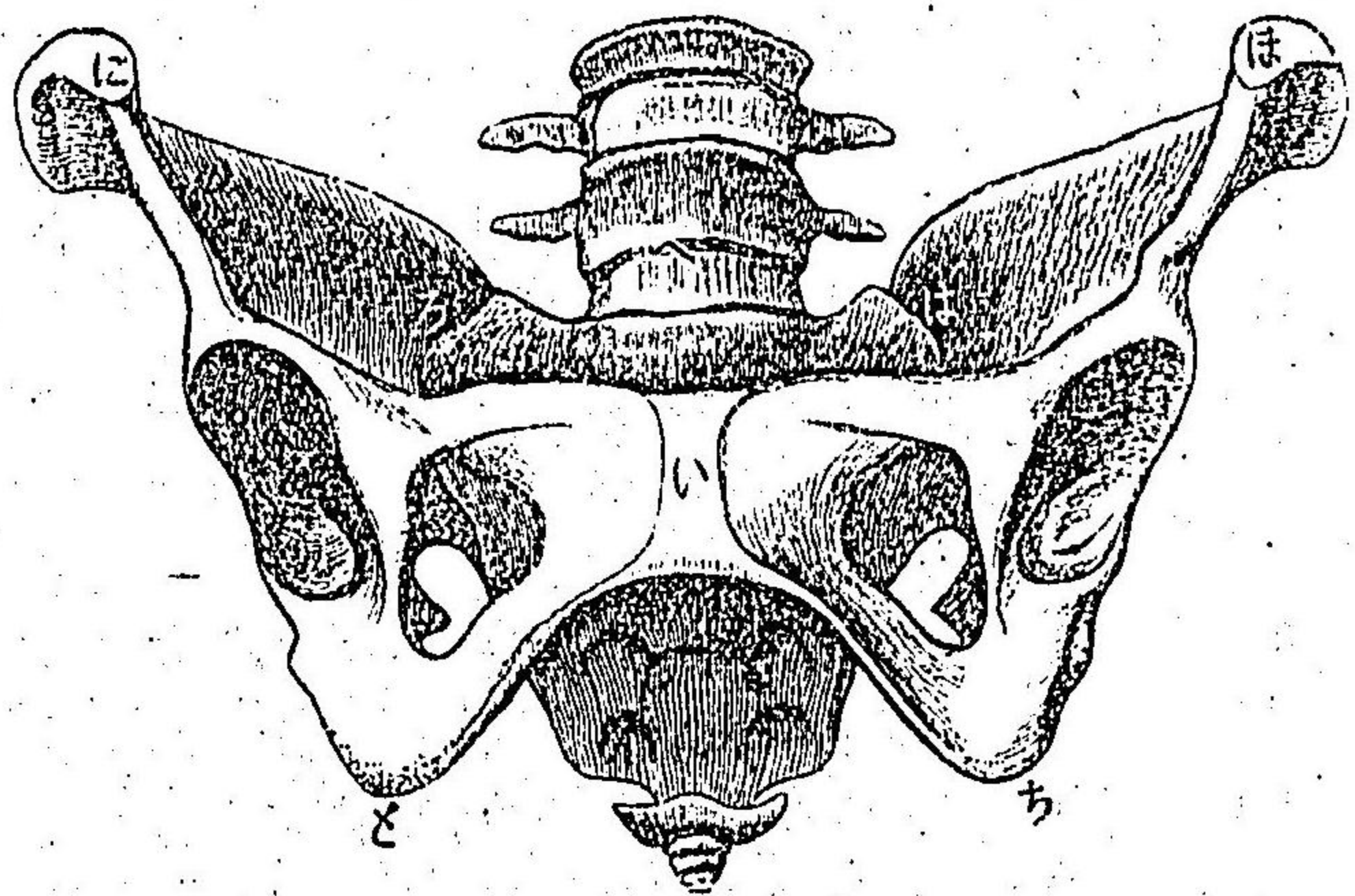
圖五第 左側より見たる (天然の大分一) 骨盤



腸骨小截痕
腸骨大截痕
卵圓孔
髌骨窩
(一名脾臼)

り著るしく四角形に

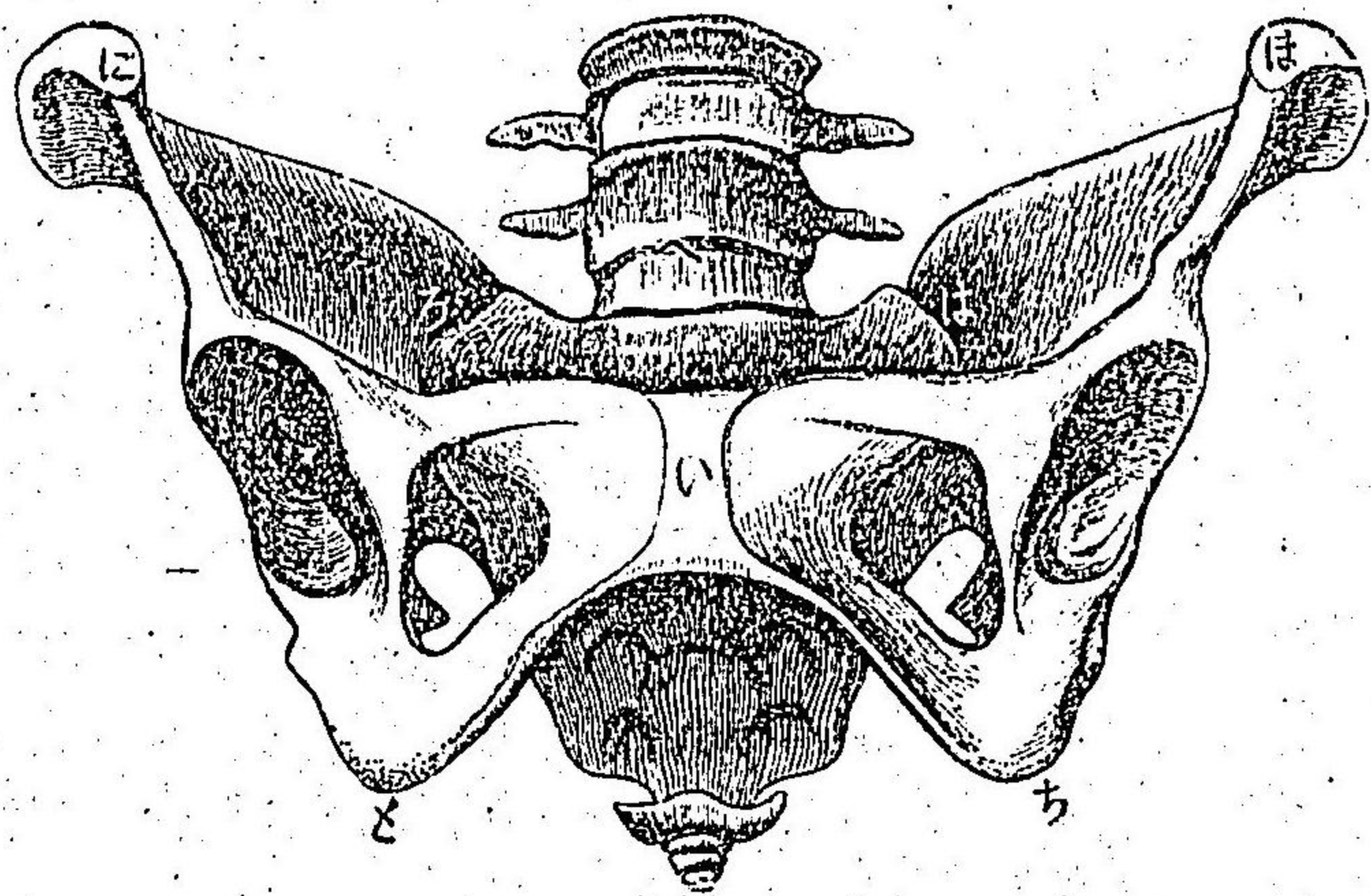
圖六第



全骨盤
耻骨軟骨
接合
右腸骨關
左腸骨關
右腸骨前
左腸骨前
上棘
左腸骨前
上棘
右腸骨前
上棘
左坐骨結
右坐骨結

沒し大腿骨の上端
と關節する部を云
ふ
翼は上方の薄
く扁平なる部分に
して其上縁には一
の隆起を呈す之
を腸骨棘と云ひ其
前部の突出せる部
を前上棘と稱し其
下方には前下棘あ
り後端を後上棘と
云ふ其下方を後下
棘と云ふ但し前上

第六圖

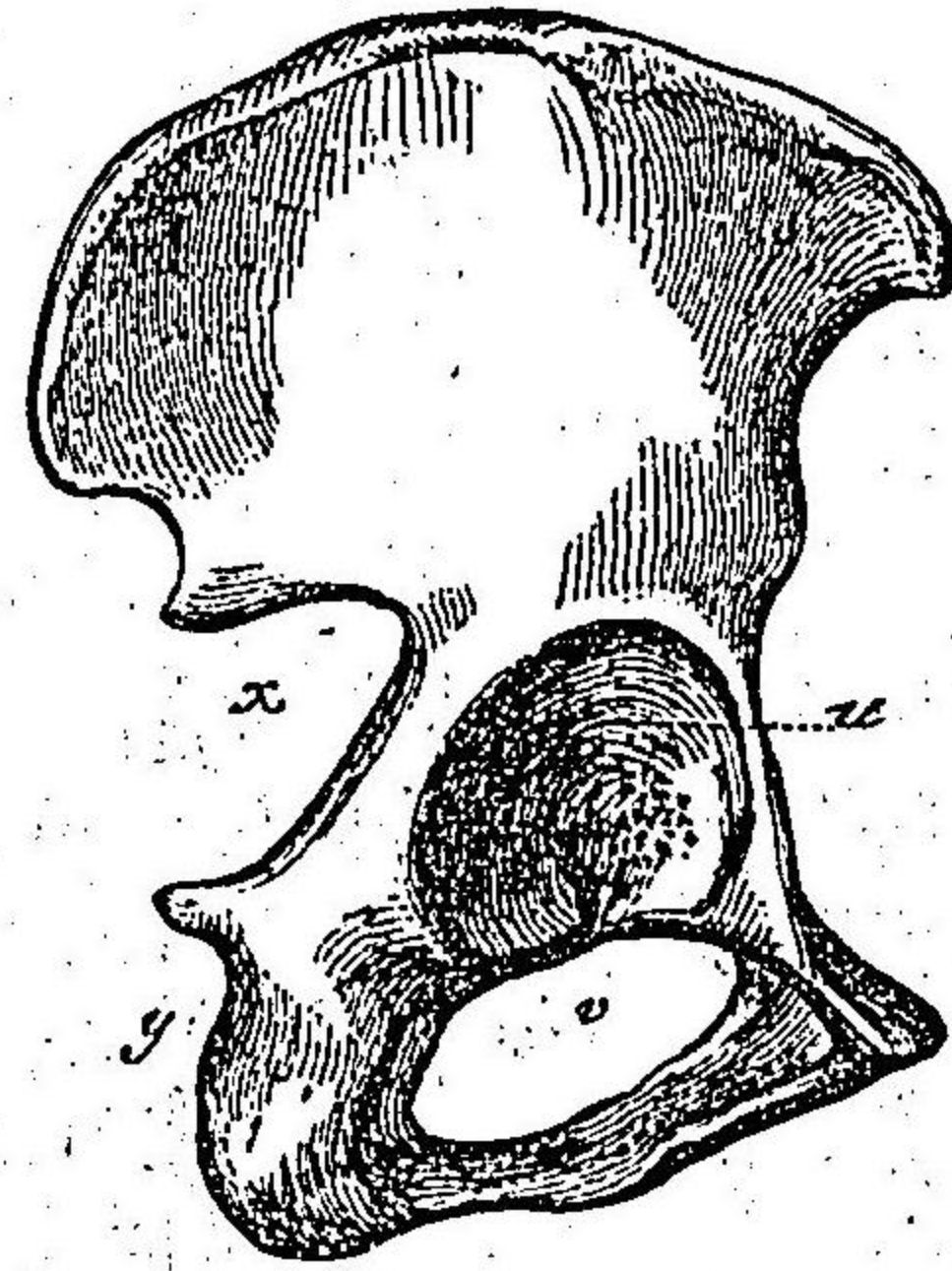


全骨盤
 い、耻骨軟骨
 接合
 ろ、右腸腸關
 節
 は、左腸腸關
 節
 に、右腸骨前
 上棘
 ほ、左腸骨前
 上棘
 へ、腸骨岬
 と、右坐骨結
 節
 ち、左坐骨結
 節

翼は上方の薄
 く扁平なる部分に
 して其上縁には一
 帯の隆起を呈す之
 を腸骨棘と云ひ其
 前部の突出せる部
 を前上棘と稱し其
 下方には前下棘あ
 り後端を後上棘と
 云ふ其下方を後下
 棘と云ふ但し前上

没し大腿骨の上端
 と關節する部を云
 ふ

第五圖 左側より見たる天然天の大一分一骨體



第四圖 右側より見たる天然天の大一分一骨體



腸骨は腕骨の上
 部を成し體及翼の二
 部に分たる

體は下方の強厚
 なる部に於て其下
 は坐骨及び耻骨と接
 續し外面に於て此等
 の骨と共ニ髌骨を形
 成す髌骨とは即ち此
 等の三骨と連合部に
 して骨盤の兩側にあ
 り著るしく圓形に陥

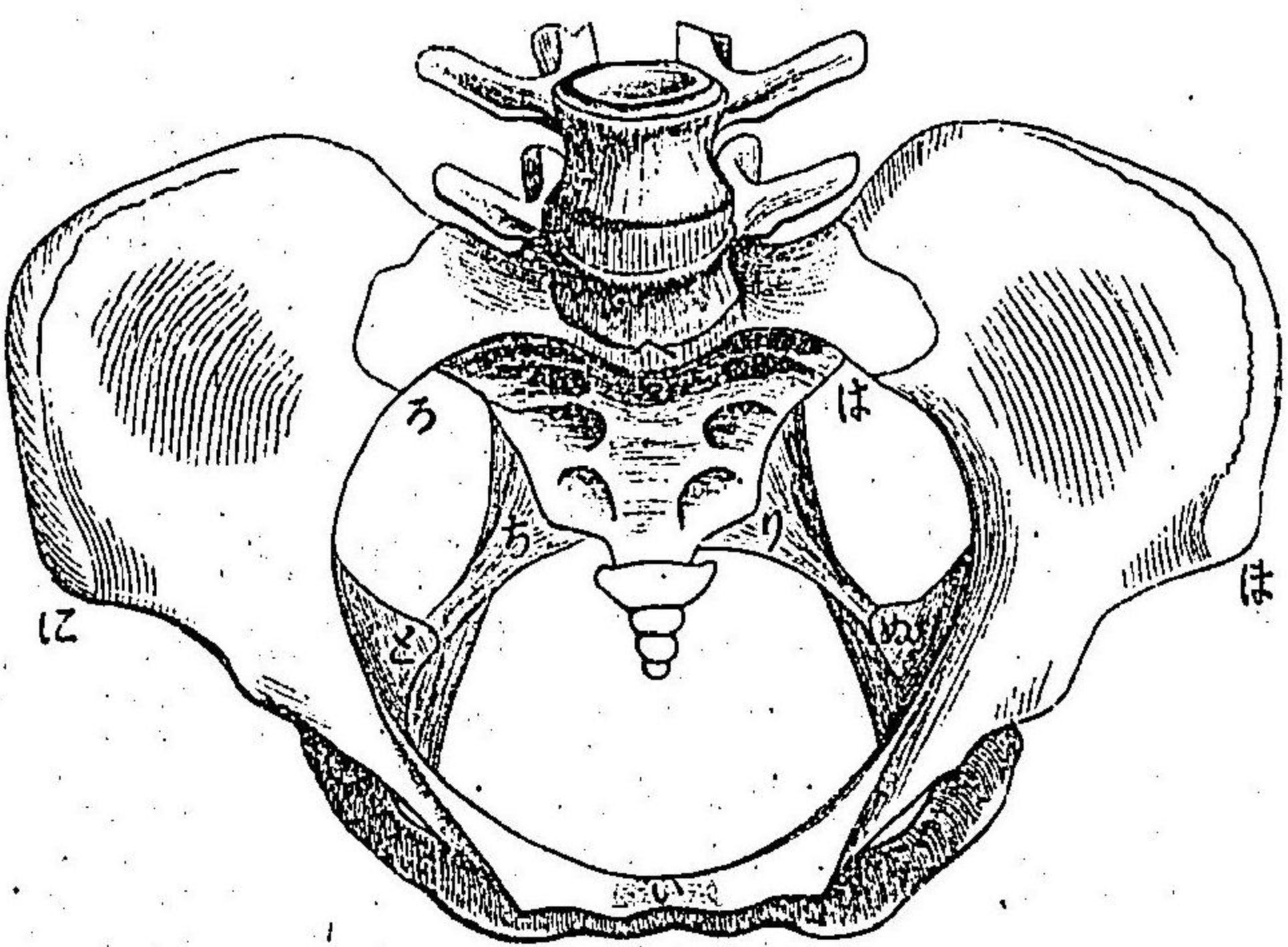
て即ち腸骨、坐骨、耻骨
 之なり

耳狀面
 孤形線
 卵圓孔
 腸骨大截痕
 腸骨小截痕
 腕骨窩
 (一名脾臼)

棘の如く著るしき突出を現はさず而して其後方には耳状の粗面あり薦骨の耳状面と關節す腸骨の内面は稍々凹を呈し腸骨窩をなす腸骨窩の下方に弧形線あり坐骨は骸骨の下部を成し體及び下行枝上行枝の三部に區別す

體は強厚にして其上方は髌臼の一部を成す下行枝は體の一系にして後方にあり其後縁に一の突起を有す之を坐骨棘と云ふ下行枝の下端にして骨質著るしく肥厚する部を坐骨結節と云ひ坐位に於て身體の重點は此部に落つるものなり上行枝は坐骨結節より内上方に向ひて昇り耻骨の下行枝と連続す體は髌臼の前下部を成し其上部腸骨との接際に一の

第七圖



骨盤腔
 恥骨軟骨縫
 右薦腸關節
 左薦腸關節
 右腸骨前上
 左腸骨前上
 左薦坐結節
 右薦坐結節
 左薦坐棘軟
 右薦坐棘軟

小結節を呈す之を腸耻結節と云ふ地平枝は體より前方に於て軟骨により對側の同名骨と接合す之を耻骨縫際と云ふ縫合部の上方に小結節あり耻骨結節と云ひ茲に一條の

隆の一生なり。恥骨結節に至る之を耻骨楯と云ふ。腸骨の弧形
 下行枝は此接合部より下方に向ひて走り坐骨の上行枝
 と連結して一の橢圓形なる孔を成す之を閉鎖孔と云ひ常
 に強く膜によりて閉鎖せらる。又兩側の坐骨結節より耻骨
 近際の下方際に達し一の隅角をなす之を耻骨弓と云ふ。

第四項 骨盤の區別

骨盤は部位に因り内腔の廣狹等しからず之を區別し
 て大骨盤及び小骨盤の二とす。大骨盤とは後方は薦骨兩
 側は無名線前方は耻骨楯に由りて造れる線の上方を稱し
 小骨盤は其下方なり。

第一節 大骨盤

大骨盤の後壁は第五腰椎にして側壁は腸骨翼前壁は
 骨質を缺き前腹壁の下部より成る其形漏斗状を呈し上方

廣く下方狹し。大骨盤は分娩の際著るしき關係なしと雖も其状態を明か
 にするは緊要なる小骨盤の廣狹を知るの標準となすこと
 を得るものなり之を測定するには骨盤外部測法に由るべ
 きものにして其檢すべき部位并に其平均距離は左の如し

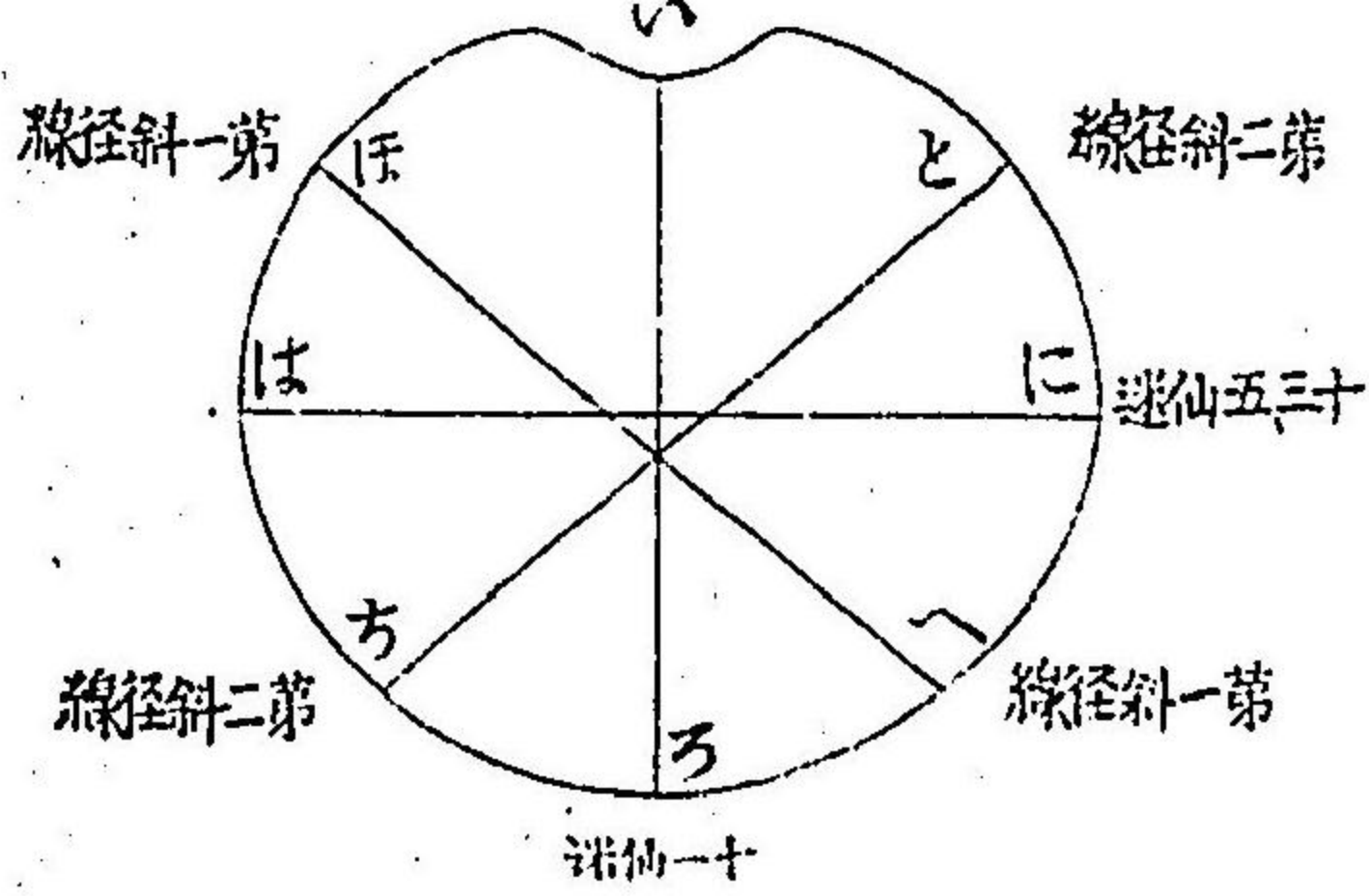
- (一) 外直徑線(一名外耻骨縫線の前面に起り 二〇仙迷
 - (二) 外斜徑線(他側の腸骨前後上棘に至る 二二仙迷
 - (三) 左右腸骨前上棘間の距離 二五仙迷
 - (四) 左右腸骨楯間の距離 二八仙迷
 - (五) 左右大轉子間の距離 三二仙迷
- 以上各距離の長は悉く獨逸婦人に由り計測したるものに
 して日本婦人に於ては之より各徑線共に凡そ二仙迷を減

じたるものに相當すべし其他身長と骨盤とは一定の關係を有するものにして身長多ければ從つて骨盤も大なり又身長小なるに關はらず骨盤の横徑大なる時は異常にして扁平骨盤なるを知るべし

第二節 小骨盤

小骨盤は其廣さ僅に兒頭を通過せしめ得るのみなるが故に分婉に當りて甚だ緊要の關係あり通常單に骨盤と稱するは之を指すものとす其廣狹形狀等は各部均しからず故に之を骨盤入口骨盤出口の三部に區別す骨盤入口(又上口)は後側は薦骨岬兩側は無名線前方は耻骨櫛より形成せられ其形横徑圓形にして薦骨岬の部は内方に凹み耻骨縫隙部は稍尖れり其大さは四種の徑を以て表示せらる而して其最も大なるものは横徑線なり

第八圖

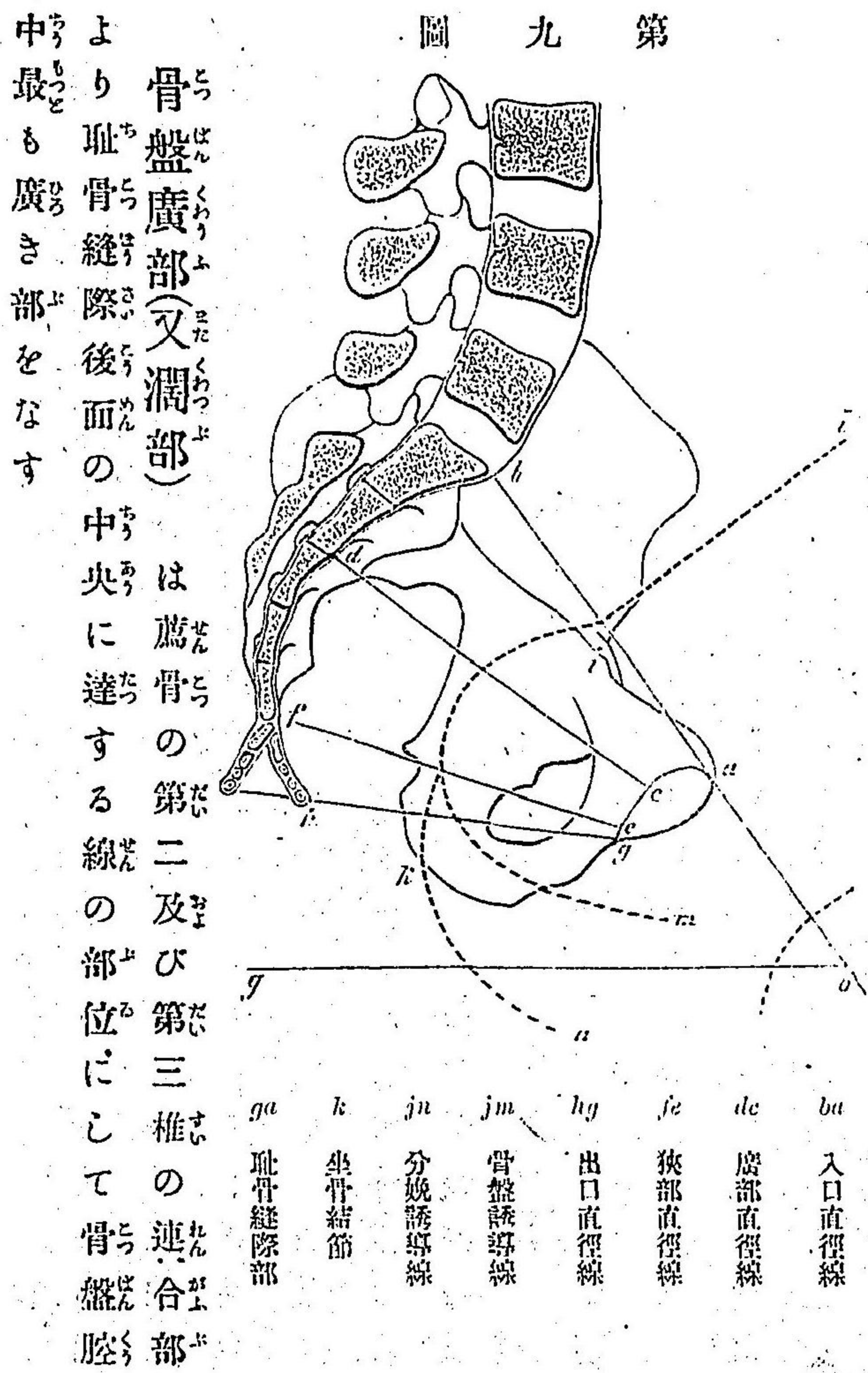


骨盤入口の形状及徑線

りとす
(一) 直徑線 耻骨岬の中央より中央に達するもの
(二) 横徑線 耻骨岬の最大なる距離中
(三) 第一斜徑線 又右斜徑線 左薦骨關節に至り
(四) 第二斜徑線 又左斜徑線 右薦骨關節に至り

骨盤腔とは小骨盤の入口と出口の間を云ひ其後壁は薦骨及び尾骶骨にして側壁は坐骨及び腸骨の下部前壁は左右の耻骨より成れり形は入口と異にして前後に廣く横徑は却て短し之を區別して廣部及び狭部の二となす

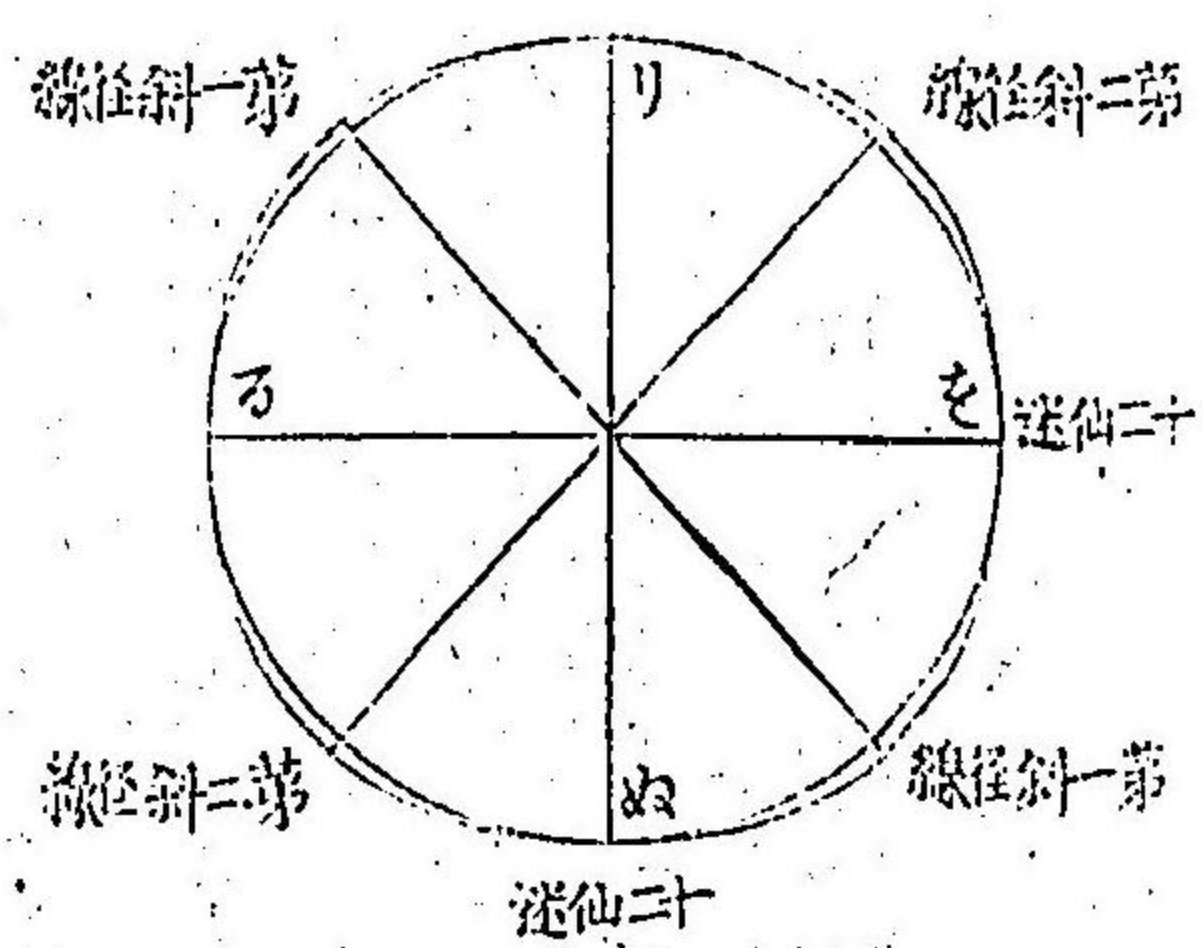
骨盤の左半側及び其前後徑並に誘導線
(天然大の三分一)



骨盤廣部(又潤部)は薦骨の第二及び第三椎の連合部より耻骨縫隙後面の中央に達する線の部位にして骨盤腔中最も廣き部をなす

第九圖

第十圖

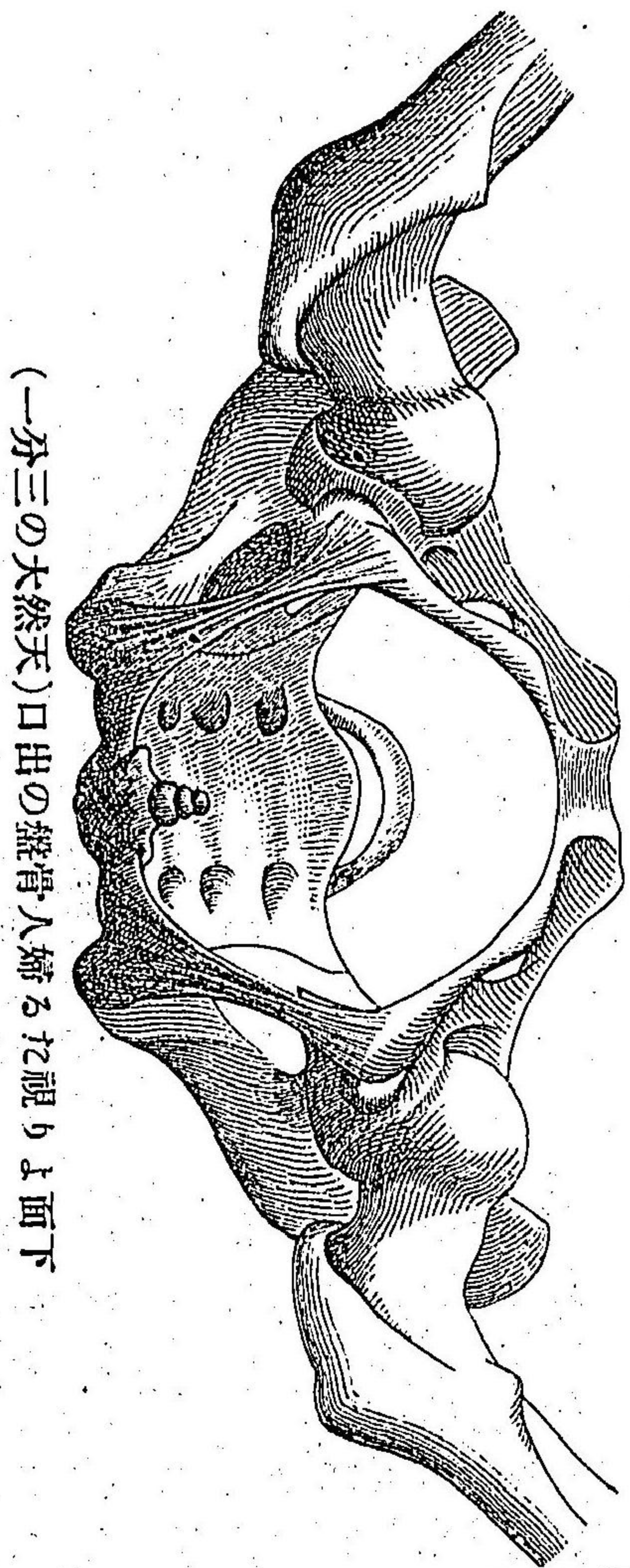


椎體の形状及び徑線

骨盤の關節部より薦骨及尾骶の下の線に至る線の部位にして骨盤腔中最も狭き所となす而して此等の兩部は入口に於けるが如く又四種の徑線を表す其最も廣きは斜線なりとす

骨盤廣部
直徑線 第二第三椎間の中央に達す
横徑線 兩側の距離
第一斜線 右大坐骨孔の上方より左大坐骨孔の上方に達す
第二斜線 右大坐骨孔の中央より左大坐骨孔の中央に達す
第三斜線 右大坐骨孔の上方より左大坐骨孔の上方に達す
第四斜線 右大坐骨孔の中央より左大坐骨孔の中央に達す

- | | | |
|-----|------------------------------|-------|
| (一) | 直徑線 耻骨尖端より
線 耻骨縫際下線に達す | 一、五仙迷 |
| (二) | 横徑線 左右座骨棘間に亘る | 一、〇仙迷 |
| (三) | 第一斜徑線 左右共に軟部に終る
が故に一定せず大約 | 一、〇仙迷 |
| (四) | 第二斜徑線 同上 | 一、〇仙迷 |
- 骨盤出口(又下口)の後側は尾閏骨の尖端兩側は坐骨節前側は耻骨弓より形成せられ其形殆んど圓形をなす。雖も分娩時には尾閏骨を後方に壓排するが故に稍々前後の楕圓形に變ず故に其直徑線は延長し出口に於ける最大直徑線となる。
- | | | | |
|-----|------------------------------|----------|---------|
| (一) | 直徑線 耻骨縫際下線より
線 尾骨尖端に達す | 分常
娩時 | 一、九、五仙迷 |
| (二) | 横徑線 兩座骨棘節間 | | 一、〇仙迷 |
| (三) | 第一斜徑線 此線も亦兩側共に軟部に終るが故に一定せず大約 | | 一、〇仙迷 |
| (四) | 第二斜徑線 同上 | | 一、〇仙迷 |



(一分三の大然天)口出の盤骨人婦るた視りよ面下

第五節 骨盤其他の要件

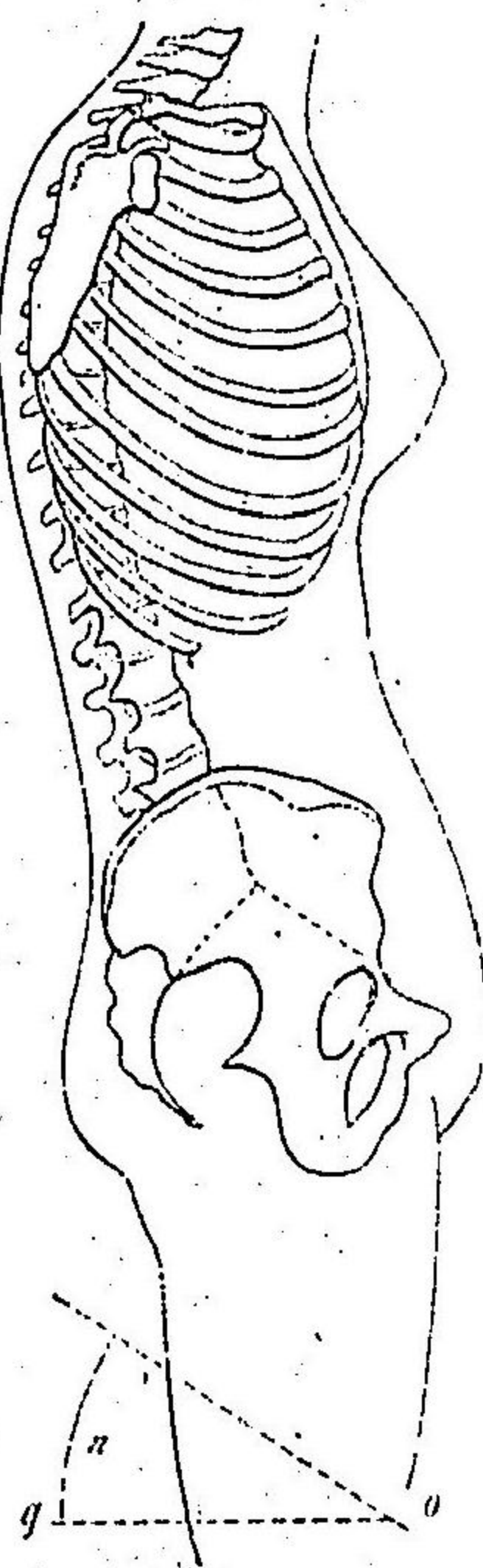
以上述べたるの他骨盤に就て必要なる件あり即ち骨盤高徑傾斜及び其彎曲之なり。骨盤入口と其出口との距離を云ふものにして小骨盤後壁の高さ即ち薦骨岬より尾骶骨の尖

端に至るの距離は十二乃至十三、五仙迷なり前壁の高さ即ち耻骨縫際の上縁と下縁の距離は僅かに四仙迷なるを以て其後壁は前壁に比し殆んど三倍半餘高さものなり

骨盤の傾斜 とは骨盤入口平面の地平線に對する傾斜を云ふものにして骨盤は其入口部に於て薦骨岬は耻骨縫際の上縁より高きこと凡そ十仙迷なるが故に従て入口は上方よりも寧ろ前方に向ふ事強く且つ其面は著るしく傾斜せり之を骨盤の傾斜と云ふ

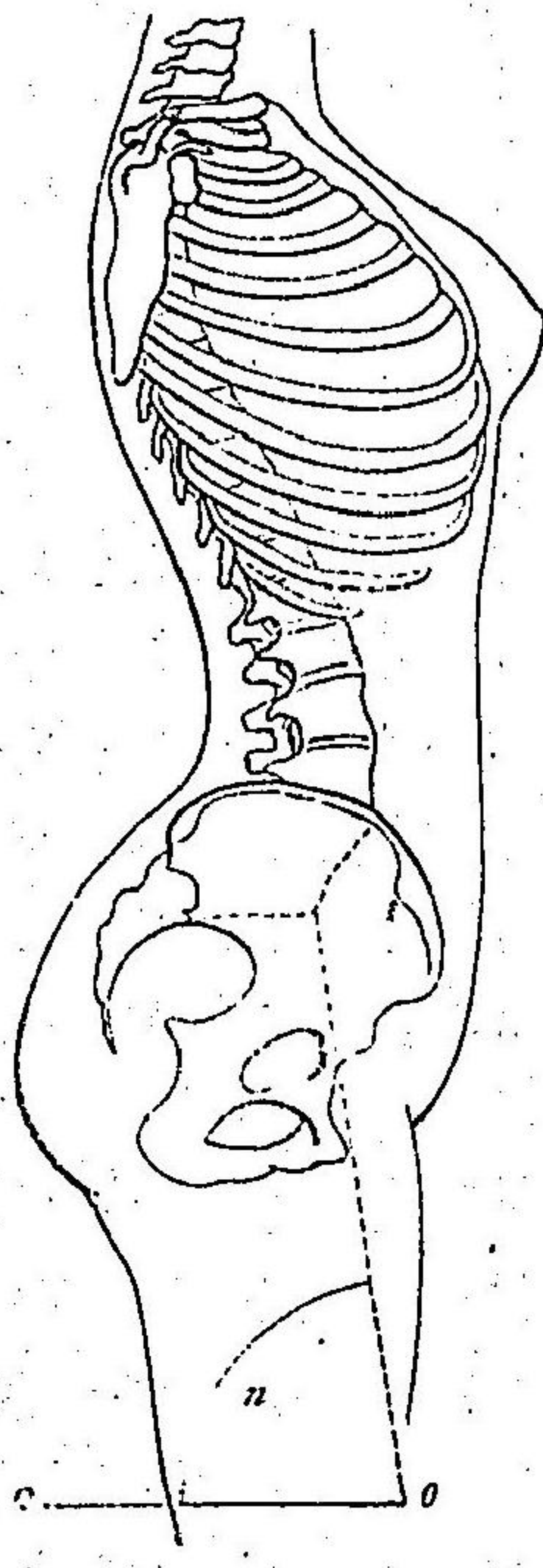
骨盤腔の彎曲 骨盤は其後壁即ち薦骨内面の陥凹に由て腔の彎曲を生ず彎曲の方向は骨盤入口腔及び出口に於ける各直徑線の中點を連通せるものにして殆んど耻骨縫際を中心として畫ける圓き線と同じ此線を名けて骨盤の誘導線又は骨盤軸と云ふ分婉に際し胎兒の通過する方向を示すものにして甚だ必要なりとす

第二十圖



骨盤の傾斜角の弱き者
地平線
骨盤入口の前後徑の延長線と地平線との會合に於て生じたる角度

第三十圖



骨盤の傾斜角の強き者
同上
同上

此二圖は隨意に骨盤の傾度を或は増し或は減じたる者(天然大の八分一)

第四章 男女體格の差異

婦人は一般に男子よりも體格の小なる者とす故に女子

の骨は男子の骨よりも小くして細く上肢、手及び足部も男子より細くして短し然れども女子の下肢殊に上腿のみは却て太きものなり女子の筋肉は男子よりも發育弱く従て力も亦弱し又全身の皮下には多量の脂肪あり之によりて軀幹及び四肢は自ら圓みを帯び軟かなり女子の體格中殊に目立てる部分は肩狭くして腰の反て廣きにあり胸腔は男子より狭きも腹腔は之よりも廣くして長し然れども最も明かに區別をなすべき部分は骨盤及生殖器なりとす今左に骨盤の差異を示さん

(一) 骨盤各部	狭小にして長し	寛大にして短し
(二) 上口の形状	心臟形	横楕圓形
(三) 骨盤腔	狭小にして深し	潤大にして淺し
(四) 下口	狭隘	寛大

(五) 薦骨及尾骶骨 後方に突出す
 (六) 坐骨及耻骨 長し
 (七) 耻骨縫際の横徑 狭し
 (八) 耻骨弓の角度 狭くして七十五度
 此の如く女子の骨盤は一般に廣くして自ら分娩に適せしむるものなり

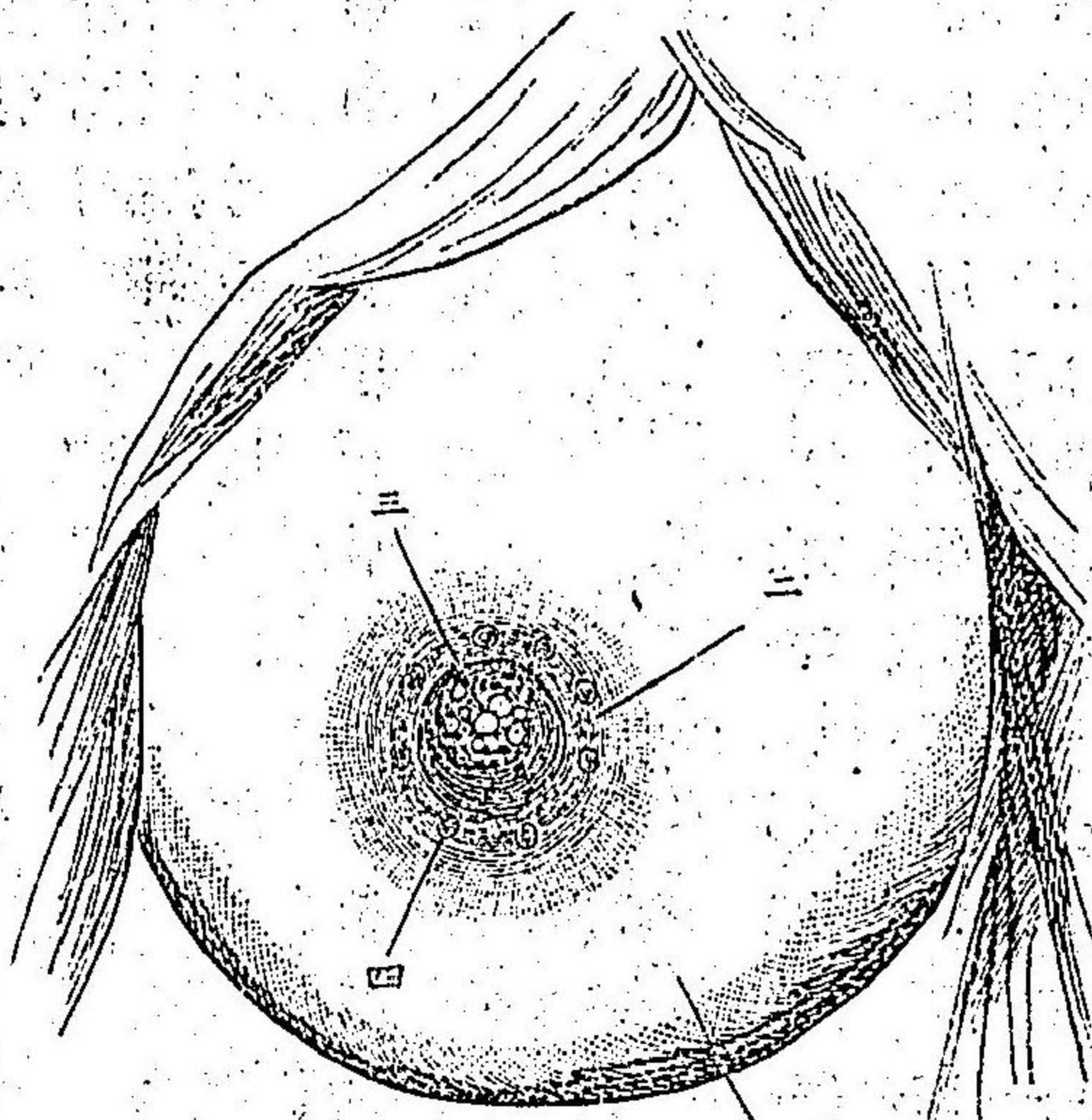
第五章 女子生殖器

女子生殖器を別ちて外生殖器及内生殖器となす外生殖器とは乳房及び外陰部を云ひ内生殖器とは膈子宮、輸卵管及び卵巢、附屬諸靱帯を云ふ其一般作用は交接、妊娠、分娩、授乳等を營むものなり

第一項 外生殖器

第一節 乳房

乳房は乳汁の分泌を營むものにして胸廓前面の兩側に



一 乳體
二 乳叢
三 乳頭
四 皮脂腺

又乳頭と云ひ其周圍は暗褐色を呈す之を乳暈と云ふ乳頭

に於ては僅に隆起す
るに過ぎざれど
も春期發動期に
ち十四五才に至
れば漸次發育し
妊娠すれば著る
しく増大す而し
て乳房の中央突
出せる部を乳頭

欠

MISSING

を後連合と名く其前方には陰唇繫帶あり
 小陰唇は大陰唇の内方にあり之によりて被覆せらる
 上端は二脚に分れ陰核の上下に達し下端は漸次狭小とな
 りて膣口の兩側を圍み後連合部に至り左右互に連結して
 陰唇繫帶に移行す下部に位置せる小隆起にして小陰唇の
 上端之に連結す
 前庭は左右小陰唇の間隙にして三角形の平坦部なり
 其中央に三角形を成せる尿道口を現はす
 膣口は前庭の下部にあり其周圍には處女膜附着し中
 央に縦形の孔を現はす此膜は通常初回の交接によりて數
 所に断裂を生じ處女膜根となる
 バルトリン氏腺は小陰唇の内方膣口上部の兩側にあり
 て小陰唇及び處女膜の間に開口し粘液を分泌す

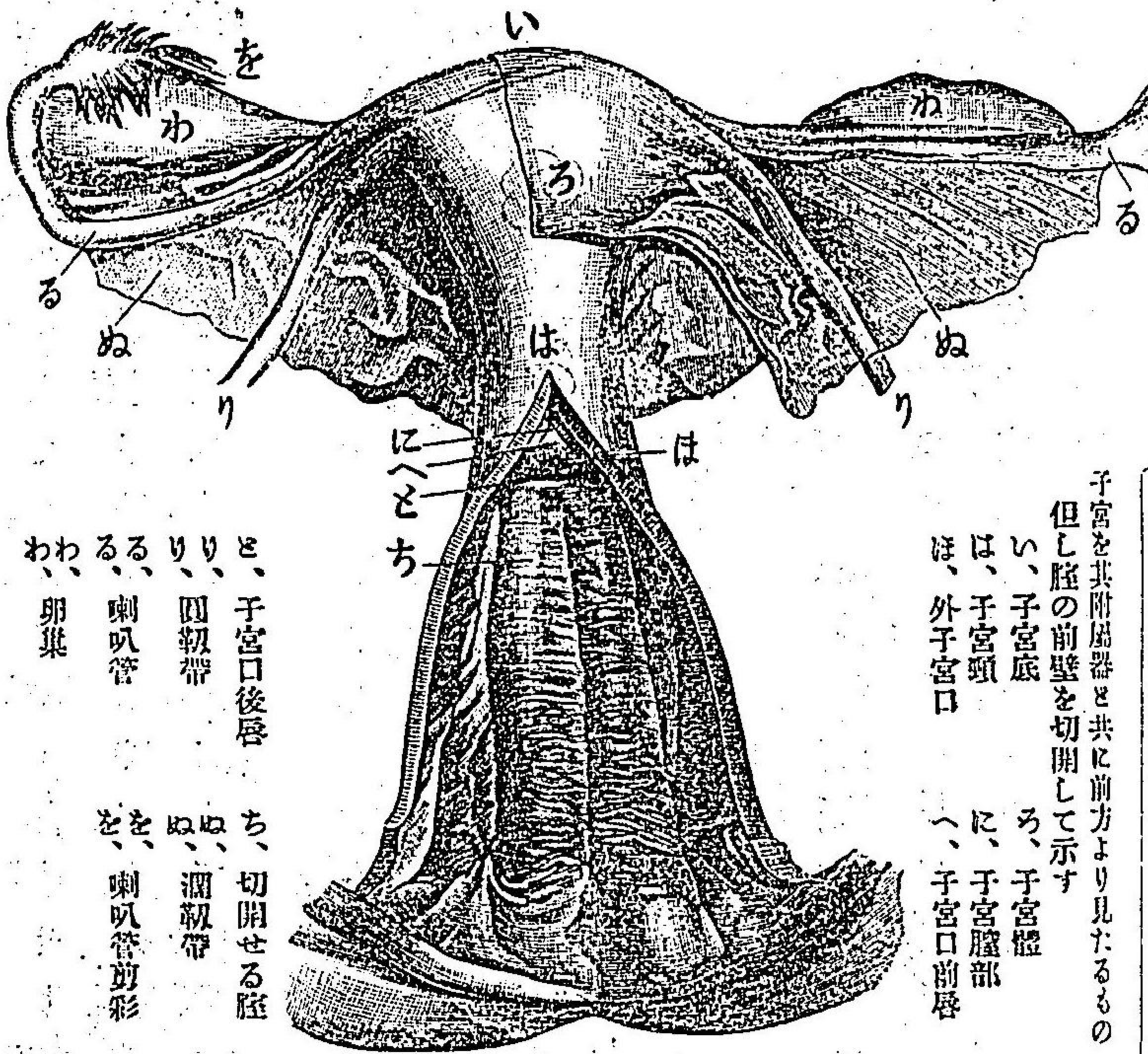
會陰 陰唇繫帶と肛門の間にして分娩の際甚だしく延長するものなり

第二項 内生殖器

第一節 膣

膣は凡そ十一仙迷の長さをも有する膜管にして膣口より子宮に達し(骨盤誘導線)骨盤軸の方向に從ひて前方に彎曲す上端に子宮膣部を圍擁し且上方に向て囊状に膨出せり此部を膣穹窿部と云ひ前後及び左右に區別す而して後膣穹窿部最も深し膣の内面は粘膜を以て被はれ其前後壁には著るしき横皺を呈す之を前後及び後膣柱と云ふ通常膣の前壁と後壁と後壁とは互に密接するものとす又膣管の前方には膀胱の一部及び尿道あり其後壁は直腸に接するものなり

第六十圖



子宮を其附屬器と共に前方より見たるものなり但し膣の前壁を切開して示す

子宮頸、子宮膣部、子宮口前唇、子宮口後唇、外子宮口

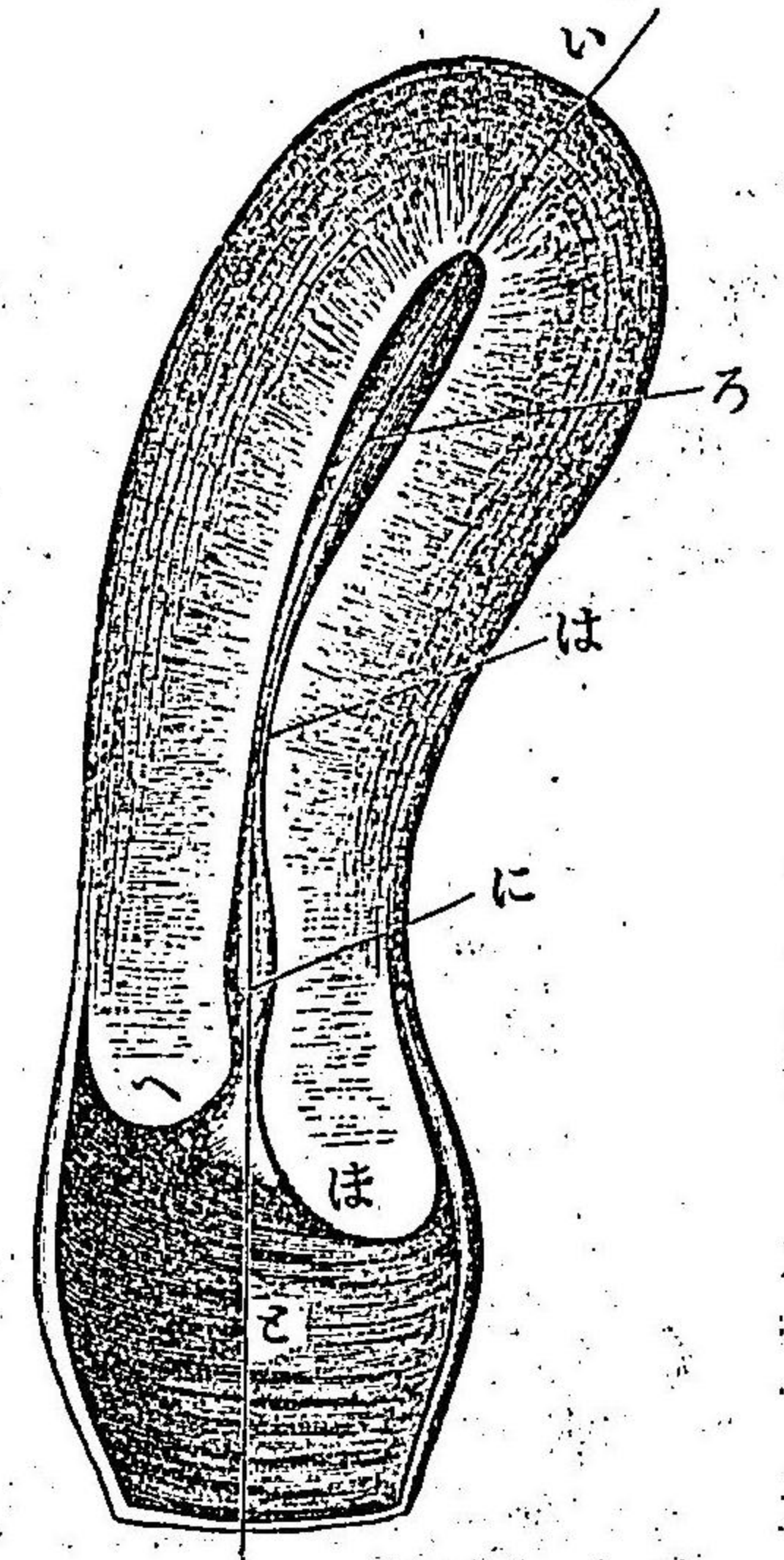
子宮口後唇、切開せる膣、潤滑帯、刺叭管、卵巣

第二節 子宮

子宮は小骨盤内に在りて其前方は膀胱に接し右腸に接し左腸には輸卵管圓靱帯及び潤滑帯等を附着せしむ其形は扁平梨子状を呈す

し前面は平坦にして後面は稍々凸隆せり而して子宮は血管に富みたる肉質より成り長さ凡そ八仙迷を有す但し一度分娩を経たる者は少しく大にして圓形を帯ぶる者なり

第七十圖



天然大の子宮を縦断して側方より見たるもの
い 子宮長軸
ろ 子宮腔
は 子宮内口
に 子宮頸管
ほ 子宮腔前唇
へ 子宮腔後唇
と 腔柱

子宮は通常稍々前方に傾斜し(前轉)且つ僅かに前方に屈する(前屈)の位置を保つと雖も膀胱及び直腸の盈虚或は其他の原因により變化することあり子宮を區別して底體及び頸の三部となし其内腔を子宮腔と稱す

子宮底は鈍圓にして子宮の最上部をなし稍々前方に向ひ兩側には輸卵管、圓靱帶、卵巢靱帶を附着す
子宮體は底及び頸の間に在る部に於て兩側には潤靱帶を附着す
子宮頸は體の下方にして狭小なる所を云ひ其一部は腔内に突出す之を子宮腔部と云ふ子宮腔部の中央には一孔あり之を子宮外口又は單に子宮口と稱し其前方を前唇後方を後唇と稱す而して子宮外口は通常圓形なれども既に分娩を経れば周圍の腔部に破裂を生ずるが爲め横裂又は不正形を現はす故に前後の兩唇も經産婦に於ては著るしく別るものなり
子宮腔は三角形をなし一角は下方にありて其尖端は子宮外口なり兩角は上方に位し輸卵管の内腔に連通す又子宮外口の上凡そ二仙迷半にして内腔頗る狭小なる

之を子宮内口と云ふ即ち子宮頸及び體の連合部に當れり
内口及び外口の間は子宮頸の部に於て子宮頸管と稱し中
央部は稍廣し
子宮腔及び頸管の内面は粘膜を以て被はれ前後の壁互
に相接するものにして妊孕卵を附着せしめ之を營養する
の作用あり

第三節 輸卵管

輸卵管は又喇叭管と稱し子宮底の兩側より横に走り
潤滑帶の上縁内に位せり而して其長さ凡そ十仙迷なり管
の内端は細小にして子宮腔に連接す此部を輸卵管の子宮
口と云ふ其外端に至るに従ひ漸次膨大して終に壺狀の廣
き部をなす之れを輸卵管の壺腹と名け腹腔内に開口せり
其壺腹開口部に數箇の小片を附す之れを剪線と名す其一

片の剪彩は頗る長くして卵巢に連る之れを卵巢剪線と云
ふ
輸卵管の内面は粘膜を以て被はれ且つ粘膜上には胚毛あ
り常に子宮腔に向ふ所の運動を營めり輸卵管の作用は卵
巢より排出せる卵を剪線によりて捕へ先づ之を壺腹に受
け次で胚毛の運動により子宮腔の方に送るものなり

第四節 卵巢

卵巢は子宮の兩側にして輸卵管の下方潤滑帶の數層
内にあり扁平長圓形を呈し恰も鳩卵の如き大きさを有す其
外端は卵巢剪線に連なり内端には卵巢靱帯を附着す卵巢
の實質内には無數の小胞あり之を濾胞と云ひ其發育せる
ものをグラフ氏胞と云ふ
の内には透明の液と卵子とを含有す成

熱するに從ひ益々其液體は増加し胞は卵巢の表面に向て突出し月經開始の時期に至り終に破裂して卵子を脱出せしむ此卵子は輸卵管の剪線より捕へられ子宮腔内に送らるるものなり今若し此卵子が子宮内に至るの間に於て交接により進入したる男子の精蟲と合する時は茲に受精卵をなす以て妊孕卵となりて子宮に達し其内に發育して胎兒を生成するものなり(第二編參照)

破裂せるグラフ氏胞は其内腔漸次に黄色を呈するに至る之を黃體と名づく而して妊娠せる際は其黃體第三四箇月に至るまで増大し著るしき發育を現はす之を眞黃體と云ふ之に反し妊娠せる時は發育せずして漸次萎縮す之を假黃體と名く此兩種の黃體は其後共に癥瘕をなして癒合し卵巢の表面に小なる凹みを留るものとす又グラフ氏胞は大約四週間の反覆を以て各卵巢より一個宛の破裂を營むものなり

月經血の分量出血時の長短各出血の距離及び月經の初發等は人々の

大に相異なる者なり故に通常多少の變化あるも常人自から健康を感ずる間は其異状を直ちに疾病となすべからず

處女に於て月經前の苦惱症あるも通常の月に月經を見ず或は前月月經を見し期日を過ぐるも出血延引し或は前回の月經時に比すれば苦惱一層長く且つ劇くして大小便の苦惱を合併し或は出血流動性を失ひ凝塊となりて下り或は出血劇烈に漏出し或は以前の月經より出血頻々漏出し或は已に月經期を過ぐるも尙ほ骨盤内の不快を脱せず若くは陰部より多量の帯下及血液流出する時は速に婦人科醫の診察を受けしめざるべからず上記の諸症等を等閑に附する時は不妊症或は到底醫治すべからざる疾病を誘發すべし然れども不適當の藥劑等を用ゆるの害は之を放置するより甚し助産婦は此際已に其疾病の何たるを判定し得ざる者たるを顧みて決して自から藥劑を投與し或は子宮照定器等を使用することあるべからず

婦人の月經期に達する時は平素よりも一層注意して其身を保護すべし殊に嚴寒及炎熱に遭遇するを慎み又甚しき精神の勞用を避くべし是れ月經中は甚だ諸種の病因に感動され易ければなり月經期中に

長き旅行或は舞踏會に參するは不注意の暴動たるを免れず
 月經期中は特別に身體の清潔を命ずべし第一粘液及血液を外陰部
 に附着せしむべからず即ち壓湯の洗浴を行ひ褌衣及び褥布を成べ
 く清潔にして履交換し用ゆべし月經中の清潔に就ては許多の愚説流
 行す助産婦の説破すべき所なり就中處女の母は殊に其清潔方を教訓
 すべし斯くする時は能く許多の疾病を未然に豫防し健康の婦人及び
 母を養成するの一大助力たるべし
 月經中を通じて裂口なき股衣の着用は衣服の下に蓄積せる塵埃の
 内陰部に侵入するを防ぐ者にして尤も清潔の目的に適する衣服なり
 月經の血液は緊く閉塞せる綳帯にて抑留すべからず又古き布片に吸収
 せしめて溢れを防ぐことあるべからず殺菌綿球或は撒里矢爾酸綿を
 閉塞股衣或は丁字形綳帯にて生殖器前に維持し以て血液を吸収せし
 め且つ清潔に必要なる如く履之を交換するを最上とす彼の上層社會
 に行はると刺繡履帯は全く用ゆべからず此物は假令極善く洗濯す
 と雖も前月經より次の月經まで貯ふる時は生殖器に疾病の種子を植
 る媒介となる患を脱せず

月經の反復は大約四十五歳まで連續するを常とし之より長く或は短
 き者亦屢之あり然れども此年齢中妊娠し或は嬰兒に哺乳するに由て
 月經の休止するは免れざる所なり此月經反復する期限間即ち大凡三
 十年間は概して妊娠し得る者たり是れ此年限中は卵巢中に妊娠すべ
 き卵を生じ得ればなり成然したる卵は月經時に於て卵巢より脱離し
 喇叭管を通じ子宮腔に達す茲にて男精に會合して受胎せざる時は陰
 腔を通じ何事もなく體外に排泄す

老婦の月經終止は卵巢官能の廢止を伴ひて其生殖器は小兒の生殖
 器と同一の景況に回復す

最多の婦人に於ては月經の終止殆も疾病の症候を生せず然ども月
 經終止期に及んで以前患へたる病症を再發し或は出血を頻發し或は
 多量に出血し或は月經已に終止せる後之を再發する婦人も亦屢之
 り此諸症發起するに方り適當の時早く眞醫の診察を受けずして長時
 の衰弱或は不治の大病を誘起すること亦鮮からず然るに尋常の婦人
 は月經の終止すべき年期に起る不規則の出血を所謂生活改革期に達
 くべからざる現象と考へ易し加之一回全く終止せる月經の再發を其

他は健康なりと覺ゆるを以て全く其氣力再興の微と看做す婦人亦鮮からず而して上記の不規則の出血は已に頗る發育せる子宮痛の初徴たることを厭之あり注意せざるべからず蓋し子宮痛は適當の時に手術を施して之を截除するに非ざれば遂に其婦人を死に至らしむる者なれども其最初多く疼痛を發せざるを以て之に罹れる婦人は至つて之を大病と考へずして治療の時期を失したるもの多し故に助産婦若し斯の如き出血に就て意見を聞かると時は其婦人は成るべく直に醫士を迎ふべきことを勸告すべし是れ其出血の果して何事を徵するか其健康の保存或は回復に何事を要するかを確定し得るは唯精密練熟の検査のみなればなり

第五節 附屬諸靱帶

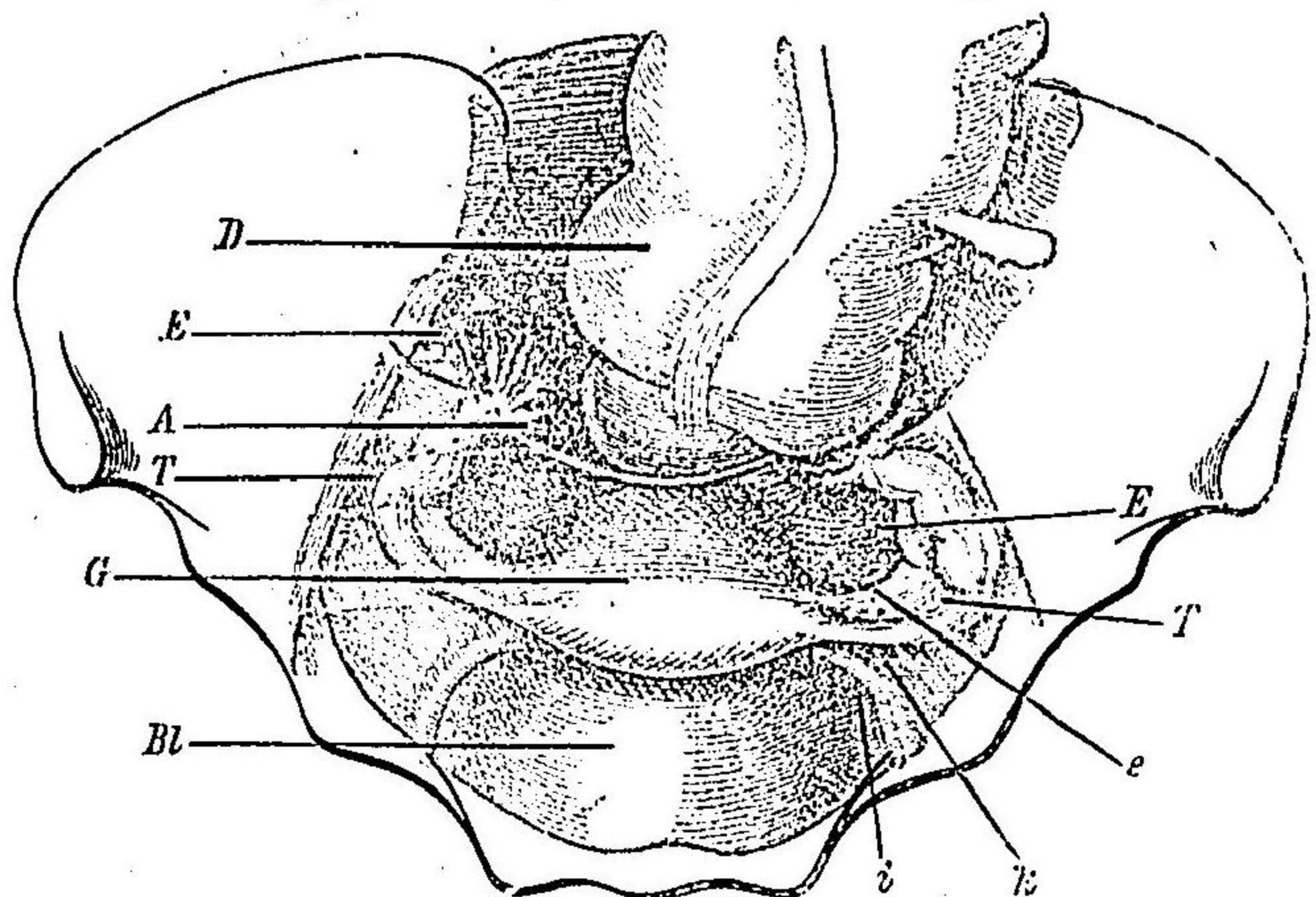
生殖器の附屬靱帶中主なるものは潤靱帶にして其他靱帶薦骨子宮靱帶、卵巢靱帶等なりとすは子宮の左右にある二葉の潤靱帶(又扁靱帶ニ云ふ)

欠

MISSING

子宮後方に轉位し或は増大して著るしく

第十二圖



婦人骨盤内諸臓器を上面より視たる
 圖
 A 潤靱帶
 B 膀胱
 C 子宮
 D 大腸
 E 左卵巢の内縁
 F 左卵巢の後縁
 G 喇叭管
 H 卵巢
 I 右卵巢の後縁
 J 潤靱帶
 K 子宮
 L 膀胱
 M 直腸
 N 乙状大腸
 O 右卵巢の内縁
 P 右卵巢の前縁
 Q 喇叭管
 R 卵巢
 S 左卵巢の前縁
 T 左卵巢の後縁
 i 子宮圓靱帶
 k 子宮潤靱帶
 e 卵巢靱帶

直腸は薦骨との子宮及び膀胱の間を占める大腸の間に位置せる大腸の一部分にして薦骨の凹面に沿ふ骨の下り尾骶骨の尖端より前方に開き三仙迷の部に開口す此の開口を肛門と云ふ若し大便により直腸が充滿すれば子宮を前方に壓すべく又直腸を壓迫す

ば便秘を來すものなり時としては便意頻數の感あることあり是膀胱に於けるが如く直腸の擴張し能はざるによるものとす

○ 附 録

日本婦人に於ける生體骨盤外検査の成績

我國醫學中産科學の如きは尙完全なる進歩を遂げたりと云ふ可からず從て斯の學に緊要なる種々の調査報告の如きも充分なるものは少なく常に遺憾とする所なり殊に骨盤計測の如きは實地産床に臨み分娩を處置する方針を示す可き重要な事件なるが故、久しく余等の注意を喚きたれども、多忙の中直ちに成就し得べきの業にあらず閑を踰みて之に従ひ茲に予及予が助手等の調査せしもの本邦婦人七百六拾人に就き得たる所の成績は次に記載する所の如し、但し實際検査せる人員は尙多數なりしと雖も、其少く疑はじき者及身長に記載なきものは一切控除せるか故

に上數に止まれるなり、
 日本婦人骨盤の外徑線
 予輩が計測せる日本婦人骨盤の外徑は次に記載するが如
 し其概算數は精算數より四捨五入の算法により其端數を
 控除せしものとす

検査人員五百參拾八人

徑線	精算數	概算數
一 外直徑線	一八、九	一八、〇
二 兩腸骨前上棘間	三三、〇	三三、〇
三 兩腸骨髀間	二五、五	二六、〇
四 兩大轉子	二七、六	二八、〇
五 外斜徑線	二〇、一	二〇、〇
六 腰圍	七六、〇	七六、〇
七 身長	一五三、三	一五三、〇

以上は予輩が第一回に報告せし處にして爾來多數の計測中最も正確なる

者二百二十五人の統計を調査するに後者は身長の大なるのみならず骨盤の
 外徑も亦一般に大にして就中外直徑線は一九・二五仙迷を算し一〇・六仙迷の
 差を生ずるに至れり(第一回の外直徑線は一八・一九仙迷)是れ恐らくは前回よ
 りは一般に體格の善良なるもの多かりしに原因せしものなるべし、
 予輩が第一回に於ける成績を獨逸婦人に比較すれば次の如し

徑線	日本婦人	獨逸婦人	差
一 外直徑線	一八、〇	二〇、〇	二、〇
二 兩腸骨前上棘間	三三、〇	二五、〇	八、〇
三 兩腸骨髀間	二六、〇	二六、〇	〇、〇
四 兩大轉子間	二六、〇	三三、〇	七、〇
五 外斜徑線	二〇、〇	三三、〇	一三、〇
六 腰圍	七六、〇	八九、〇	一三、〇
七 身長	一四六、〇	一五八、〇	一二、〇

上表に據るに其多數の者に於て各二・仙迷宛少なく殊に兩大轉子間に於て
 日本婦人は獨逸婦人に比すれば二・八仙迷(二七・六一)にして四・仙迷少なるを見
 るべし而して本邦婦人の徑線を列記すれば一八、二〇、二三、二六、二八、仙迷にし

て獨り前上棘間の距離奇數なるの外他は皆偶數なるが故に大に記憶に便な
ること尙獨逸婦人に於けるものと一轍なりとす
次に予輩が將來二百二十五人に就て検査し得たる成績を記載し更に之を
獨逸婦人に於ける者に比較すべし

徑線	日本婦人精算數	同上概算數	獨逸婦人	差
一 外直徑線	一九、三五	一九、〇〇	三〇、〇〇	一、仙迷
二 兩肋骨前上棘間	三三、三三	三三、〇〇	二五、〇〇	二、〇〇
三 兩肋骨前上棘間	二五、八一	二六、〇〇	二六、〇〇	三、〇〇
四 大轉子間	二八、七三	二八、〇〇	三三、〇〇	四、〇〇
五 外斜徑線	三二、四一	三二、〇〇	三三、〇〇	一、〇〇
六 腰圍	七九、〇四	七九、〇四	八九、〇〇	一〇、〇〇
七 身長	一四六、九四	一四七、〇〇	一五八、〇〇	一一、〇〇

今予輩が第一回と第二回との成績を對照して之を表示し且つ其總平均を
計測するに左の如し

	第一回	第二回	第一回と第二回との差	總平均數
一 外直徑線	精算數 五百三十五人 一八、一九	精算數 二百二十五人 一九、二五	第一回の差 一〇、〇六	七百六十八人 一八、五〇

二 兩肋骨前上棘間	三三、三〇	三三、三三	〇、三三	三三、三三
三 兩肋骨前上棘間	二五、五五	二五、八一	〇、二六	二九、三三
四 大轉子間	二七、六一	二八、二七	〇、六六	二七、八〇
五 外斜徑線	三〇、一一	三二、四一	一、三〇	三〇、五〇
六 腰圍	七九、〇〇	七九、〇四	一、二八	七九、二二
七 身長	一四六、三三	一四六、九四	〇、六三	一四六、五〇

即ち上表によりて見るが如く第一回の成績と第二回の成績とは其精算數
に於てこそ各多少の差異あれども其根元數を通過すれば只外直徑線外斜徑
線及腰圍に於て漸く一、仙迷以上の差を有するに過ぎず而して其總平均數は
實際予輩が本邦婦人に於ける骨盤外徑として信用すべき者なりとして疑は
ざるなり

又日本婦人の生體骨盤外徑を獨逸婦人の者と比較すれば一般に短小なる
を見ると雖骨盤の大小は身體の大小に關係すべきが故に日本婦人の身長腰
圍を獨逸婦人に比すれば共に大約一、仙迷矮小なるを以て考ふれば體格と
骨盤との對照に於て彼我共に著しき差異なきを知るべし、今身長を一〇〇、と
し各外徑線の對照を掲ぐれば左の如し

日本婦人

獨逸婦人

	緒方第一回	同第二回	同總平均	マルチン
一 外直徑線	一二,三三	一二,九二	一二,三三	一二,六六
二 兩肋骨前上棘間	一五,五六	一五,六四	一五,七三	一五,八三
三 兩肋骨節間	一七,八七	一七,六六	一七,四二	一七,七二
四 兩大轉子間	一九,一八	一九,〇四	一九,二九	二〇,二六
五 外斜徑線	一三,七〇	一四,三六	一三,七八	一三,九三
六 腰圍	五三,四三	五三,七二	五三,五五	五六,四四
七 身長	一〇〇,〇〇	一〇〇,〇〇	一〇〇,〇〇	一〇〇,〇〇

蓋し事物を調査せんとするに當り其局部に就て個々に之を觀察するとき
 は各々一種特有の狀況あるを見るべしと雖其全般に亘りて各個の狀況を參
 酌均等するに及び始めて其大要を究むることを得べし我骨盤調査の如き者
 にありても亦固より然るべきこと勿論なりとす今予輩が期を異にし所を異
 にして檢測せる者を列記すれば次に示すが如く亦各個に於ける成績は相異
 なる所ありと雖積て數千百に至り之を平均すれば終に大同小異の數を得べ
 し此を以て予輩の調査せる所は現今に至るまで壹千有餘名に過ぎずと雖其

成績の互に相近似するより推察すれば今後更に數千萬人の調査を果せるも
 亦甚だしき差異を呈することなかるべし

京都府下高野四十六人 東緒方病院 院十四人 大阪船場 以上二百十人 以後同三十九年 附後第二回 同上最大
 野四十六人 三十七人 院十四人 六十三人 明治三十七年 八月迄共合 計百三十五人 二百二十五人 及最小數

一 外直徑線	一八,一五	一八,一五	一八,一五	一八,一五	最大 三三,〇〇 最小 一五,〇〇
二 前上棘間	二三,三三	二三,三三	二三,三三	二三,三三	最大 二六,五〇 最小 一九,〇〇
三 肋骨節間	二五,二五	二五,二五	二五,二五	二五,二五	最大 二八,八二 最小 二〇,〇〇
四 兩大轉子間	二七,二七	二七,二七	二七,二七	二七,二七	最大 三〇,〇〇 最小 二二,〇〇
五 外斜徑線	一七,四四	一八,〇二	一七,四四	一七,四四	最大 二〇,二二 最小 一七,〇〇
六 腰圍	六,六六	六,六六	六,六六	六,六六	最大 七,〇四 最小 七,〇一
七 身長	一四,〇〇	一四,〇〇	一四,〇〇	一四,〇〇	最大 一五,〇〇 最小 一三,〇〇

今本邦生體婦人の骨盤に於ける諸氏の計測せる成績を比較すれば次表の
 如く其數始と相一致し其差五乃至七密迷に過ぎず

姓名	小金澤	榎木	下楠田	緒方	緒方	兩平均
一 外直徑線	五〇	八四	一四二	二〇〇	五三六	三三五
二 前上棘間	八四	一四二	二〇〇	五三六	三三五	七三三

外直徑線	一八、五	一九、一七	一九、三五	一八、六三	一八、一九	一九、二五	一八、五
前上棘間	二三、五	二三、九四	二三、九二	二三、四二	二三、二〇	二三、三三	二三、〇
腸骨櫛間	二六、二	二五、五三	二五、八四	二六、〇四	二五、五五	二五、八一	二六、〇
大轉子間	二八、九	二七、八六		二八、五	二七、六一	二八、二七	二八、〇
外斜徑線	二〇、五〇	二〇、五〇	二〇、三六		二〇、一一	二〇、四一	二〇、五

予は今更に産科學上最も必要なる關係を有する直徑線を論ぜんが爲め小金井大澤が生體骨盤に就て検査したる者を標準として之を表示せんとす

検査者	検査人員	外直徑線
小金井大澤	五〇	一八、五〇
榊	八四	一九、二七
木下	一四二	一九、三五
楠田	二〇〇	一八、六三
緒方第一回	五三六	一八、一九
緒方第二回	三三五	一九、二五
緒方總平均	七六三	一八、五〇

上表によるときは小金井大澤の計測に最も近似せるものは楠田にして其

差僅かに〇、一三仙迷、次に予が第一回に於ける者にして其差〇、三一仙迷を算す而して榊及び予が第二回に於ける者並に木下に至りては共に稍著しき差異を有し即ち甲は〇、六七仙迷乙は〇、七五仙迷丙は〇、八五仙迷の差あるを見るべく就中木下の者最も大にして最も小なる予が第一回の者に比較すれば一、一六仙迷の差異を發見すべし然り而して殊に予が計測せし第一回と第二回に於ける七百六十人の總平均數は上表の如く其精算數一八、五〇仙迷にして小金井及大澤に於ける者と全く相一致するは實に奇と云ふべし加ふるに楠田の一八、六三仙迷も亦若しく之に近似せるを以て見れば日本婦人に於ける外直徑線は小金井及大澤が記述し而も予の總平均精算數に於て一致する處の一八、五仙迷なる系數は將來尙多數の統計を得るの曉と雖も殆んど動かすべからざる者なるべしと信ず

但し此問題を決定するには極めて精密なる検査を要するは論を俟たざる所にして腸骨前上棘腸骨節の如き部にありては計測器の尖端直に骨面上に接し其間僅かに皮膚を存するに過ぎず爲めに差異を生ずることも又僅少なるべしと雖、外直徑線は皮下脂肪組織に多寡あり又其部位を定むるに於て頗る困難なる場合少なからざるが如き共に其差をして大ならしむるの原因と

なるべし、

夫れ然りと雖も之が缺點を補はんが爲めには臨床上内結合線のあるあり、若し外直徑線にして多少疑の存する際に於ては即ち内結合線を計測し相對比して以て之を決定することを得べし

實地上緊要なる骨盤の内結合線に就て小金井及大澤の報告によれば日本婦人に於て九、八乃至一三、〇仙迷にして中數一一、七仙迷を有しあいの婦人は日本婦人に比すれば平均〇、四仙迷大なり而して骨盤入口の内直徑線は兩人種殆ど同一にして男性は一、二、〇仙迷女性は一〇、〇仙迷とす、此一〇、〇仙迷を内結合線より減ずるときは一、七仙迷の差あり、即ち之を以て日本婦人に於ける内結合線と内直徑線に於ける控除の係數となし毎に計測し得たる内結合線より此係數を減じなば以て本邦婦人骨盤入口の直徑を推知するに足るべし、神の報告によるも内結合線は一、九仙迷にして殆んど小金井大澤の者と一致せり

今之を歐洲婦人に比較するにクラウゼ、ウエルトが歐洲婦人に就て計測したる内結合線は共に一二、九仙迷にして、本邦婦人とは一、二仙迷の差ありと雖あいの婦人に比すれば其差〇、八仙迷に過ぎざるを見るべし

小金井及大澤が骨質骨盤入口に就て計測せし徑線は次に記載せる如くにして又氏等は左の如く説明せり

殊にあいの人の骨盤心臓形を呈し多く前方に凸出す弧形線は強き弧形を呈し、廣徑線終點の存する部位は薦骨關節に近接し之より殆ど眞直に耻骨縫際に向て前内方に徑過す、日本人の骨盤に於ては之に反して圓形の度を増し、弧形線は平等に弓狀の彎曲を呈し骨盤入口の最廣部はあいのに於けるよりも前方に進み弓形を描き、耻骨縫際に於て相互に移行す

亦更に人類學上より觀察を下し、日本婦人に就て次の如き人種的評論を試みたりき、あいの人及日本人骨盤の骨盤入口或は骨盤に從て種々の定型に區分し之によりてデーニッツが日本婦人の骨盤に就き計測しウエルニツヒが賛同せし如く種數の苗裔及混種上に於ても疑問の決定は現時尙ほ之を確定することを得ず

男女兩性骨盤の區別として男性骨盤は女性骨盤に比し薦骨岬の強く隆起するは兩人種共に同一なりとす

氏等も亦男女兩性骨盤に於ける骨盤入口の區別に就て論じて曰く
男女兩性に於ける骨盤入口の差異は恰かもあいの人と日本人との如き差

異を呈す詳言すればあかぬ婦人骨盤入口の形状は圓形に近きを以て男女骨盤差異は多少減少するものとす

骨盤入口の形状に關係し最大横徑線は圓形なる骨盤にありては前方に進み、心臟形の骨盤にありては後方に退く所以なり斯くして大横徑線は男性日本人骨盤にありては多く左右の斜徑線の交叉點の後方に位すべし故に骨盤は性に從ふよりも寧ろ種族に從ふて差異を呈する者とす

フェルノキが説述せし女性骨盤の骨盤入口最大徑線は前方に男性骨盤にありては後方に位すとの報告は女性骨盤に於ける入口の形状通常圓形なりと云へる點と相一致す

以上記載せし如く小金井及大澤が計測したる外直徑線一八、五仙迷より直徑線一〇、七仙迷を減ずるときは七、八仙迷の差を生ずべく此差は以て本邦婦人に於ける耻骨縫隙及腰椎並に軟部の厚徑と見做すべし之を歐洲婦人に比較するにポウデロツクの係數八、五仙迷に比して〇、七仙迷の差ありスツチの係數九、二仙迷に比すれば一、四仙迷の差あるを見る、今本邦婦人に於ける各計測者の外直徑線に就き、該係數七、八仙迷控除して得たる假定内直徑線の小金井及大澤に近似せる者より序を逐ひて列記すれば左の如し

計測者	外直徑線	假定内直徑線	第二以下内徑の第一との差
小金井大澤	一八、五〇	一〇、七〇	〇
緒方(總平均)	一八、五〇	一〇、七〇	〇
楠田	一八、六三	一〇、八三	〇、一三
緒方(第一回)	一八、一九	一〇、三六	〇、三三
楠	一九、一七	一一、三七	〇、六七
緒方(第二回)	一九、三五	一一、四五	〇、七五
木下	一九、三五	一一、五五	〇、八五

上表に由るに小金井及大澤の成績に比し其差の最も大なるものは木下の〇、八五仙迷にして、最も小なるものは楠田の〇、一三仙迷なり而して余が總平均數に於ける差は零なり、亦共に著しき徑庭なきを見るべし、

勞働の骨盤發育に影響を及ぼすは極めて著しきものなり予輩は或る地方(京都府下愛宕郡高野)の勞働婦人と部會(主に大阪)に於ける非勞働婦人との骨盤外徑を對比し如斯き勞働に關する骨盤變化の理由を説明せんが爲めに左に婦人の骨盤發育に就て少しく述ぶる所あらんとす
蓋し初生兒の骨盤なるものは壓力の影響を蒙らざるにより成人に於ける

ものと著しき差異を有すべし即ち此際に於て男女兩性の差異は殆ど存することなく薦骨は縦徑に位し薦骨岬は高くして僅かに突出し腸骨翼は殆ど鉛直にして兩腸骨節間と兩前上棘間とは距離の差極めて少なく骨盤入口は稍圓形にして直徑一〇、〇横徑一〇、六の比例を現はし(大人は直徑一〇、〇横徑一二、七〇比例をなす)骨盤出口の横徑も亦大なりとす

初生兒の骨盤は元と如斯き形況をなせりと雖も軀幹の重量は背椎によりて薦骨上加はり薦骨岬を骨盤内に壓下して之を突出せしめ腹部内臓の壓力は腸骨翼を外方に壓排して之を傾斜せしめ加ふるにS字狀の彎曲を營ましむべく大腿骨は壓力を髌臼部に及ぼして小骨盤の側壁の内方に壓入して出口の横徑を減縮せしむ此故に若し人生途も勞働することなくんば其骨盤は永く初生兒の形狀を保綴す可し

之が恰好なる一例はグルトによりて報告せられき氏は腦水腫を患ひたる三十一歳の婦人生活中毫も運動を營むことなく、偶像の如く就寢せしが其骨盤は依然として初生兒の形態を保ち、薦骨は高く後方に位し、横徑は直徑より短かく兩股關節は脱臼し骨盤の出口の横徑は著しく大なるを見たりと
若し又軀幹の働のみ薦骨上に作用し髌臼の壓力を缺くときは所謂坐位骨

盤をなして直徑線は短縮し横徑線は延長し扁平骨盤の狀をなすべし、ホルズトは此種の骨盤を経験せり、即ち四十歳の婦人下肢を缺如し髌臼は存せず扁平骨盤にして横徑著しく大に左右の無名骨は直立の位置を取り、兩坐骨結節の距離一五、〇仙迷を算し、兩腸骨節間は僅々二、五仙迷に過ぎずして、該婦人は只坐位を取ることを得たりと云ふ

先天性股關節脱臼にありても亦髌臼部の壓力不完全なるが故に之と同一の狀態を現はすべし尙復病性骨盤にありては亦下肢を使用すること遲きにより、骨盤は其横徑を増加して扁平となり髌臼は側方に位せずして前方に向ひ、髌臼部と耳狀面との間に屈曲を呈するに至るべく骨軟化症性骨盤にありては軀體及大腿の壓力に由り軟化せる骨質骨盤は其内腔に陥入すべしシユロイデルによれば高加索人種骨盤の横徑廣き所以は恐らくは未開人種に於けるよりも下肢を使用すること遅く且つ弱きによりなるべしと云へり

近時コニコウは二十歳以下の男女百二十名に就き興味ある研究をなせり氏は腸骨前上棘並に腸骨節の距離大轉子間の距離及外直徑線を計測せるに最初第一年中は各徑線の發育平等にして、第二年乃至第五年に於ては自餘の徑線に比すれば直徑線の増大する少なく第六乃至第十年にありては之に反

して外直徑線の増大著明なることを見第十一乃至第二十年にありては男女に從て其發育の状態を異にすれども就中第十四乃至第十六年に就ては女性骨盤の發育すること殊に著しかりしとニコウは此現象を説明して曰く第一年中に於て骨盤の發育平等なるは殆ど全く軀幹の壓力を缺如せるによると雖、次の時期に達すれば壓力加はりて直徑線の増加を妨げ更に第三期に至りては兒童學につき坐位を取ることの多きが爲めに直徑線をして比較的に増大することを得せしむ第十乃至十一年にして女性骨盤の形成を始め、第十四乃至十六年に於て其極度に達す、又男性骨盤は第十九乃至第二十年にして横徑の増加最大點に達し、女性骨盤の上に出づと雖直徑線は遂に之に及ぶことなしと云ふ。

以上説述せし理論と實例とにより骨盤に及ぼす壓力即ち勞働の其發育に影響あるを詳かにすることを得べし予輩は之を観察せんと欲し自ら高野に至り其風習及骨盤の造構を視察せるに該地方婦人は専ら農耕を業とし山野に勞働して男子と同一の力役に服せり、殊に其最も奇異なるは處女と雖物品を運搬するに負荷することなくして頭上に載戴することは是なり而して其就業の際常に載する所の重量は十貫乃至二十貫乃至して十四貫を以て通常

となせり、予輩は該地の婦人四十四名に就き調査せし成績を都會即ち主として大阪市の婦人に就き調査せし成績に比較すれば次表に示せるが如く、骨盤の發育一般に強大なるを發見せり。

	高野地方 四十四人	大阪地方 四百九十一人
外直徑線	一八、九三	一七、七六
兩肋骨前上棘間	二五、六四	二三、六九
兩肋骨間	二七、六六	二五、三六
兩大轉子間	二六、七九	二七、五〇
外斜徑線	二二、五五	二〇、〇二
腰圍	七九、五九	七七、七一
身長	一四四、〇四	一四六、五三

然り而して各個の徑線は又其發育度を異にするを見る即ち大阪地方に於ける婦人の徑線を一〇〇、〇として算すれば其對照左の如し

高野婦人	一〇六、五八
大阪婦人	一〇〇、〇

兩腸骨前上棘間	一一一、五七	一〇〇、〇
兩腸骨髀間	一〇六、一四	一〇〇、〇
兩大轉子間	一〇四、六九	一〇〇、〇
外斜徑線	一〇五、一四	一〇〇、〇

又之を實驗に徴するに身長の大なるものは通常骨盤外徑線も亦必ず大なるものとす我邦婦人の平均身長は一四六、仙迷にして予輩は此被檢者に就き一四六、仙迷以上及以下の二種に別ち之を計算するに次表の如し

身長一四六仙迷以上の者		身長一四六仙迷以下の者	
(甲)大阪地方	(乙)高野地方	(丙)大阪地方	(丁)高野地方
身長	二六〇	二二二	三三
外直徑線	一四七、八〇	一四九、八二	一四二、七四
兩腸骨前上棘間	二八、四〇	一九、三六	一七、八二
兩腸骨髀間	三三、三三	三六、二六	三三、六九
兩大轉子間	二五、五三	二八、五三	二五、一七
外斜徑線	二七、九九	二九、五三	二六、九六
腰圍	二〇、五九	二二、三四	一九、六五
	七六、五〇	八一、〇七	七六、八一
			七六、九五

身長一四六仙迷以上と以下に於ける各徑線の差、

外直徑線	〇、五八	〇、五三
兩腸骨前上棘間	〇、五四	〇、七六
兩腸骨髀間	〇、三五	一、一三
兩大轉子間	一、〇三	一、〇〇
外斜徑線	〇、九四	〇、三四
平均	〇、六八	〇、七三六

都會即ち非勞働婦人に於ては最小差なる腸骨髀間の〇、三五仙迷より最大差なる大轉子間の一、〇三仙迷に至る平均〇、六八八仙迷を算し田舎即ち勞働婦人に於ては最小差なる外斜徑線の〇、三四仙迷より最大差なる腸骨髀間距離の一、一三仙迷に至る平均〇、七三六仙迷を算し此兩差の總平均〇、七一二仙迷なりとす而して各個徑線と身長とは苟も一定の關係を有せざるが如し何となれば非勞働婦人に於ける最小差〇、三五は腸骨髀間の距離にして勞働婦人の最大差一、一三に當り而して乙の最小差は外斜徑線にして〇、三四即ち甲の第二最大差〇、九四に相對すればなり

今更に身長一四六仙迷以上の者に於ける各徑線を一〇〇、〇とし一四六仙迷以下の者の徑線と比較するに其對照は左の如し、

	大阪婦人	高野婦人
外直徑線	九六、八五	一〇〇、〇
兩腸骨前上棘間	九七、二五	一〇〇、〇
兩腸骨前上棘間	九六、六三	一〇〇、〇
兩大轉子間	九六、三三	一〇〇、〇
斜徑線	九六、四二	一〇〇、〇

又非勞働婦人の各徑線を一〇〇、〇とし、勞働婦人に於ける對照を示すと、

	非勞働婦人	働婦人
身長	一〇〇、〇	九八、三
外直徑線	一〇〇、〇	一〇六、五八
兩腸骨前上棘間	一〇〇、〇	一一一、五七
兩腸骨前上棘間	一〇〇、〇	一〇九、二四
兩大轉子間	一〇〇、〇	一〇四、六九

上述せるコニコウの脱及び勞働婦人と非勞働婦人との關係に徴するときは、骨盤の發育状態は年齢と職業とによりて著しき差異を有するものなるを知るべしと雖、今予は之に就て多數の材料を有せざるを以て之を詳論すること能はず、他日を期して更に論述する所あらんとす、予輩は本論の初に於て日本婦人と獨逸婦人との骨盤外徑線を比較し左表の如く其概算數に於て各徑線共に二仙迷小にして唯だ大轉子間の距離は四仙迷小なることを説けり、

	獨逸婦人	日本婦人	一差
外直徑線	三〇、〇	二八、〇	二、〇
外斜徑線	三三、〇	三〇、〇	三、〇
兩腸骨前上棘間	二五、〇	二三、〇	二、〇
兩腸骨前上棘間	二八、〇	二六、〇	二、〇
兩大轉子間	三三、〇	二八、〇	五、〇
腰圍	二八、九〇	二七、八〇	一一、〇

身長 一五八、〇 一四六、〇 一二、〇
 今更に本邦に於ける非労働婦人と労働婦人とを區別せる者に就て、其概數を比較し各徑線の差を示すときは次の如し、

	甲、労働婦人と非労働婦人との差	
	労働婦人	非労働婦人
身長	一五八、〇	一四六、〇
外直徑線	一九、〇	一八、〇
外斜徑線	二一、〇	二〇、〇
兩腸骨前上棘間	二六、〇	二三、〇
兩腸骨櫛間	二八、〇	二五、〇
兩大轉子間	二九、〇	二八、〇
腰圍	八〇、〇	七八、〇
身長	一四四、〇	一四七、〇
		三、〇

乙、獨逸婦人と労働婦人との差

	丙、獨逸婦人と非労働婦人との差	
	獨逸婦人	非労働婦人
外直徑線	二〇、〇	一九、〇
外斜徑線	二三、〇	二二、〇
兩腸骨前上棘間	二五、〇	二六、〇
兩腸骨櫛間	二八、〇	二八、〇
兩大轉子間	三三、〇	二九、〇
腰圍	八九、〇	八〇、〇
身長	一五八、〇	一四四、〇
		一四、〇

兩大轉子間	三二、〇	二八、〇	四、〇
腰圍	八九、〇	七八、〇	一一、〇
身長	一五八、〇	一四七、〇	一一、〇

由是觀之は一般に於て日本婦人の骨盤外徑線は獨逸婦人より二仙迷(但し大轉子間の距離は四仙迷)を控除するに
より殆ど適當なる數を得べしと雖勞働する否とは骨盤
發育に大なる關係を有するを以て又各人の職業により著
しき差異あることを知らざる可からず

日本婦人骨盤の内徑線

予輩は未だ日本婦人の骨質骨盤に就て其内徑線を計測
するの機會を得ざりしが故に茲に其如何を論述すること
能はざるも小金井及大澤の調査せる所に基き少く述ぶる
所あらんとす

小金井及大澤の計測する所によれば日本婦人骨盤入口

の各徑線は左の如し、

直徑線	一〇、七
横徑線	一一、三
斜徑線	一三、五
獨逸婦人	一〇、七
日本婦人	一〇、七
小金井大澤	一〇、七
マルチン	一〇、七
直徑線	一一、〇
横徑線	一二、三
斜徑線	一三、五

即ち日本婦人は其横徑の著しく小なるが故に全形心臟
形をなし獨逸婦人の横橢圓形をなす者とは大いに其趣を
異にせるを見るべし是れ本邦に於ける分娩の概して迅速
に且つ容易なる所以ならんか
予輩は從來施行せし千有餘回の骨盤計測中僅かに二回

體格矮小發育不良なる婦人に於て頗る高度なる佝僂病性扁平狹窄骨盤と又一回體格偉大發育佳良なる婦人に於て斜徑狹窄骨盤とを發見せるの他は稀に時々輕度の一般狹窄骨盤を發見せしに過ぎず之を以て見るも骨盤異常の本邦婦人に稀有なるを知るべし

予は今予の所論を終結するに臨み尙一言の特記せざるべからざるものあり予が上述せる如く骨盤異常の稀有なるは我國婦人の爲めに實に至大の幸福と云はざるべからず是れ蓋し何等の因由よりして然る乎は未だ容易に斷言すること能はずと雖茲に至りて予輩はウエルニツヒの言の誣ならざるを認めざる可からず氏は曾て日本婦人に就て經驗せし所に基き其分娩は概して迅速にして且つ容易なることを述べ且つ日本婦人と羅馬人種との間に誕生したる女子の分娩は困難となりアングロサクソン人種との

間に生誕したる女子の分娩は更に困難となるべきことを説き歐洲婦人の分娩困難なるもの多きに比し其原因は雜婚に歸すべきものに非ざるなきやを唱道せり

之を地誌に徴するにウエルニツヒが説の如く凡て雜婚の行はれざる亞細亞及亞非利加地方に於ては骨盤の異常少なくして分娩容易なるも之に反して雜婚の多數に行はるゝ歐洲地方に於ては異常骨盤の多數にして従つて分娩も頗る困難なる者多きは實際目撃する處なりウエルニツヒは更に如斯きの事實に徴し此等の邦國に於ては將來產科學發達の要なしと揚言するに至れり

夫れ然り予輩も亦此説に賛同せざる可からず然りと雖我邦の如き駸々として進歩し泰西の文物日に輸入せられ歐洲の強邦と比肩すべきに至る今日世の開化と伴ひ彼と均しく雜婚の頻繁に行はるゝに至ることは蓋し遠きに非

ざるべく我邦に於ける産科學は決してウエルニツヒの説
の如く發達の要なしとす可からず尙進んで幾多の問題を
研究し斯學の上に多數の貢獻を興へんことは予輩が負ふ
べき重大なる責任なりと言はざるべからず是れ茲に予輩
が本邦婦人に就て骨盤を計測し其成績を公にする所以な
り但し其材料未だ豐饒ならず尙多數の緊要なる問題に
て調査の及ばざるものなきにしもあらず予輩は我邦産科
専門家は此等の問題に就きて深く研究に注意せられんこ
とを冀望せざる可からず

第三編 正規妊娠及其取扱法

第八章 正規妊娠

妊娠とは婦人の體內に胎兒を養成するの時期を云ふ
而して妊娠を營むは生殖器成熟して月經の來潮せし時よ
り其機能廢絶して月經閉止するに至るの間におり妊娠の
全經過は四十週即ち二百八十日に至る通常之を十月と
なす故に妊娠暦の一箇月は四週即ち二十八日なり之を太
陽曆に由り算すれば九箇月と七日に相當すべし

第九章 月經

月經は生殖器成熟の徴候にして大約二十八日を以て
反覆來潮する所の子宮出血なり其經血は稀薄暗赤色を呈
じ凝固するの性なく其量凡そ九十瓦乃至二百四十瓦を有

す此の如く規則正しく月經の潮來する所は卵巢に於けるグラフ氏胞が整順に四週の反覆を以て破裂するにあり即ち該胞の破裂に際し其刺戟に由て骨盤内臓器の充血を來し子宮に於ては殊に甚だしく爲めに分泌増盛し且つ血液は血管より漏れし以て月經を現すものとす

月經初發の年齢は氣候人種及び生活の狀態に従て一様ならず通常熱帯地方の婦人は寒帯地方のものに比すれば早く貧者及び地方の住民は富者及び都府の婦人に比するに概して遅きを常とす本邦に於ける平均年齢は十四年八箇月なり此の如く始めて月經來するの時期を生殖器官生熱期或は春機發動期又は思春期と云ふ而して婦人凡そ四十五歳に至れば月經閉止し生殖器及び全身の諸器は漸次に萎縮に赴くべし之れを月經閉止期或は更年期と云ふ月經の持続すべき年齢は平均三十五年となせども其初發

の遲速によりて差異あり一般に早きものは持続すること長く晩きものは短しとす

第十章 人卵

人卵は圓形細小にして其大さ凡そ二密迷を有し肉眼にては殆んど認め能はざる程なり其中には一の核あり之を卵核と稱し將來胎兒を形成するものなり卵核の周圍には蛋白質様の液を充たし胎兒の營養の原基となるものなり

第十一章 精蟲

精蟲は男子生殖器より製せられ其分泌物たる精液に混じり排泄せらる其長さ〇〇五密迷に達し蝌蚪狀を呈し頭、體、尾の三部に區別せらる其尾は運動性を有するが故に精

蟲は能く自ら運動を営み得べし而して亞爾加里性液中に在りては其運動活発となり酸性液中には弱くなり遂に死亡す此故に膈の酸性分泌物中に在る時は少時にして死すれども子宮の亞爾加里性分泌物中には一週間の久しきに至り尙ほ其運動を存するを見る可し

第十二章 受胎

男子の精液

男子の精液は交接によりて膈内に射入せられ其中心にある精蟲は自己の運動により膈と子宮腔とを経て輸卵管若くは卵巢に至り女子の卵子と相會合す通常は輸卵管の盡腹に於て會合するものなれども稀には子宮腔に於てするに於てあり此の如く卵子が精蟲に會合するを受精と稱し茲に於て婦人は妊娠すべし其兩者相合したるを妊娠卵と云ふ妊娠卵は輸卵管の作用により子宮腔内に達し此部

の精膜に附着し以て發育するなり而して既に述べたるが如く卵子は一回の月經時に於ては各卵巢より一個宛を排泄するに過ぎざれども精蟲は精液中に多數を混じりて子宮腔内進入するものも多し然れども卵子に會合して其中に入るものは僅かに一絲にして若し一卵中に二絲以上進入せし時は數胎を生ず又數胎は二個の妊娠卵より成るものあり精蟲若し卵子内に進入すれば其尾は消失して頭部のみを殘し頭部は又卵子内に存する卵核と合し始めて胎兒の原基を造つるに至るものなり

第十三章 妊娠卵の變化

妊娠卵が子宮腔内に附着する時は其粘膜の増殖によりて全く被包せられ漸次に變化を呈す即ち始め卵内の一部に橢圓形の肥厚部を生ず之を胚板と云ひ胎兒を生ずる

蟲は能く自ら運動を營み得べし而して亞爾加里性液中に在りては其運動活發となり酸性液中には弱くなり遂に死亡す此故に腔の酸性分泌物中に在る時は少時にして死すれども子宮の亞爾加里性分泌物中には一週間の久しきに至り尚ほ其運動を存するを見る可し

第十二章 受胎

男子の精液は交接に由りて腔内に射入せられ其中心にある精蟲は自己の運動により腔と子宮腔とを経て輸卵管若くは卵巢に至り女子の卵子と相會合す通常は輸卵管の壺腹に於て會合するものなれども稀には子宮腔に於て會合することあり此の如く卵子が精蟲に會合するを受精と稱し茲に於て婦人は妊娠すべし其兩者相合したるを妊娠卵と云ふ妊娠卵は輸卵管の作用により子宮腔内に達し此部

の粘膜に附着し以て發育するなり而して既に述べたるが如く卵子は一回の月經時に於ては各卵巢より一個宛を排泄するに過ぎざれども精蟲は精液中に多數を混じつて子宮腔内に入するものも多し然れども卵子に會合して其中に入るものは僅かに一絲にして若し一卵中に二絲以上進入せし時は數胎を生ず又數胎は二個の妊娠卵より成るものあり精蟲若し卵子内に進入すれば其尾は消失して頭部のみを殘し頭部は又卵子内に存する卵核と合し始めて胎兒の原基を造くるに至るものなり

第十三章 妊娠卵の變化

妊娠卵が子宮腔内に附着する時は其粘膜の増殖によりて全く被包せられ漸次に變化を呈す即ち始め卵内の一部に橢圓形の肥厚部を生ず之を胚板と云ひ胎兒を生ずる

粘膜を床状脱落膜と稱し、後來胎盤の母體部をなすものなり。其周圍に於ては殊に増息突起し、終りに全體部を包被するに至る之を翻轉脱落膜と云ひ、其他喇叭管開口部を除き、全子宮腔内を被覆し、内口に至りて終止する。粘膜の増殖せるを眞脱落膜と云ふ。妊娠第三箇月に至れば最も厚し、雖も爾後漸次菲薄となる。又眞脱落膜と翻轉脱落膜との間隙は三箇月に至れば消失し、兩膜互に密着して遂に一葉となる。絨毛膜は脱落膜と羊膜との中間にありて、卵の外層より生ず。初め其膜の外面には絨毛を現はし、以て營養物を周圍より取るの作用をなすも、後には胎盤部を除くの外漸次に其絨毛を消失し、二箇月末に至れば透明の薄膜をなすものなり。

羊膜 は最内層の卵膜にして、胚板周圍の膜より成り、始めは胎兒に密着すと雖も、羊水其内に蓄積するに及びて漸く擴張し、全卵の内面を被ひ、胎盤の臍帶附着部に至れば翻轉して臍帶の鞘膜となり、胎兒の臍部に達するものとす。

第二項 胎盤

胎盤 は扁平卵形なる海綿狀體にして、青赤色を帯び、妊娠の末期に至れば厚さ殆ど三仙迷廣さ十六仙迷乃至二十仙迷に達し、其重量凡そ五百瓦を有す。通常は子宮體の前壁若くは後壁に附着し、其附着面は凹不平にして、縷狀を呈し、子宮壁と密着す。此部を胎盤の子宮面と云ふ。胎兒に對する一面は滑澤なる羊膜を被むり、數多の血管を現し、通例其中央に臍帶を附着せしむ。此部を胎盤の胎兒面と稱す。胎盤の効用 胎盤は胎兒と母體との血液成分の交換を媒介するものにして、胎兒は之によりて身體の不要物を母體の血中に送り、更に營養物を母體より攝取す故に胎盤は

大人に於ける肺及び胃腸の作用を併用するものにして極めて緊要の部なり

第三項 臍帯

臍帯は胎兒の臍より出で胎盤に達し茲に附着す其附着部は胎盤の中央なるあり或は邊縁なるあり或は更に邊縁を離れ卵膜中に於てすることあり然る時は異常とす臍帯の長さは五十仙迷にして大さは小指に等しく捻轉して螺旋状をなし胎兒側より見る時は右より左に向ふて捻轉するを常とす其構造は臍帯鞘ワルトン氏酸肉二條の臍動脈一條の臍靜脈等より成り胎兒の生活する間は臍帯動脈の爲め絶えず搏動を現はす又子宮腔内に於て臍帯は著るしく縲回するが故に時として胎兒の四肢頸部等に纏絡することあり其他臍帯はワルトン氏酸肉の堆積血管の屈

曲等によりて其一部突出し或は又自ら結ばるゝことあり前者を假結節と云ひ後者を眞結節と云ふ

臍帯動脈及靜脈

二條の臍動脈は胎兒の全身を營養し不要分に富める血液を入るゝものにして臍より出で胎盤に達し漸次樹枝狀に分枝して毛細管となり母體の血管と密接し是より臍靜脈の末梢に移り漸々集合して一條の臍靜脈となり臍に入りて大靜脈に連り以て新鮮の血液を身體に供給するものなり

第四項 羊水

羊水は又胎水と稱し羊膜腔内を充盈す而して初めは清澄なれども後漸く混濁す其量は妊娠の終りに至れば五百乃至一千瓦あり又羊水は時として羊膜と絨毛膜間に貯留することあり之を中間羊水と云ふ

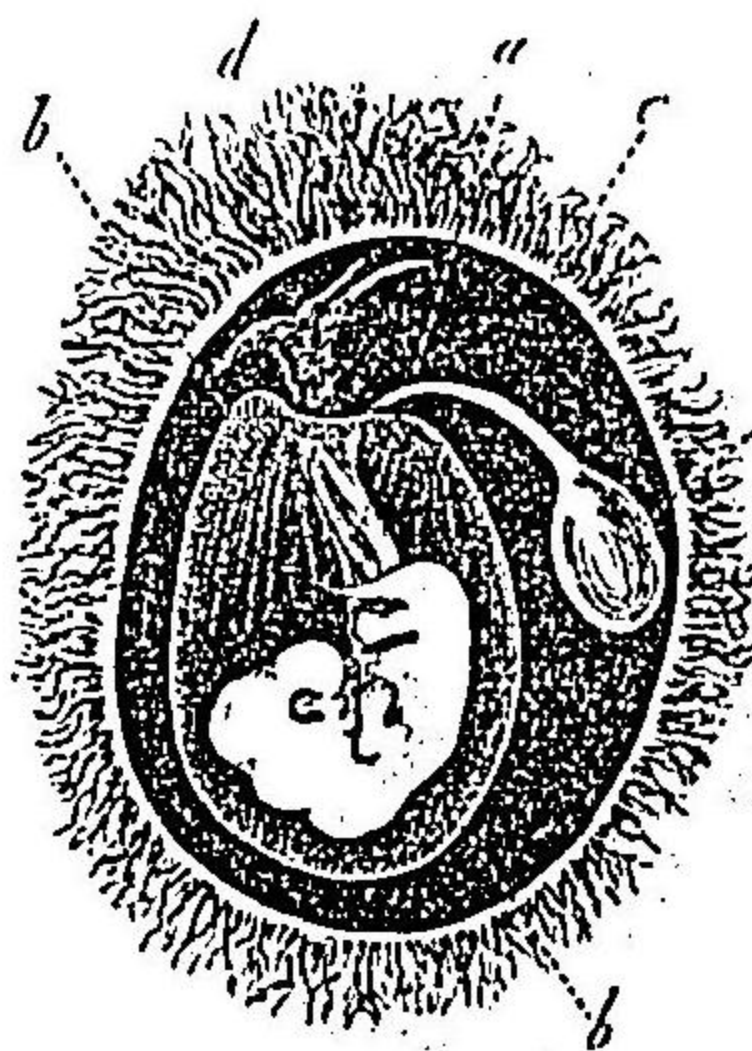
羊水の効用は左の如し
 (一) 胎児の運動を自由ならしむ即ち其氣息すべき腔間を造るに由る
 (二) 外來の襲力即ち衝突打撲等を防ぐ是胎児をして卵膜及び子宮壁と充分に隔離せしむるに由る
 (三) 胎児の運動を母體に感せしむることを少からしむ
 (四) 胎児各部分或は子宮との癒着を防止す
 (五) 分娩時には胎胞を滑澤にす
 出によりて産道を滑澤にす
 後産とは胎盤臍帶及び卵膜の三者を總稱するものに於て胎児分娩後に産出するを以て名く

第五項 胎兒

胎兒 は其初め蛆の如く見ゆるものにして漸次に發育

し以て人體の形を成すに至る其順序は甚だ正しく之に因りて受胎後凡そ何箇月を経たる胎兒なるかを定め得可し
 今妊娠各月に於ける胎兒の發育順序を述べれば
 第一箇月末に於ては身長凡そ一仙迷三分餘にして強く曲り圓き頭と尖りたる尾端を有し眼は頭部の兩側に於て僅かに暗色の點となりて顯はる全卵子凡そ鳩卵大なり
 第二箇月末に於ては身長凡そ四仙迷一寸三分餘に達す

圖二十二第



(大 然 天)

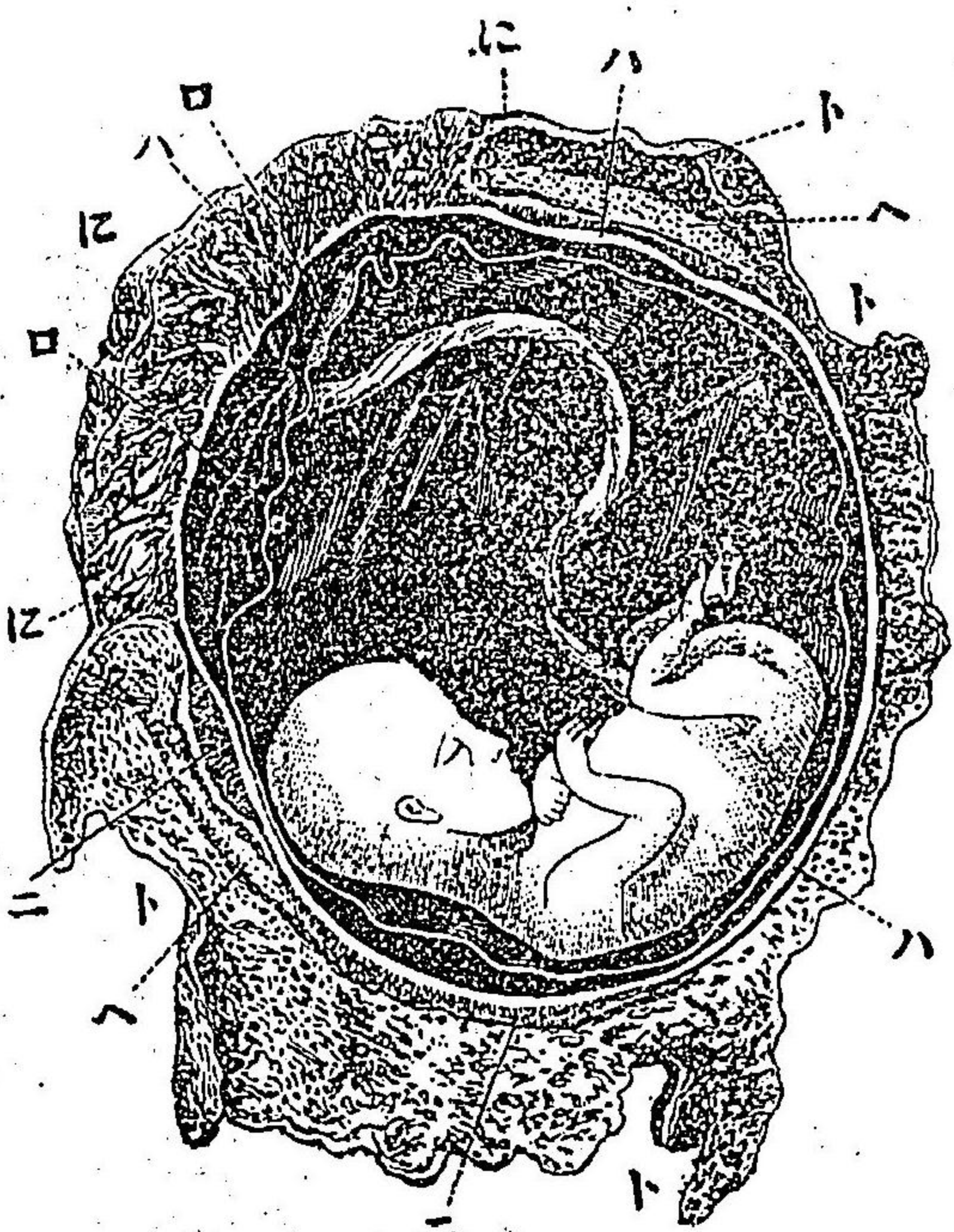
- a 臍帶
- b 羊膜
- c 脫落膜
- d 絨毛膜
- e 胎胞

窩として認むべく鼻孔口裂耳孔等を成形し四肢亦發生して既に其關節を生じ全卵は鶏卵大に至る
 第三箇月末に於

受胎後六週に於ける卵内胎兒

ては身長凡そ九仙迷(二寸九分餘)にして眼裂を生じ手指と足趾とを區別すべく全卵は鶏卵大なり但し胎兒は第二箇

圖三十二第 胎後二十週の胎兒及卵 (天然大)



口 羊膜ノ胎盤附
着部ニテ胎盤
トナルモノ
ニ 絨毛膜
ハ 床狀脱落膜
ト 脱落膜
ニ 胎盤

月末に至る迄は絨毛膜の絨毛によりて營養物を母體より

受くるも第三箇月に達すれば絨毛は胎盤形成部を除くの外漸次消失し遂に該月の終りに於て胎盤は形成せられ胎兒は是より營養物を攝取す

第四箇月末に至れば身長凡そ十六仙迷(五寸二分餘)と成り指趾の尖端に爪を發生し外陰部に於て男女を區別し得べく胎兒は僅かに時々運動するに至る

第五箇月末に於ては身長凡そ二十五仙迷(八寸二分餘)にして頭髮及び皮膚に毳毛を生じ胎兒は自ら活潑に運動を營むべし

第六箇月末に於ては身長凡そ三十仙迷(九寸九分)に及び眼裂僅かに開き皮下には脂肪の沈着を始め全身帶黄色の汚物即ち胎脂(又は胎兒汚垢と云ふ)を以て被はる

第七箇月末に至れば身長凡そ三十五仙迷(一尺一寸五分餘)にして體重平均一千瓦に達し顔は皺襞多くして老人

の如く産出すれば低聲を發して啼き弱き哺乳運動を營む
 而して満七箇月以後に産出せるものは生活し得可しと雖
 も甚だ虚弱なるが爲めに大抵死亡するを免れず時として
 は全く哺乳運動を爲し能はざるものあり
 第八箇月末に至れば身長凡そ四十仙迷(一尺三寸二分)
 體重平均一千五百瓦にして皮膚は潮紅し毳毛多く顔面尙
 皺あり此時期に於て産出せるものは發育完全なれば生
 存し得可し

第九箇月末には身長凡そ四十五仙迷(一尺四寸八分餘)
 體重平均二千五百瓦に達し皮下脂肪増多して全身一般に
 肥ゆる此期に産出せるものは固より生活を保ち得るを常と
 す然れども發育完全ならざるが爲めに死亡すること多し
 第十箇月末に至れば身長凡そ五十仙迷(一尺六寸五分)
 體重は平均三千瓦に達し發育完成して身體頗る豊圓とな

り毳毛消失す成熟胎兒即ち之なり

第十五章 各月に於ける胎兒の身長

并に體重概算法

胎兒の身長及び體重は其概數を示し得るに過ぎず殊に
 體重を然りとす何となれば同日月を経過せるものと雖も
 其大小は各兒によりて同一ならざればなり而して各月に
 就き其身長を算知するには即ち第一箇月より第五箇月に
 至るまでは其月數を自乘し第六箇月以後第十箇月までは
 其月數に五を乗するにあり然れども此法は西洋人に於け
 るものにして之を本邦人に適用する時は稍々過大なるを
 以て通常之より凡そ二仙迷餘を減すべきものとす
 但し自乘には同數を二個相乘するを云ふものにして例之ば三に三
 を乘し四に四を乘するが如し故に若し妊娠三箇月とすれば胎兒の身

長は $3 \times 3 = 9$ 即ち九仙迷を得べし然れども六箇月以後に至れば自乗する事なく單に五を乗じて算すべく即ち其八箇月なる時は $3 \times 3 = 9$ 十の四十仙迷を得るが如し

體重計算法

は醫學博士神順次郎氏が本邦人に就て調査せられたるの結果案出されたるものにして即ち各月を悉く三乗し之に第一箇月より第五箇月に至るまでは二を乗じ第六箇月より第十箇月迄は三を乗すべし

但し三乗とは或る數を自乘し尙一度之に同數を乗するを云ふ例之は妊娠三箇月なりとせんに其胎児の體重は $3 \times 3 \times 3 = 27$ として五十四五を得べく第六箇月なる時は $3 \times 3 \times 3 \times 3 \times 3 = 243$ として六十四八五を算出し得べし今左に體重算出表を示さん(表中三乗すべきものは數字の上に〇の字を附せり)

身長	身	重	體	數月
$1 \times 1 =$	1	$1^3 \times 2 =$	2	1
$2 \times 2 =$	4	$2^3 \times 2 =$	16	2
$3 \times 3 =$	9	$3^3 \times 2 =$	54	3
$4 \times 4 =$	16	$4^3 \times 2 =$	128	4
$5 \times 5 =$	25	$5^3 \times 2 =$	250	5
$6 \times 5 =$	30	$6^3 \times 3 =$	648	6
$7 \times 5 =$	35	$7^3 \times 3 =$	1029	7
$8 \times 5 =$	40	$8^3 \times 3 =$	1536	8
$9 \times 5 =$	45	$9^3 \times 3 =$	2187	9
$10 \times 5 =$	50	$10^3 \times 3 =$	3000	10

第十六章 成熟胎兒

成熟胎兒とは妊娠十箇月即ち二百八十日を経たるものにして通常左の徴候を備ふ
 (一) 身長凡そ五十仙迷(本邦人は四十八仙迷)